４世紀の日韓関係

濱 田　耕 策

目 次

要 旨
執筆に際して
本 論
　第１章　百済の国家形成と倭国との関係－七支刀をめぐる日韓関係－
　　はじめに
　　第１節　「七支刀」の研究史
　　第２節　「七支刀」の判読
　　第３節　「七支刀」の歴史像
　　おわりに－七支刀をめぐる国際関係－

　第２章　高句麗広開土王碑文に読む日韓関係と高句麗の国家像
　　はじめに
　　第１節　広開土王の治績
　　第２節　修辞法が頌える大王の“聖戦”
　　第３節　「臣民」と「奴客」
　　おわりに
　　広開土王碑文釈文

　第３章　「碑文」と『三国史記』と『日本書紀』の日韓関係史像
　　はじめに
　　第１節　「碑文」と『三国史記』
　　第２節　「辛卯年」条の理解
　　おわりに代えて－『日本書紀』朝鮮関係記事の基本性格－

付論　古代日韓関係史の誕生－朝鮮半島の民族社会と中国の郡県の設置－
　　はじめに
　　第１節　古朝鮮（衛氏朝鮮）の社会－漢の郡県統治の前提－
　　第２節　楽浪郡と玄菟郡－半島の多様性と列島社会－
　　第３節　郡県の社会動向

第４節　郡県への対応－馬韓と倭 vs 高句麗と新羅の対立軸の発生－
第５節　郡県統治の消滅と百済・倭、高句麗・新羅の対応
おわりに

附録
日本における「七支刀」研究文献目録
日本における「広開土王碑文」研究文献目録

要 旨

本論の基本的な視点は古代日韓関係史を古代諸国家の形成過程のなかで理解すべきことを念頭に置いて、倭国と百済の残存勢力が663年に白村江を舞台に唐と新羅、さらに高句麗との間で百済復興の戦いを展開するに至った国際関係史を展望することにある。

この展望の下で、本論は4世紀の日韓関係に焦点を当てることを課題としている。しかし、４世紀の日韓関係を上記の全体的な展望から切り離して論ずることはさして深い意義を持たない。４世紀の日韓関係は諸小国が王権国家として収束しかつ成長した過程にある関係史である。

この世紀の把握のもとで、本論の付論「古代日韓関係史の誕生」では、４世紀の関係史の前史として韓半島の諸小国と日本列島の諸小国との関係を開始させた求心力として BC108 年に今日の平壌市の大同江左岸地域に設置された前漢の楽浪郡を中心に、所謂「漢の四郡」と３世紀初に楽浪郡を２分して黄海道に設置された帯方郡の２郡を位置づけている。この２郡への諸小国の通交が日韓関係史をそれまでの隣接地域間の交流を連鎖させて遠隔地間交流へと進化させ、それ故に文物の交流が必然的に経済交流とやがて政治交流の側面を生んできたと理解した。「朝鮮半島の民族社会と中国の郡県の設置」と副題を付したのはこのためである。

ここで、留意したい点は半島と列島の小国社会はそれぞれ巨視的にみれば差異のない社会ではあっても、接近して見るとき多様性を含む社会と政治の小世界であることである。このことはやがて古代日韓関係が高句麗・新羅 vs.百済・加羅・倭国の基本的な関係に進む基層であると理解される。

本論では「七支刀銘文」と「広開土王碑文」に焦点を当て、この同時代史料の解釈を通して、４世紀から５世紀へと移行する古代日韓関係の基本軸とその具体像を考察した。この二つの金石史料は単に古代日韓関係のなかでのみ検討されるべきではなく、古代日韓の政治関係の基盤である中国王朝の対外政策との関係においても検討されるべきであることは言うまでもない。そこで、これまでの諸研究を検討し、「七支刀銘文」からは「372年春に百済の近肖古王は東晋に遣使して“鎮東将軍領楽浪太守百済王”に冊封されたことを契機として、既に泰和４年(369)に東晋で鋳造されていた“百兵を辟（しりぞ）ける”呪力を持つと祈念された七支刀を東晋から下賜されたと推考されるが、高句麗と興亡戦の最中にあった百済王と世子はこの呪刀の七支刀を東晋から下賜された国際関係の意義を倭王とも共有すべく、これを仿製し、この経緯を裏面に象嵌した百済製“七支刀”を倭王に贈った」と、解釈した。

かくて、高句麗とその影響下へ進んだ新羅に対抗する百済と倭国と加羅の関係は時代の進行とともに相互に固く結びついて行ったのであり、その関係のひとつの頂点を伝える史料が「広開土王碑文」である。碑文は神話を冒頭に掲げて高句麗王権の正当性を称揚し、広開土王が戦績をもとに築いた高句麗中心の国際関係を銘記する。ここには高句麗・新羅 vs.百済・倭国・加羅の基本関係の固さと即応的な相互の展開を読みとることができる。

また、第３章では同時代史料と中国史書に記録された古代日韓関係史像と後世の編纂史書である『日本書紀』と『三国史記』の関係史像との整合的な理解は可能かどうかの問題と課題を検討し、編纂史書のなかでも『日本書紀』の秘められた史料性を検討すべきことを述べた。

執筆に際して

「歴史は現代との対話である」とのＥ・Ｈ・カーの言葉は歴史を考え、また歴史に学ぶものにとっては的を射た名言である。

ところが、対話者の立つ「現代」と対話者とはそれ自体が歴史の中にある。それ故に、「歴史との対話」から導き出される歴史像、さらにはここに立脚する歴史認識は全くの不変ではない。

今日、古代の日韓関係史に向けられた歴史像を注視するとき、日本の考古学界や歴史学界における関係史研究の歴史の長さとそこから得た研究の蓄積が豊富である。その反面、韓国の学界では日本での研究蓄積に潜む研究視角に向けられた批判的視角からの研究が陸続として生まれてきている傾向である。

日本古代史学界における顕著な傾向は、初期には、『日本書紀』のなかで物語れる「神功皇后の三韓征伐」譚に誘因された「大和朝廷による朝鮮半島南部地域の征服」とこれによってもたらされた「高句麗、百済、新羅の大和朝廷への朝貢」の開始とその維持のための大和朝廷による朝鮮半島政策と言う歴史像、所謂、皇国史観の古代日韓関係史像であった。

そして、1945年以降、皇国史観の縛りが解かれるや、日本古代の国家の形成とその展開を世界史の中で考察する視角から、故江上波夫の「騎馬民族征服王朝論」に代表されるように、日本古代史を北・東アジア諸民族の歴史と関連づけて考察する広い視角が支持されてきた。この視野の拡大とともに 1940年代に「京城帝国大学」で日本人歴史学者のもとで朝鮮史研究を始めた朴時亨、金錫亨のふたりが1960年代にこれまで自ら秘かに懐いていたであろう古代の日韓関係史論を公表された。それは「皇国史観」の古代日韓関係像を逆転する歴史像である。それは「広開土王による倭国への侵攻」と「三韓三国による日本列島内への分国の設置」の論であった。

この歴史論はまず日本の古代史学界に、後には韓国の学界で『日本書紀』に向けられた文献批判を呼び、さらには日韓の考古学的成果に基づく古代の朝鮮半島各地域の国家形成の理解を踏まえた日韓関係史の再構築の研究を呼ぶことになった。この新傾向は今日にも鋭意続けられている。

ところで、韓国の学界では、『日本書紀』に読まれる百済が倭国に送ったとされる王仁や『論語』、『千字文』を代表事例として、百済は倭国より進んだ文化先進国とする文化優越論が根強い。王仁の「千字文」将来説には「千字文」は王仁より後世の作であることや『日本書紀』の歴史構成を批判的に検討する文献学的な批判がある。百済からの知識人や教典の倭国への伝来を百済と倭国との２国間の関係のみに限定してしまい、この背後にある中国王朝との相互の関係に目を向けることの弱さから生まれた「文化優越論」である。百済と倭国との文化交流を説く視角には、いわば朝鮮王朝以来の朝鮮が「倭」に向けた「小中華」の意識が潜んでいるように思われる。

しかし、伝統的な朝鮮の「小中華意識」は唐が新羅を「君子国」と評した事例や、朝鮮時代に自らを「東方儀礼之国」と認識した事例等、枚挙にいとまがないが、この意識の根底には周の武王によって東方朝鮮の地に封ぜられた「聖人箕子」が民に「八条之教」と農業・養蚕・機織りを教えたという中国古典にみられる東方聖地の評価にあることが忘れられ易く、「東アジアにおける韓国古代史」の視点が弱いと言わざるを得ない。

このように古代日韓関係史像は、無意識のうちに自己本位の視野から関係史を軍事的な強弱、或いは文化の優劣や国家形成の先後を競うかのように研究成果が読み取られ、またその方向から批判が繰り返される傾向があることは否めない。

隣国との関係史像、なかでも古代の関係史像は現代の国家と文化のアイデンティティの認識にも深く

関わる側面があるように思われる。歴史認識論争が生まれる所以である。この深刻な問題に対して、実証史学の成果は即効性を直ぐにも発揮するものではないが、長く有効である。

本報告は今日にも垣間見られるこの古代日韓関係史研究の抜けがたい一面を克服することを自ら努める故に、古代日韓関係史のある特定の問題を解明することに力点を置かず、長い歴史過程のなかで古代日韓関係史から今日何を学ぶことが出来るのか、と言う歴史学の根底的な課題から古代の日韓関係史の全体像とその基本構造を考察するものである。

本　論

第１章　百済の国家形成と倭国との関係－七支刀をめぐる日韓関係－

はじめに

百済の国家形成は漢城地域に始まることは、今日の大韓民国ソウル特別市松坡区内の風納土城や石村洞、芳荑洞一帯の古墳群を形成した過程から考察されるが、文献には３世紀末の『三国志』巻30・烏丸鮮卑東夷伝・韓（以下、『三国志』・魏書・韓伝と略称する）に馬韓 55 国の中の「伯濟國」として現れる。55 国の国名が多くは卑離國などのように固有名を漢字音で書き取った借音表記であるが、伯濟國は好字を使って表記されている。このことは、この地域が楽浪・帯方の２郡に漢江の大河を夾んで接しており、『三国志』・魏書・韓伝に「漢時属楽浪郡、四時朝謁」とあるように、２郡との政治・文化の交渉が馬韓の中の「臣濆沽」など臣字を冠した４つの小国とともに密接であったことを推察させる。

３世紀には馬韓の諸国が晋に盛んに通交したことは付論第４節に説くところであるが、馬韓の総称のなかから百済の国名が中国史書に初めて現れるのは『晋書』巻 109・慕容皝載記においてである。即ち、咸康八年(342)に皝の記室参軍であった封裕の諫言のなかに、「句麗、百済及宇文、段部之人、皆兵勢所徙、非如中国慕義而至、咸有思歸之心」とあるが、また、同巻９・簡文帝に「咸安二年(372)春正月辛丑、百濟・林邑王、各遣使貢方物」とある。また、百済王が「七支刀」の銘文のなかで倭王に向かって「百濟」と自称したのもこの頃である。本章では、かの「伯濟國」が馬韓の総称に埋もれず、「百済」の名でもって倭王に外交を行った日韓関係を考察する。

さて、４世紀の日韓関係を考える時、後世の編纂書である『日本書紀』や『三国史記』に依拠するまえに、同時代の文字史料である「七支刀銘文」と「広開土王碑文」の研究成果が信頼度の高い出発点となることは言うまでもない

しかし、金石文の常であるが、1600 余年にもなる風雪のなかで、このふたつの金石文は自然的なあるいは人為的な文字の剥落によって判読が困難な部分が少なくない。

本章では、まず４世紀の日朝関係の歴史像を解明する研究において重要な位置にある「七支刀銘文」のこれまでの論点を踏まえて卑見を提示したい。(参考文献は別編の『日本における「七支刀」研究文献目録』を参照)

第１節　「七支刀銘文」の研究史

七支刀は今日、奈良県天理市杣之内に鎮座する石上神宮の宝庫に保存されているが、明治６年(1873)に同社の大宮司に任命された菅政友がこれを発見し、「六叉鉾」の名称で公表したことから世に広く知られることとなった（藤井, 1995)。以来、今日に至る七支刀の研究史は神保公子氏によって簡潔に整理されているが（神保, 1973 年, 1975 年, 1981 年)、この銘文が古代の日韓関係史研究に欠かせない史料として、その価値が高まったのは古代日韓関係史像の再検討の必要が喚起された 1970 年代からのことである。

神保氏は、七支刀銘文の研究史を大きく３期に区分する。まず、第１期は「研究が開始された時期で、明治から第二次大戦に至るまで」とする。この期は七支刀に銘文のあることが注目され、銘文の冒頭に刻記された紀年の比定に研究が集中し、『日本書紀』神功皇后紀に記録された「七枝刀」とはこの七支刀

であると見なされたが、そこから進んで研究が歴史叙述には進まず、七支刀が未だ歴史研究の対象外にあった期間と説く。

第２期は、1950年に榧本杜人氏が七支刀を実査し、翌年にも福山敏男氏が実調査を行って銘文研究を発表されたことを神保氏は画期と捉える。両氏によって紀年の「泰和」は東晋の「太和」の異表記であるとする判読が有力となり、また、銘文中に「百済」「倭王」を釈読したことが注目を呼び、七支刀銘文は古代日韓関係史研究を進める上で高い史料価値があることが確認され、また、『日本書紀』巻9・神功皇后摂政52 年(372)条に基づいて、372 年に七支刀が百済から倭国に献上された、とする理解が強まった時期であると、神保氏は把握した。

さて、第３期は1963 年に発表された金錫亨氏の論文「三韓・三国の日本列島内の分国について」(原題「삼한 삼국의 일본 렬도 내 분국들에 대하여」〈『력사과학』1963 年１号、平壌〉）が鄭晋和氏によって和訳され、『歴史評論』(165・168・169 号、1964 年５・８・９月）誌において我が国の古代史学界に紹介されたことに始まる。この金論文は百済王が王の「侯王」、即ち臣下であると見なす倭王に七支刀を下賜したものと説いた。第２期以来つづいた百済王が倭王に七支刀を献上したと見た日韓関係史像を上下に逆転するこの金論文は日本の学界に波紋を起こした。こうして、七支刀銘文の判読とその紀年の再検討、百済と倭国との位置関係の再検討などの問題が研究者によって考究され、古代日韓関係史像の再検討が盛んに進められる緊要な課題となった、と神保氏は整理された。

さて、この第３期は、それまでの学説に再検討を加え、多くの新説が提出されていたが、七支刀が国宝指定の考古史料であることからも研究者は容易にこれを実査出来なかったことに起因する点もあるが、各説は七支刀銘文を慎重に実査検討した上での研究ではなかったことが新学説の危うさであった。

しかし、この間、根気強く実査を希求しつづけた村山正雄氏によって1996 年 12 月に同氏編著の『石上神宮七支刀銘文図録』（吉川弘文館、以下『図録』と略称する）が刊行されたから、精巧な実写真とレントゲン写真が研究者に提供されるに至った。これより今日の第４期の研究史が始まったと言える。研究者が「七支刀銘文」の全 61 文字を慎重に検討できる好資料を得たのである。この図録によった木村誠氏の研究(2000)が発表されたように、「七支刀銘文」の研究は『図録』に基づいて、これまでの成果を検証しつつ確かな論説として進展するに違いない。

第２節　「七支刀銘文」の判読

第４期に木村論文が発表されるまで、「七支刀銘文」は 61 文字で構成されると判読されてきた。木村氏は表面冒頭の紀年の「年」「月」の２字の間が他の字間に比べて開き過ぎることに注目し、『図録』のレントゲン写真のなかで村山の指摘を継承し、「年月」の字間の錆のなかに「＋」字が埋もれていることを確認して、それを「十」字と判読した。これに続く文字格の殆ど消えた字格は、これまでは鋳造時の好機とされる盛夏の五月の「五」字と推読してきた。木村氏はここにも錆の中の文字痕から「一」字を判読し、併せて「年十一月」とする新たな判読を提示した。これには吉田晶氏(2001)が納得したが、木村氏の判読法は『図録』に基づいている点は評価されるが、果たして妥当な判読であるかは後述するようになお疑問が残る。

七支刀は鋳造から今日までの永い年月の間に鉄錆が隆起し、また金象嵌が剥落したために、全く判読が不能となった文字がある。こうした判読不能文字を含みながらも、『図録』を得た今日、旧来にも増して判読は継続すべき作業である。

さて、銘文の判読如何が七支刀研究に留まらず、そこから描かれる古代日韓関係史像をめぐる甲論乙駁の論争を惹起してきた。判読の粗密は歴史像の構成に及ぶのである。即ち、判読の成否は「①銘文61字に向けた視覚的に慎重な判読。②視覚的判読と文献記録との整合性」に係っていると言える。

そこで、「七支刀銘文」の研究成果と論点を踏まえて、『図録』に当たってあらためて 61 文字の判読を整理したい（以下、⬚ は文字の残画から判読される文字。□は銘文の文脈や同類の金石文史料から推読した文字）。

まず、表面34字の紀年は「泰和四年五月十六日丙午」との判読が広く支持されてきた。最初の判読者である菅政友(1907)は年号を「泰始」と判読した。第２字格を「始」と判読するには今日では旁が不鮮明であって、その後、福山敏男(1951)や榧本杜人(1952)が「泰和」或いは「泰和」と判読することになる。しかし、宮崎市定(1982, 1983)は今日不鮮明であるからこそ発見当初の判読を尊重すべきであるとの見識から、菅の「泰始」の判読を支持した。

「泰始」或いは「泰和」の年号は中国の年号に例を求めてその判読の保証としている。即ち、前者は西晋の「泰始四年(268年)」や南宋の「泰始四年(468)」と、また、「泰和四年」は「泰」が「太」と音通するから、やはり東晋の「太和四年(369 年)」の異表記であると理解した。

或いは、星野恒(1892)は「泰初」と判読して「魏代ノ号ナラン」と理解したが、それは「三国魏文帝ノ世ニ泰初アリ」との判断が魏の文帝代の「黄初」或いは明帝代の「太和」や「景初」とで混同した誤解であった。また、喜田貞吉(1919)は「泰初」と判読しながらもそれは『日本書紀』巻 9・神功皇后摂政 66 年に引用された『晋起居注』に「武帝泰初二年」とあることに依拠して、西晋の「泰始」は「もと泰初とあった」のであり、七支刀の紀年を「泰初四年」と判断して、それは泰始四年(268)と同一年であると説いた。勿論ここは判読を控えて「泰□四年」とする慎重な姿勢もある。

一方、「泰和」と判読してこれを百済の年号であるべきとする説もある（金錫亨, 1963。李丙燾, 1976）。また、「奉□」と判読してやはり百済の年号と理解する説も出ている（延敏洙, 1998）。

さて、『図録』では冒頭の「泰」字は象嵌が良く残っており、また文字痕の凹線もかなり明瞭であって、「泰」と判読して間違いない。延氏はこれを「奉」と判読し、続く文字を判読不能として合わせて「奉□」と判読するが、これが中国の年号に見ないこともあってか、「奉□」とは百済の年号であろうと推定するのである。しかし、ここの六画から十画は「⿱⺾丰」とあって、６画の線と７～10 画は中央で交差していないことからも、「奉」と判読することは無理である。やはりここは「泰」である。また第２字では、扁は凹線と縦に残る１本の象嵌から「禾」扁である蓋然性は高い。しかし、旁では七支刀発見当初にか、文字を判読しようとした勢いのあまりにか、表面に掻き傷が数本あって、文字の残画は残念ながら明瞭でない。宮崎市定は前述のように最初にこれに対面した菅政友が「泰始」と読んだ判読を尊重すべきと説いた。しかし、扁には「禾」が読め、旁には掻き傷を含みながらも縦長に「口」を読みとれるから、ここはやはり「和」と判読し、合わせて「泰和四年」と判読できる。

次に月日と時刻である。ここは、高橋健自(1914)が「六月十一日」と判読して以来、「六月」と読まれてきたが、それは「泰始四年」と判読した西晋武帝の泰始四年では『三正綜覧』によれば「六月十一日」が「丙午」に当たって、干支が合致するからであった。やがて、福山が 1946 年以来数度にわたり実調査した判読(1951)以来、「正月」「四月」「五月」の「十一日」「十六日」の可能性が指摘されたが、鋳造の吉日であり、かつ盛夏で火勢が強い月日として慣用される「五月十六日」と判読されてきた。これに続いく「丙午正陽」は象嵌が明瞭に残るから容易に判読される。

だが、その実、高橋は「六」月を読んでいたが、今日では象嵌は全く剥落しており、この部分には掻き擦ったためにか全く文字の痕跡は見られない。しかし、『図録』のレントゲン写真によって、木村は新たに「十一月」を判読した。しかし、「年」と「月」との間隔は木村の指摘するように他所の２字の間の隔たりに比べるとやや広いが、そこは「十一」の２字を収める程ではない。七支刀の表面では各文字の間隔は文字の中心と中心との間では、『図録』の原寸写真によれば約２㎝であって、「年」と「月」の間は約４㎝を得るが、ここに“年「十一」月”の如くに後に続く“「十六」日”の如く２字を間隔を保って象嵌するには「年十一月」の間は狭隘となる。「年十」の間が極めて接近し、これにまた「十一」の間も接近することなって、「年」「月」の間の銘文の字配りは極めて不均一となる。それは象嵌の手違いによる不均一として納得できるであろうか。それとも『図録』のレントゲン写真に読まれる象嵌の残痕は「┤」とあって、これは「十」字の一画の右半分の象嵌が欠けたものとしても、或いは、これは「年」の異体字の下方部とも、また誤刻かとも推定される。ここは鋳造銘に慣用される盛夏の「五」月であろうとの推読はやはり捨てがたい。

つづく「造百練□七支刀」では、「造百練」は象嵌も凹線も半ば明瞭に残り、□には象嵌が下部に「ㅡ」と残るが、判読は困難であって「鉄」や「鐵」、また「銕」と判読されて来た。また「七」は中央部に象嵌の「十」が明瞭に残り、凹線と相俟って「七」と判読される。「支」字は象嵌が残るが、それを藪田嘉一郎(1961)が「政」字と判読した例があるように、「支」字にしては象嵌が「ㅋ」と残っており、「支」字の第一筆と判読することには違和感が残る。しかし、後に続いて象嵌と凹線とが明瞭な「刀」字と相俟って「支」との判読は肯定される。

「出辟百兵」では、「出」字の１,２画の象嵌と凹線が認められるが、それはまた「生」の一、二、三画とも見ることができる。ただ、「出」の３画の凹線を微かに認められるから「生」より「出」である蓋然性が高い。また「辟」字は扁と旁の象嵌はよく残っており、旁は「土」と「羊」の合わせに読め、「辟」と判読される。「百」と「兵」は象嵌の残りは僅かであるが、凹線により「百兵」と明らかに判読される。

「宜供供侯王」では、第一字の「宜」は僅かに残る第３画の象嵌と５,６,７,８画の凹線との構成から、また、つづく「侯王」と連なる常套の連句となるから「宜」と判読されてきた。これに続く二つの「供」では、第１字は凹線が明瞭であり、西田長男(1956)は「復」と、また、『寧楽遺文』(1962)では「備」と判読されもしたが、やはり「供」と判読してよく、第２字は象嵌がよく残っており、併せて「供供」と判読される。「侯」字は象嵌と凹線の残存状態から、歪な字形ながらも「侯」の異体字と推読される。

これに続く文字では象嵌は全く残っておらず、恐らく七支刀発見後に錆を掻き落としたであろう痕にも横線らしきものが窺える。文字の判読は困難であるが、「侯」に連なる文字として福山(1951)以来、「王」であろうと読み、合わせて「侯王」と判読されてきた。まず妥当な判読である。

末尾の「□□□□祥」では、第３字目の「□」に僅かに「一」の象嵌が残るが、これを含む４字分の□は今日では全く判読不能である。早くに実検した福山敏男(1951)は当時の僅かな残画から「大吉」や「大師」と推読した。また、末字は偏に凹線の「イ」が読め、旁には２画からなる象嵌に「┬」が確認され、さらに、この右下部に「＝」の凹線が窺えて、これを合わせて木崎愛吉(1921)以来、「作」と判読されてきた。これに対して、宮崎市定(1982)はこの５字を金石文の常套句として「永年大吉祥」と推読した。末字の現状からこれを「作」のほかにも「祥」とも判読できる余地はある。後述するように、表面の銘文は東晋の皇帝を念頭に置いて、“「百兵」を「辟（しりぞ）」けることが出来るように時を選んで丁寧に鍛造した七支刀は侯王こそ佩刀することが宜しい”と言う呪文の吉祥句を重ねて表現しているこ

とから、末語も「永年大吉祥」と吉祥句で結んでこそ銘文は完結すると考えられるから、この部分の宮崎の判読も生きてくる。

以上の検討から、表面の銘文34字は

「泰和四年五月十六日丙午正陽造百練□七支刀出辟百兵宜供供侯王永年大吉祥」となる。

次に裏面の27字の判読の検討である。まず、「先世以来未有此刀」では、「先」の第１画から４画までと６画に象嵌が良く残っており、次の「世」では１・２・５画の象嵌が残り、凹線から３画も読めるから、ここは「先世」と判読される。また「以」では、左半部に「▽」の象嵌が残っており、これは「魏元鸞墓誌」（秦公輯『碑別字新編』文物出版社, 1985 年）等に見られる「以」の異体字たる「▽▽」の左半分であろうから、ここは「以」と読んで良い。「来」字では２・３画のはねの「八」を横の一画に引き、第４・５画の象嵌は良く残り、凹線からは６・７画が判読されるから「来」字で良い。「未有」では象嵌が良く残っており、判読に問題はない。「此刀」では「此」は「漢樊敏碑」（『碑別字新編』）等に見られる「山」と「匕」の合字、或いは「漢会稽津冢地刻石」（同）の「𠀤」にも近く、「此」の異体字であろう。また「刀」は１・２画の象嵌と凹線とから「刀」と判読して良い。ただ、２画の象嵌の下半分は凹線からずれている。

次に、「百濟王世子」では、「百」は象嵌と６画の凹線とで「百」と容易に判読される。「濟」はこれまで「済」や「濟」、または「慈」や「濨」と判読されて来た。ここは３個の重なった「△」とその左に「彡」の象嵌が確認される。福山敏男(1951)は羅振玉『貞松堂集古遺文補遺巻下』（『羅雪堂先生全集』初編 13 冊、文華出版公司）所収の「天王詔與百濟王銅虎符」に「百〈彡＋△△△〉王」とある例を紹介し、この字体が七支刀に残るこの象嵌と相違しないことを指摘し「濨」と判読した。三品彰英(1962)や田中俊明氏も両者が同じ字体であることを認めている（「百済と北斉」〈千田稔共編『東アジアと《半島空間》』思文閣出版、2003 年１月〉）。しかし、村山は『図録』のレントゲン写真によって字画の下部に縦の２画の象嵌が潜んでいることを読んで、ここは「濟」字であることを示しているが、どうしたことか『図録』の「釈文比較表」に列記された自身の判読では「濨」と判読している。ここは村山氏の確認のように「濟」と判読される。

「王」は１画の象嵌と２・３画の凹線から「王」と判読される。「世」も１・２・４画の象嵌と３・５画の凹線から「世」と判読される。次の「□」は象嵌は全く残っていないが、僅かに凹線が「十」らしく見られ、また削り痕も見られるが、これを「子」（福山 1952）や直前の「世」と連なって「々（おなじ）」の意味から「世」（藪田嘉一郎, 1961）とも判読されてきたが、百済の情勢と文脈からここでは「子」の判読を支持する。

「奇生聖音」では、「奇」字の象嵌は良く残っている。「丘」と「可」を上下に組み合わせた字形であり、これが「奇」の異体字と判読される。「生」は全画の象嵌が残っており、明瞭に「生」と判読される。「聖」は上部に残る象嵌と下部の凹線から「漢樊敏碑」（『碑別字新編』）に見られる「聖」の異体字の「𦣞」と判読されるから、ここは「聖」と判読して良い。つづく「音」は象嵌と凹線がかなり残る。その下部は「日」で良いが、上部は「立」や「亚」と判読されるから、この上下を組み合わせると福山(1951)の「音」あるいは榧本杜人(1954)の「晋」とする判読が続いている。近年では東野治之氏(2004)が「晋」であることを強調している。上部に縦の刻線があり、これを文字の１画と判定すれば「晋」と判読されもする。ここは両者で判じ難いが、「聖音」であれ、「聖晋」であれ、共に百済王と世子が上位者を尊崇する意味であることに注意したい。

「故為倭王旨造」では、「故」字は象嵌と凹線から扁は「古」と読め、旁が「丈」と読まれるから、これを合わせると「大代華嶽廟碑」(『碑別字新編』) にも見られる「故」字の異体字であろう。次の「為」は象嵌が良く残るから「為」と判読して良い。次の「倭」は、象嵌と凹線からは歪な文字である。左に凹線の人偏が判定されるにしても、旁は右下方に歪んだ字形である。この字の後に続く文字は全4画が明瞭な凹線であり、第2画の下半分には象嵌が残っており、これが「王」字と判読され、また、七支刀が日本に伝存していることから、ここを「倭王」と判定して誤りはない。

次の「旨」では、下部は象嵌と凹線から「曰」と判読される。上部は象嵌と凹線のそれぞれ1画が判定される。これまで西田長男(1936)の「替」や福山(1952)に始まって多くの研究者が「旨」と判読してきた。また、宮崎市定は「旨」との判読を承けながらも、それは「嘗」の略体であって、「はじめて」の意味であると理解された。「造」字は象嵌と凹線がともに明瞭であるが、山尾幸久氏(1989)の指摘のように表面の「造」の進繞は波形であったが、この裏面の「造」字のそれは「⊔」と直角である。

「傳示後世」では、「傳」は凹線がよく残っており、人偏とまた旁が「由」とあり、その上部に横線の1画を加えた字画であり、合わせて「傳」の略体と判定してよい。次の「示」は象嵌と凹線から2～5画が判定されるが、その4画の象嵌の下部は凹線から右に外れている。「後」は、人偏の凹線が判定され、旁の上部に1画の凹線が斜めに判定される。次の文字は明瞭な凹線から「世」字と判読されるから、これと熟語となることからも「後」と判読されてきた。

以上の観察から、裏面の銘文27字は以下のように判読される。

「先世以来未有此刀百濟王世子奇生聖音（晋）故為倭王旨造傳示後世」

第3節　「七支刀銘文」の歴史像

七支刀銘文の判読では前述のように困難な文字があるために、その判読から構成される歴史の解釈にはかなりの相違が生まれている。

まず、紀年の「泰和四年」である。東晋の泰和4年は369年である。ところが、七支刀が百済王権の命で製作されたものであれば、記録の上では、百済は3年後の東晋の咸安2年(372)正月に東晋に初めて遣使し、6月には百済王の餘句（近肖古王）が「鎮東将軍領楽浪太守」に冊封されたから、その年以前に百済王が倭王に送る七支刀に東晋の年号である「泰和」を象嵌させることはありえないとの理解が強い。この懸念は尊重すべきであるが、百済王権に参与する中国系の文筆担当者が東晋を尊崇してその年号を使用したとの鈴木靖民氏(1983)の推測がこの懸念を鎮めているかに見える。確かに、楽浪・帯方2郡が朝鮮半島から遼東に撤収された後、2郡の故地では東晋の「永和九年」(353年)や「元興三年」(404年)銘の塼が出土しているが、それらは高句麗王権の発動とは異なる私的な次元での年号の使用例であり、しかも地下の墓室に使用されている。七支刀は百済王権の発動として倭王に送った外交に必須の贈与品であるが、この外交に百済が未だ正朔を奉ずる関係になっていない東晋の年号を使用したとは考えられない。まして、百済の古都である漢城地域からも、また熊津や扶餘地域からも百済が中国王朝の年号を使用したことを示す遺物は発見されていない。百済は熊津遷都後に干支を使用して年月を表記したが、明らかに中国王朝の正朔を奉ずることになった5世紀初以後にも中国の年号を国内的に使用した遺物を今日まで見ない（濱田「百済紀年考」『史淵』142輯, 九州大学大学院人文科学研究院, 2005年3月〉)。

さらに、372年以前にも百済は東晋に遣使していたとの記録は無いことを考えると、「泰和四年」の

紀年は本来において百済で銘記されたとは考えられないのである。この紀年を銘記して、戦争などに「出」でては「百兵」を「辟（しりぞ）」けることが出来るという辟除の呪力を強く期待された「七支刀」は「侯王」が佩刀するに相応しいと言う完結した表面の銘文は、やはり「泰和」の年号を奉ずる政治社会のなかで鋳造されたと考えなければならない。それは百済に於いてではなく、山尾氏の説くように369年に東晋において鋳造されたと、ひとまずは素直に理解すべきである。ひとまずと限定するのは、後述するように、現存の石上神宮蔵の七支刀は山尾氏の説くように、百済が東晋造の七支刀を東晋から下賜されたが、この外交関係を倭王とも共同する意図から百済はこれを倭王に贈与する目的で七支刀の一振りを新たに仿製したものと理解するからである。山尾氏は百済が東晋から七支刀を下賜されると、百済ではこの「原七支刀」を「模造」して裏面にも新たな銘を象嵌して倭王に贈ったとする山尾氏の説(1989)の基本を支持するからであり、そう理解することで、後述するように「為倭王旨造」の「旨」と「造」の字義が納得されるからである。

ところで、東晋が369年に七支刀を鍛造した背景には福永光司(1987)や佐伯有清氏(1977)、山尾氏等が説くように、その形態と「百兵」を「辟」けることが出来るという道教的禁呪を期待する道教の信仰が東晋社会に隆盛したことを想起すべきであろう。

さて、ここまで考察してくると、表銘文には百済の王権の意志を読み取ることはできず、「侯王」に“「宜」ろし”とは皇帝の存在を背景として、これを下賜されたのはまずは百済の近肖古王が372年正月に東晋に遣使し、同6月には王を「鎮東将軍領楽浪太守」に封ずる冊封使を迎えたが、この頃に東晋の外臣となった百済王に七支刀が下賜されたと、理解される。

百済は東晋の年号を奉じない頃に、中国系知識人の知識を得て鍛造した七支刀に東晋の年号を刻んでこれを倭王に送ったとの鈴木氏の推定は、知識人であれば冊封を受けていない国際関係の下で百済王が倭への外交品に東晋の年号を刻むことの無理は承知していたであろうから、やはり七支刀は東晋でこそ鍛造されたと考えるべきである。

また、紀年を宋の「泰始四年」(468)と判読した場合にも無理がある。百済王の餘慶（蓋鹵王）が宋の大明元年(457)に鎮東大将軍に冊封されていたから、468年の蓋鹵王代に百済が宋の年号を七支刀に刻することに疑問はなさそうである。しかし、百済では武寧王が521年に梁から寧東大将軍と冊封されながら、その陵墓に納めた買地券には梁の年号を刻まずに干支を用いたように、冊封下においても百済は中国の年号や百済の独自年号を自ら使用したことを示す資料を見ないことを考えれば、七支刀の紀年を「泰始四年」と判読する場合でも、鍛造はこの場合では宋朝でのことと考えるべきである。

一方、七支刀の「泰和」は百済の独自の年号であるとする説では、「泰和四年」とは今日の史料範囲では百済人の最初で最後の年号使用の遺物となる。それでは百済年号とする「泰和元年」は西暦では何年に相当するかと問えば確かなところは不明となる。「泰△四年」と判読する李丙燾は『日本書紀』神功紀52年9月条に七枝刀が献せられたとの記事から、同皇后52年は壬申であり、干支2運下げれば372年に相当するが、この歳の9月こそ七支刀の「十六日丙午」の干支に相当すると言い、ここから七支刀の作成は372年9月16日と説く。さらに、李説では、この作刀年月が『日本書紀』では七枝刀が倭に送られた年月として編年されたと説く。そこで李説では、「泰△四年」が372年となり、その元年は369年となるのである。李説は「泰△」と判読して「泰和」とは判読しないことから論は成り立っているが、東晋の「泰和四年」は百済では「泰△元年」であったことになる。しかし、「泰△」と判読する李説は、前述の判読のように「泰和」の判読に対しては無理が生まれる。369年の頃は、百済が高句麗に対して

優勢な時期であったとしても、369 年に百済が独自に建元したとする傍証は見出し難い。

さらに、延敏洙氏が「奉□四年」と判読して、これを武寧王 4 年(504)とする説も傍証はなく、またこの頃も干支を使用していることから、百済の独自年号説は成立しない。

やはり、七支刀の紀年は、山尾幸久氏が推定するように東晋での作刀の際に刻まれたと理解することに矛盾がない。これまで、七枝刀が百済から 372 年に相当する神功皇后摂政 52 年に日本へ献せられたとする『日本書紀』の記録に引きずられて、七支刀を百済と倭国の２国関係に限定して、これを百済製と見なしてきたが、この前提から離れて考察することが求められる。

さて、表面の銘文は「出でては百兵を辟ける」という呪力をもつ七支刀を盛夏の「五月」の火気の強い「丙午」の日に、「百」たびも「練」ったと言う丁寧な工程を経て完成した故に、この強い呪力を秘めた「七支刀」は「供供（深く恭しい)」たる「侯王」が佩刀するに相応しく、また「侯王」は「永年大吉祥」であろうと言う完結した定型の文である。これはこのままに東晋において皇帝から「侯王」への下賜品として鍛造され、その呪力の強さが期待されて表面の銘文が象嵌されたと素直に理解される。

ところで、表裏の銘文の書体を注視すれば、「造」「百」「刀」「王」が両面でともに象嵌されている。これを比較すれば、山尾氏が指摘するように字形に相違が多い。前述のように表裏の「造」では進繞と２画と４画の長さが異なり、また５,６,７画で作られる旁の「告」のなかの「口」も表面のそれは横長である。また、「百」字は表面に２字あり、裏面のそれとの３者で微妙に様子は異なるが、裏面の「百」は均整がとれた字形である。「刀」ではレントゲン写真においても裏面の「刀」では２画が長く描かれており、表面の「刀」がより均整がとれている。表裏面の「王」字は象嵌の残存も少なく、比較は困難である。

こうした同一文字の表裏に現れた字形の差異は注視すべきであろう。この差異は鍛造時に表裏面の象嵌が異なる人物でなされたとは考えがたく、山尾氏の推定のように、象嵌の文字の手本が同一では無く、その間に時差があったと、理解したい。それは表面の銘文は東晋での鍛造に連続した象嵌の字体が手本となっており、裏面では「先世以来」百済に無かったこの「七支刀」を「倭王」の「為」に「造」ったことを強調していることを読めば、百済王の命でこの七支刀を「造」ったと理解しなければならない。即ち、裏面の銘文は百済のオリジナルの文である。

こう読んでくると、表裏の銘文でともに七支刀を「造」ったと象嵌していることの違和感は解消される。この２度も「造」ったとの銘記は、山尾氏の説くように、表面は 369 年に東晋でまず鍛「造」された七支刀が 372 年頃に百済に伝わったが、山尾氏が仮称するこの「原七支刀」の銘文のなかで、百済王は「出（い)」でては「百兵」を「辟」けるという呪力の意義を理解して、この呪力とこれを下賜した東晋皇帝の恩とを倭王とも享受すべく、この「原七支刀」を模して新たに「七支刀」を「造」り、即ち仿製して、倭王に贈ったということである。現存の七支刀は百済王が東晋から賜った 34 文字の銘文を持つ「七支刀」を仿製し、その裏面にこれを倭王に贈る経緯の文を象嵌した、いわば「仿製七支刀」であることになる。

百済王が「原七支刀」を仿製する意図は「為倭王旨造」の句から読みとれる。即ち、この「旨」とはこれまで『宋書』倭国伝に記録された所謂「倭の五王」の名に引きずられて「倭王」の名として理解されてきた。また、宮崎(1983)はこれを「嘗」の略体であり、つづく「造」に連なって「はじめて」の意味であると理解された。「嘗（はじめて)」は裏面の冒頭にある「先世以来未有此刀」を承けると理解したのである。しかし、古代東アジアの冊封関係を背後においた外交に現れる「旨」は、それを人名や副

詞と把握する前に、「聖旨」や「慈旨」の意味で理解すべきではなかろうか。幸いにも七支刀の裏の銘文では「旨」の6字上に明らかな「聖」字がある。「旨」はこれと秘かに連なる文字として理解される。また、さらに6字上には百「濟」が百「慈」と判読されれば、この「慈」とも「旨」の字義は秘かに連なると考えられるが、『図録』からは確かに「百濟」の判読が得られたから、「旨」は「聖」に連なる字義で解釈してこそ百済王が「原七支刀」を仿製して倭王に贈る外交意図が理解されるのである。

その意図は勿論百済のものである。百済の近肖古王と太子は369年に対高句麗戦に有利な形勢を獲得し、372年正月から6月には東晋外交に成果を収め、「原七支刀」を下賜されたと推定されるが、高句麗に対峙しつつ東晋の冊封を受けた外交の新展開を倭王に報じ、倭国をもこの外交ラインに加えて対高句麗ラインの強化を図った百済の対倭外交である。

裏面の銘文に即して百済の外交を理解すれば、百済王と太子（或いは372年6月に百済王は東晋から冊封を受けており、この関係から仿製時には太子を「世子」と象嵌することも可能であるから)、百済王と「世子」は、「聖音（晋)」に「奇（寄の略字と理解する）生」する、即ち「生を寄せる」ことになった。「聖音」であれ「聖晋」であれ、ともに、百済王が「外臣」となって臣属する東晋の皇帝やその恩徳を蒙ることを意識した尊称である。その外臣のシンボルのひとつが「侯王」に相応しいとして下賜された呪力の強い原七支刀であった。東晋が丹念に鍛造された呪力の強い原七支刀を百済王に下賜したことは、百済王の対高句麗に備えた外交意図を容れたことであり、百済王と世子はその東晋皇帝の「聖旨」や恩徳たる「聖音」に帰して、これを倭王とも共有すべく原七支刀を仿製したものと考えられる。即ち、「旨造」とは「“(聖）旨”をもて」「“造”る」ことであり、原七支刀の形態とこれに象嵌して込められた“「出」でては「百兵」を「辟」け”得るという強調された呪刀を仿製七支刀にも注ぎ込んで、東晋皇帝の意を体して、或いは威を借りてその強調された呪力を倭王とも共有し、百済王が結んだ東晋との外交ラインに倭王を参加させようとしたのである。川口勝康氏(1993)がこの「聖音」は東晋皇帝の「教令・指令」の意味に解釈し、百済の「七支刀」鍛造に東晋皇帝の命令があると、東晋の外交意図を高く評価した理解も肯ける。

このように表裏の銘文を理解してくると、七支刀をめぐる国際関係は以下のようにまとめられる。

①369年に東晋では、「侯王」が佩刀するに相応しく、「出」でては「百兵」を「辟」けることが出来る呪力をもつとされる七支刀を鍛造し、呪力の強いことを願って丁寧にこの刀を造った経緯を銘文として象嵌した。

②372年正月に百済の近肖古王が東晋へ初の通交を行ったが、この際にか、または、続く同年6月に王は東晋の使者を迎えて「鎮東将軍領楽浪太守」に冊封されたが、この際にか、東晋から七支刀が百済王に下賜された。

③百済では東晋での作刀時に込められた呪力をそのままに期待して、東晋皇帝の「聖旨」を奉じて七支刀を仿製し、これを倭王に送る外交を行った。

④百済王が倭王に仿製七支刀を送った外交の意図は、百済王が東晋の冊封を受けて外臣となったが、その延長上に倭王を置いて、百済の対高句麗策に倭王が共同するように奨めることであった。

⑤『三国史記』百済本紀によれば、百済の近肖古王は即位23年(368)3月に新羅に遣使して良馬2匹を贈って通好していたから、ここに東晋との関係を核として倭とも通好し高句麗に備える南方ラインを形成したのである。しかし、次章で述べるようにこのラインから新羅は間もなく離脱して高句麗と結ぶことになる。

そこで、あらためて七支刀の裏面の銘文は以下のように解釈してこそ、百済が東晋を背景とした倭との外交意図が理解されよう。

「先世以来、未だこのような（形の、また、それ故にも百兵を辟けることの出来る呪力が強い）刀は（百済には）無かった。百済王と世子は生を聖なる晋の皇帝に寄せることとなった。それ故に、東晋皇帝が百済王に七支刀等を賜われた「旨」を倭王とも共有しようとこの刀を（仿製して）「造」った。後世にも永くこの刀とこれに秘められた東晋皇帝の旨を伝え示されんことを。」

ところで、表面の銘文に読まれた「侯王」については、これまで石上神宮蔵の七支刀が百済王から倭王に送られたことから、百済王が倭王を「侯王」と位置づけたとする２国間関係が説かれてきたが、この「侯王」とは東晋における皇帝と「侯王」との関係が第一義であり、これを国際関係に置き換えれば、東晋の皇帝に対しては「原七支刀」を下賜された百済王が東晋皇帝の「侯王」の位置におかれることになる。それは372年以降の両者の関係にも妥当する。さらに、百済王がこれを仿製して倭王に送った第２次的な七支刀の贈与を考えると、第二義的には、百済王は倭王をも自己と同じく東晋の「侯王」となるべき国際関係を構想し、これを実行したのである。「伝示後世」の語意が東晋を背景に置いた百済の倭国に向けた姿勢を示しているが、その後の百済と倭国の関係を見ればその外交は成功している。

そこで、ここまでの考察を大きくまとめ、残る発展的な問題を指摘したい。

まず、①漢式鏡の例を挙げるまでもなく、「原七支刀」を仿製することは奇異な事ではなかろう。石上神宮蔵の七支刀は百済製であることは動かないが、そのモデルは東晋から百済に下賜された七支刀、即ち山尾氏の言う「原七支刀」である。369 年に東晋で七支刀を鍛造してこれを百済王に賜うには３年の時間があることから、当初の鍛造は百済王の為ではなく、広く「侯王」へ下賜するためであったから、原七支刀は複数鍛造された可能性がある。②百済の都の漢城が475年に高句麗の長寿王の率いる３万の軍によって陥落し、蓋鹵王は戦死して王族が南の熊津に避難したが、この大混乱のなかで原七支刀は消失したのかも知れない。③石上神宮に現存する七支刀は百済が仿製した刀であると考察された。『日本書紀』巻9・神功皇后摂政 52 年(372)条に「秋九月丁卯朔丙子、久氐等従千熊長彦詣之。則献七枝刀一口・七子鏡一面及種種重宝」とあって、「七枝刀」を百済の使者が「献」じたとあることから、百済王が倭王の下位であるとする説がこれまでも続いてきた。しかし、前述のように七支刀をめぐる百済王と倭王の関係は百済の外交意図の中から考えなければならない。それは百済王がはじめて開いた東晋との冊封関係を背景とした対倭外交であり、少なくとも百済は倭王をその上に置く関係で外交したのではなく、水平関係の外交に近い。④また、『日本書紀』は「七枝刀」等の「献」上に続いて、「仍啓曰、臣国以西有水。源出自谷那鉄山。其邈七日行之不及。当飲是水、便取是山鉄、以永奉聖朝」と使者の言を記録しているが、ここに谷那鉄山が鉄の供給地であることを使者が述べているのは、仿製七支刀の原料がここの鉄であったとのことを暗示しているかと推考される。

おわりに－七支刀をめぐる国際関係－

ここまでにも言及したが、東晋から下賜された七支刀を百済が仿製し、これを倭王に贈った外交の背景には百済が直面する対外関係があった。『三国史記』巻 24・百済本紀によれば、近肖古王 23 年(368)春３月に百済は新羅に遣使して、良馬２匹を贈って通好した一方では、翌年(369)９月には高句麗王の故

国原王が歩騎２萬の兵で攻撃してきたから、近肖古王は太子に兵を付けてこれを撃破させ、５千餘級を獲得した。同年冬 11 月にも百済は漢水の南で閲兵し、同 26 年(371)には、再び高句麗兵の襲撃を受けたから、近肖古王は浿河に高句麗兵を急撃し、高句麗兵を敗走させた。同年冬には近肖古王と太子は精兵３萬を率いて北上し高句麗の平壌城を攻めたが、この戦いにおいて応戦する高句麗の故国原王は流矢に当たって戦死するほどの勝利を百済は得ている。

この高句麗戦の勝利の後に、百済は翌 372 年正月に東晋に遣使して朝献し、同年６月には近肖古王は東晋の使者を迎えて「鎮東将軍領楽浪太守」に冊封されたのである。この時、百済は前述のように七支刀を下賜されたと推考したが、これを仿製して倭王に贈る外交を行ったのである。それは『日本書紀』に言う神功皇后摂政 52 年(372) ９月のこととまずは判断されるが、これにも検証が求められる。『日本書紀』は日韓関係の由緒を物語として叙述する傾向があり、『古事記』では中巻の応神天皇記に「照古王」が「横刀」を「貢上」したと記録するが、七支刀の贈与は 372 年９月よりやや後のことであるかも知れない。

さて、百済は 368 年には新羅に通好して、高句麗戦を有利にすすめ、かつ 372 年に東晋の外臣となった国際関係を築くと、直ぐにもこのライン上に倭国を参入させ、高句麗に備える南方ラインを強化したのである。百済の近肖古が七支刀を倭王に贈る外交の前史には『日本書紀』巻９・神功皇后 46 年条によれば「甲午年(364)」に百済が加耶の卓淳国に使者を派遣し倭国への案内を求めていたことがあった。

百済は倭国への通交に連なって加耶諸国にも通じている。『日本書紀』巻 19・欽明天皇２年(541)４月条には百済の聖明王が近肖古王代を懐古して、安羅・加羅・卓淳の旱岐らが初めて百済に通交し「子弟」の関係を結んだと言う。百済の南方ラインには加耶諸国は欠かせない存在であったことが理解できる。

ところで、一旦、冊封関係に加わると、冊封関係を拡延することを宗主国が被冊封国に期待することになるが、被冊封国は自己の位置を保障するためにも隣接の勢力を冊封関係に導くことになるのである。こうして百済を媒介とした中国南朝と倭王と加耶諸国との６世紀初にまで続く南方外交ラインが開始したのである。

百済の近肖古王は自ら築いた東の新羅と西の東晋、そして南の倭国と加耶諸国を結ぶ南方ラインの外交体制のもとで北の高句麗に対抗した。『三国史記』の百済本紀と高句麗本紀には両国が一進一退の戦いを４世紀末の高句麗広開土王に至るまで繰り返したことが記録されているが、新羅は以下に述べるように早くも 377 年には百済のラインから離脱して高句麗に取り込まれている。

そこで注目されるのはこの間の新羅の動向である。『三国志』魏書・韓伝に辰韓 12 国中の１国として「斯盧国」が見えたが、『晋書』では３世紀末に西晋に通交した「馬韓辰韓等東夷諸国」として一括されるのみであった。ところが、377 年に至って新羅の名において前秦に遣使したことが『資治通鑑』巻 104・晋紀・烈宗に見える。ここには「太元二年(377)春。高句麗新羅西南夷、皆遣使入貢于秦」とあるが、これは前燕が前秦に滅んだ後に高句麗が前秦に遣使した外交である。ここからは新羅が百済のラインから離れて高句麗に添った対外関係に入ったことが窺える。

続いて『太平御覧』巻 781・四夷部２・東夷２・新羅には『秦書』を引用して「符堅建元十八年、新羅国王樓寒、遣使衛頭、献美女、国在百済東、其人多美髪、髪長丈餘。又曰、符堅時、新羅国王樓寒、遣使衛頭朝貢。堅曰、卿言海東之事、與古不同何也。答曰、亦猶中国時代変革、名号改易」とある。この前秦王の符建の建元 18 年(382)に至って明らかに「新羅」の名において新羅王の樓寒（奈勿王）は北朝の前秦に通交しているが、これにも高句麗の協調があったに違いない。新羅は高句麗に導かれて北朝

に連なる北方ラインに組み込まれたのであるが、このラインは５世紀末まで継続することになる。

百済は『晋書』巻9・孝武帝紀に「大元九年(384)七月、百済遣使来貢方物」とあり、また、同書には「大元十一年(386)夏四月、以百済王世子餘暉、為使持節都督鎮東将軍百済王」ともある。百済は高句麗と戦闘を継続するなかで、新羅の離脱がありながらも、東晋の冊封体制のなかに倭国に先んじた自己の位置を構築している。

ところで、この間の倭王の動勢は『三国史記』新羅本紀によれば3世紀以来屢々新羅の辺境を襲ったとあるが、奈勿尼師今９年(364)に新羅へ侵入した後には同38年(393)まで侵入記録は見ない。４世紀後半から５世紀初にかけての百済とともに倭が高句麗と新羅と衝突した詳細は高句麗の立場から414年にこれを記録した高句麗広開土王碑文から知られるところである。

【参考史料】

①『日本書紀』巻９・神功皇后摂政「五十二年(372)秋九月丁卯朔丙子、久氐等従千熊長彦詣之。則献七枝刀一口・七子鏡一面及種種重宝。仍啓曰、臣国以西有水。源出自谷那鉄山。其邈七日行之不及。当飲是水、便取是山鉄、以永奉聖朝。乃謂孫枕流王曰、今我所通海東貴国是天所啓。是以垂天恩、割海西而賜我。由是国基永固。汝当善脩和好、聚斂土物、奉貢不絶、雖死何恨。自是後毎年相続朝貢焉。五十五年(375)、百済肖古王薨。五十六年、百済王子貴須立為王」

②『古事記』中巻・応神天皇記「亦百済国主照古王、以牡馬壱疋、牝馬壱疋、付阿知吉師以貢上〔此阿知吉師者、阿直史等之祖〕。亦貢上横刀及大鏡。又科賜百済国、若有賢人者貢上。故、受命以貢上人、名和邇吉師。即論語十巻、千字文１巻、并十一巻、付是人即貢進。〔此和爾吉師者文首等祖〕」

③『三国史記』巻24・百済本紀第２「近肖古王、比流王第二子也。體貌奇偉、有遠識。契王薨、継位」

・近肖古王23年(368)「春三月丁巳朔。日有食之。遣使新羅、送良馬二匹。二十四年〔369年〕秋九月。高句麗王斯由帥歩騎二萬、来屯雉壤。分兵侵奪民戸。王遣太子以兵徑至雉壤、急撃破之。獲五千餘級。其虜獲分賜将士。冬十一月。大閲於漢水南。旗幟皆用黄」

・同26年(371)　「高句麗挙兵来。王聞之。伏兵於浿河上。俟其至急撃之。高句麗兵敗北。冬。王與太子帥精兵三萬。侵高句麗、攻平壌城。麗王斯由力戦拒之。中流矢死。王引軍退。移都漢山」

・同27年(372)　「春正月。遣使入晋朝貢」

・同28年(373)　「春二月。遣使入晋朝貢」

・同30年(375)　「秋七月、高句麗来攻北鄙水谷城陥之。王遣将拒之。不克。王又将大挙兵報之。以年荒不果。冬十一月。王薨。古記云。百済開国已来、未有以文字記事、至是得博士高興、始有書記。然高興未嘗顕於他書。不知其何許人也」

・『三国史記』巻24・百済本紀第２「近仇首王〔一云、諱須〕。近肖古王之子。先是高句麗国岡王（故国原王〔一云、国岡上王・・・濱田〕）斯由親来侵、近肖古王遣太子拒之。至半乞壌将戦。高句麗人斯紀本百済人。誤傷国馬蹄。懼罪奔於彼。至是還来。告太子曰。彼

師雖多。皆備数疑兵而已。其驍勇唯赤旗。若先破之。其餘不攻自潰。太子従之。進撃大敗之。追奔逐北。至於水谷城之西北。将軍莫古解諫曰。嘗聞道家之言。知足不辱。知止不殆。今所得多矣。何必求多。太子善之止焉。乃積石為表。登其上。顧左右曰。今日之後。疇克再至於此乎。其地有巖石罅若馬蹄者。他人至今呼為太子馬迹。近肖古在位三十年薨。即位」

・近仇首王３年(377)「冬十月。王将兵三萬侵高句麗平壌城。十一月。高句麗来侵」

・同５年(379)　「春三月、遣使朝晋。其使海上遇悪風。不達而還」

・同10年(383)　「夏四月。王薨」

・『三国史記』巻 24・百済本紀第 2「枕流王、近仇首王之元子。母曰阿尓夫人。継父即位。秋七月。遣使入晋朝貢。九月。胡僧摩羅難陀自晋至。王迎之致宮内禮敬焉。仏法始於此」

・枕流王２年(385)「春二月。創佛寺於漢山。度僧十人。」

④『晋書』巻９・簡文帝「咸安二年(372)春正月辛丑。百済林邑王、各遣使貢方物。六月、遣使拝百済王餘句為鎮東将軍領楽浪太守」

【主要参考文献】

・田中俊明『大加耶連盟の興亡と「任那」－加耶琴だけが残ったー』(2002 年８月，吉川弘文館)

第２章　高句麗広開土王碑文に読む日韓関係と高句麗の国家像

はじめに

４世紀の日韓関係を王権の成立過程を見通しながら考察する時、以下の問題が挙げられる。それは、①倭が４世紀末から５世紀初の約半世紀間、「渡海」して高句麗と交戦するに至った要因は何であろうか。それはまた、つづく５世紀の倭および東アジアの歴史にどのように波及したのであろうか。

また、この問題に関連して、②高句麗の軍事的な強盛化が４世紀半ばから朝鮮半島中南部への南進策として展開したが、そこに至る高句麗内部の要因はどのように考えられるのであろうか。

この二つの問題を解くために、やはりこれまで日韓の学界で豊かな研究成果を生み出している『広開土王碑文』の研究が重視される。碑文には広開土王による勢力圏拡張の勲績を王の徳化の拡延であるとする立場で記録する修辞法が採用されているとは言え、そこには４世紀半ばから５世紀初にかけて、それぞれの王権の成立過程の中で、高句麗に対する百済と加羅と倭の合従と新羅が連衡する動向が記録されているからである。

そこで、本章では、碑文の全体構成を大王の戦果を中心に理解した上で、大王の時代の朝鮮半島の諸国と倭国との関係を理解することとする。

尚、附録に掲げた碑文の釈文は、下記の武田幸男氏の書(1988)に掲載された武田試釈を基に、原石拓本の諸本とを比較検討した試釈である。

【現存する原石拓本とその写真版掲載書】

【日本】

①水谷悌二郎旧蔵拓本（国立歴史民俗博物館蔵・『書品』100号, 1959年6月. 水谷悌二郎『好太王碑考』〔開明書院, 1977年9月〕。武田幸男編著『廣開土王碑原石拓本集成』〔東京大学出版会, 1988年3月〕）

②金子鷗亭所蔵拓本（武田幸男編著『廣開土王碑原石拓本集成』〔東京大学出版会, 1988年3月〕）

【韓国】

①任昌淳旧蔵拓本（『書通』第1号〔1973年9月〕に一部紹介。任世権・李宇泰編著『韓国金石文集成（1)』〔韓国国学振興院, 2002年9月〕）

【台湾】

①傅斯年図書館蔵本（乙）（武田幸男編著『廣開土王碑原石拓本集成』〔東京大学出版会, 1988年3月〕）

②『書通』綴じ込み本（『書通』第1号〔1973年9月〕）

③傅斯年図書館蔵本（甲）（武田幸男編著『廣開土王碑原石拓本集成』〔東京大学出版会, 1988年3月〕）

【中国】

①『晋高麗好太王碑, 李龍精拓整紙本』〔北京大学図書館蔵・「好太王碑」C〕（林基中編著『廣開土王碑原石初期拓本集成』東国大学校出版部, 1995年11月。【中国著名碑帖選集27『好太王碑』吉林文史出版社, 1999年8月】）

②『高句麗平安好太王墓誌碑全部』（林基中編著『廣開土王碑原石初期拓本集成』東国大学校出版部, 1995年11月）

③『高句麗平安好太王墓誌碑全部』補完拓本（林基中編著『廣開土王碑原石初期拓本集成』東国大学校出版部, 1995年11月）

④『高句麗好太王碑』（林基中編著『廣開土王碑原石初期拓本集成』東国大学校出版部, 1995年11月）

⑤徐建新「北京に現存する好太王碑原石拓本の調査と研究－北京大学所蔵拓本を中心に－」（『朝鮮文化研究』第3号, 1996年3月）

第1節　広開土王の治績

碑文の釈文は酒匂拓本に始まると言える。この拓本は日本陸軍参謀本部の酒匂景信が「倭」軍の戦況を殊更に有利に偽造したものと説かれてもきたが（李進熙, 1972）、その実は墨水廓填法による2次的な拓本であるとは言え、この作業は換言すれば、碑石に石灰を塗布して文字の輪郭を鮮明にする以前の純粋な碑石から採拓した所謂原石拓本を材料として、その朦朧とした拓本から見事に文字を読みとり、これに双鉤廓填の技法で作成した拓本であって、その作業がまさに釈文であった（末松, 1981）。それ故に、酒匂拓本は最初期の釈文として、今日、改めて原石拓本に対面して碑文を釈文する際には、尊重かつ参考されるべき拓本の形式をもった釈文である。

さて、近年、水谷悌二郎、武田幸男、林基中、徐建新の各氏が原石拓本を適切な写真で広く研究の場に提供されたばかりでなく、各氏の釈文をも提示されている。

周知のように碑文は高句麗王家の始祖が天に由来して卵より誕生し、苦難を克服して即位したこと、

そして広開土王に至る王統を刻記した第１段、広開土王（以下、大王と略記する）の在位中の対外戦争を８か年条に編年して刻記する第２段、そして大王の死後に王都の王陵を守墓する烟戸の城別割り当てと烟戸不売買の制令を刻記した第３段から構成される。

碑文は大王が盛んな対外戦争を展開し、その成果として構築された高句麗中心の国際関係を大王の徳化が拡延したものとして銘記しており、王都の南方に向けた高句麗の国家目標をも表象するこの巨大な碑の立碑の目的の前に、３段の構成は相互に密接に関連していることを忘れてはならない。

ここで、碑文を読む基本的な視点から、碑文の文脈の要点を略述したい。(**ゴチック体**の文字は注目すべき語句であることを、「　」の文字は碑文の文字であることを示す。また「碑文」は附録の「試釈」を参照されたい。)

【第１段】

○「始祖の鄒牟王の創基」を顧みれば、「聖」なる始祖鄒牟王は「**北**扶餘」より「天帝の子」、「母を河伯の女郎」として「卵」から「生」れると、「巡幸**南下**」し、また苦難を克服し、「忽本の**西**」の「山上」に「城（きづ)」き、「都」を「建」てた。しかし、始祖は「世位を楽しまず」「天が黄龍を下して王を迎えるや、王は忽本の**東**罡にて龍首を履いて昇天」したが、ここで「命を世子の儒留王に顧みて、道を以て治め」させた。続く「大朱留王は基業」を承け継ぎ、「十七世孫の国罡上廣開土境平安好太王に至った」。大王は18歳で「登祚」するや「永楽太王」と「号」した。太王の「恩澤」は「皇天」に「□」し、「威武」は「四海」に「振被」し、「□□」を「掃除」し、「其の業」を「庶（あまね）く寧（やす)」んじて、「国は富み」「民は殷ひ」「五穀は豊熟し」たが、39 歳で亡くなると、その霊を「甲寅年(414)九月廿九日に山陵に遷就」した。

【第２段】

○永楽五年(395 年)。稗麗が高句麗に□しないので、大「王」は「**躬率**」して、「往（ゆ)」きてこれを「討」ち、「三部落六七百営」を「破」り、「牛馬群羊」を獲得し、「**旋駕**」して「土境」を「遊観」「田猟」して、「**還（かえっ)**」てきた。

○永楽六年(396 年)。百残と新羅は「舊（もと)」より高句麗の「**属民**」であり、「**朝貢**」していたが、「倭」が「辛卯年(391 年)より以来、渡海し、百残を破り、新羅を□して**臣民**とした」から、大「王」は「軍を**躬率**」して「残国」を「討伐」した。「軍」は「**南**」のかた「攻」め「取」った城は多数である。しかし、「其の国城は義に服さず、敢えて出でて百戦」してきたので、大「王」は「威」をもって「赫怒」し「阿利水」を「渡」り、その国「城」を「囲」むと、「残主」は「困逼し、男女生口一千人と細布千匹」を「献」じ、大「王」の前に「跪」き、「以後」「永」く「**奴客**」となることを「自ら誓」った。「**太王**」は百残王の「□迷の愆（あやまち・倭に破られ、「臣民」となったこと)」を「**恩赦**」し、「後順の誠（以後、永く大王の奴客となること)」を「録」した。そこで、大王軍は「五十八城」と「村七百」を□し、「残主（百済王）の弟」と「大臣十人」を「将」いて「師」を「**旋**」して「**都**」に「**還**」った。

○永楽八年(398 年)。「偏師」を粛慎土谷に「**教遣**」し、「莫□羅城と加太羅谷の男女三百余人」を「抄

得」した。「此より以来、（粛慎土谷は）**朝貢**し、事を論」ずることとなった。

○永楽九年(399 年)。「百残」が奴客になるとの「誓」を「違」えて、「倭」と「和通」したから、大「王」は「**平穣**」に「**巡下**」した。すると、「新羅」は「使」を「遣」わして大「王」に「白」して「云」うには、「倭人は其の国境に満ち、城池を潰破しています。（太王の）奴客とは（その身分は）民ですから、王に帰して命を請います」と。そこで、「太王」は「**恩慈**」をもって（新羅王が太王の奴客となって帰服してきた）「忠誠」を「称（たた）」え、新羅の「使」者を新羅に「還」らせ「□計」を「告」げさせた。

○永楽十年(400 年)。大王は「歩騎五萬」を「**教遣**」し、「往」きて「新羅」を「救」った。軍は「男居城」より「新羅城」に「至」ったところ、「倭」は「其中」に「満」ちていたが、「官軍」が「方（まさ）」に新羅城に「至」らんとすると「倭賊は退」いた。官軍は「急追」して「任那加羅の従拔城に至るや、城は即ちに帰服」した。「安羅人戍兵は・・・倭は・・・」「昔、新羅の寐錦は未だ身づから来たりて事を論」じたことはなかったが、「(国岡上廣) 開土境好太王」の新羅救援戦の成果があがって、新羅の王子「僕勾」が、・・・「**朝貢**」してきた。

○永楽十四年(404 年)。「倭」が「不軌」にも「**帯方界**」に「侵入」し、「連船」したから、大王は「**躬率**」して「**平穣**」より「□□」して、これと戦った。「倭寇」は「潰敗」し、大王軍が「斬殺するもの無数」であった。

○永楽十七年(407 年)。大王は「歩騎五萬」を「**教遣**」し、・・・「合戦」し、敵を「斬殺」し、これを「蘯盡」させた。「穫」た「所」の「鎧鉀は一萬餘領」であり、「軍資器械」は「数」を「称（はか）」ることができないほどであった。軍は「**還**」り、「沙溝城」等の六城を破った。

○永楽二十年(410 年)。「東夫餘は舊（もと）より鄒牟王の**属民**であったが、中ばに叛して貢（みつ）がなくなった。そこで、（大）王は**躬率**して往き、これを討った」。大王「軍」が「餘城」に「到」ると「餘城」は「駭（おどろ）」いた。・・・「**王恩**」は「普」ねく「覆」い、そこで軍は「**旋**」り「**還**」った。ここで、大王に「慕化」して「官」に「随」い「来った者」は「味仇婁鴨盧」等の五「鴨盧」であった。

【第３段】

高句麗軍が「攻破した城は六十四、村は一千四百」である。「守墓人烟戸」は「賣句余民は国烟二、看烟三・・・(以下各城への国烟看烟の割り当て)・・・」「国罡上廣開土境好太王が存し時、教して言うには“祖王先王はただ教して遠近の**舊民**を取り、墓を守りこれを洒掃させた。吾は**舊民**が転じて当に羸劣せんとすることを慮る。若し、吾萬年の後にも安じて墓を守る者は、但、吾が躬ら巡り略来した**韓**と**穢**を取って洒掃に備えさせよ”と。(大王の) 言教は此の如きであったから、是を以て教令の如く**韓**と**穢**の二百廿家を取った。（しかし）其の法則を知らないことを慮り、復（また）、**舊民**一百十家を取った。新舊の守墓戸を合わせて、国烟は卅、看烟は三百の都合三百卅家である。上（むかし）、祖・先王自り以来、

墓の上（ほとり）に石碑を安（お）かず、守墓人烟戸を差錯させるに致った。国罡上廣開土境好太王は盡く祖先王の為に墓の上（ほとり）に碑を立て其の烟戸を銘（記）させ差錯させなかった。又、制するに、守墓人は今自り以後、更相〈こもごも〉転賣するを得ず、富足の者が有ると雖も亦擅（ほしいまま）に買うことを得ない。其れ、この令に違って（守墓人）賣る者は之を刑し、買う人は制して　墓を守らせる」

第２節　修辞法が頌える大王の聖戦

広開土王が在位中に獲得した対外的な戦績として『碑文』に刻記されたものは、稗麗と百済、そして後述するように百済を「臣民」としていると高句麗が判断した倭、さらに東扶餘への対外戦争と、倭の侵入に悩む新羅への救援戦、さらには粛慎土谷への観察のための派兵である。

この中で、大王が「躬率（みずから〈軍を〉ひきいて）」して出征した（永楽九年では「巡下」した）戦争には、大王が躬率（親征）せざるを得ない高句麗に取っては不利な対外関係の状況、換言すれば、その不利な状況があってはならない高句麗本位の正当性が大王親征の前置きとして刻記されている。一方、大王が大軍を「教遣」した戦争にはこの前置文が提示されていないと言う碑文の修辞法が注目された。

かの「辛卯年」条の解釈について諸説紛々としていた 1970 年代以降の日韓の古代史学界のなかで、この修辞法の理解は、「辛卯年」条が「永楽六年」の対百済親征の前置き文であって、さらにはその後の高句麗が百済と倭へ征討し、また新羅の救援に続く大きな前置文でもあることが理解され、それは高句麗に不利な状況の提示ではありながら、それ故に大王の親征を正当化し、かつその戦果を大きく賞賛させることができるのである（濱田,1973, 1974. 武田,1989）。即ち、「辛卯年」条には、高句麗の旧よりの属民として朝貢を行っていた百済と新羅は、倭が辛卯年に渡海して百済（新羅をも）を破り臣民としてしまったと言う、高句麗と百済、高句麗と新羅、倭と百済及び新羅との大王即位以前の関係についての基本認識が提示されていることが広く理解されている。ただ、倭と百済、或いは新羅との関係はあくまで高句麗の認識であり、史実は必ずしもこの関係ではないことは後述する。

ところで、『三国史記』高句麗本紀や『資治通鑑』によれば大王の治世にはこのほかにも対外戦争は契丹や後燕にも向けられていた。しかし、それらが『碑文』に刻記されなかったのは、それが大王の輝かしい勲績ではなかったからだけでは必ずしもない。むしろ西北方戦が大王の勲績を刻した『碑文』を都の国内城（今、中国吉林省集安県、鴨緑江北岸）の聖地たる「国罡上」に建立し、南方に向けて暗黙の内に誇示する高句麗国家の基本戦略とは異なるからである。即ち、大王の治世を継いだ子の長寿王が碑を建てた政治課題は、高句麗国家の正統性が「天」に由来して、その基盤が始祖の「巡幸南下」以来、今日にも「南」にあることを後世にも顕示することであり、それ故に、『碑文』では「南」における戦果をよく刻記し、北や西への戦況は意図的に除いていると考えられる。また、西北方面では高句麗優位の国際秩序を構築できていないからでもある。

大王の「南」への勢力圏の拡張は、始祖の「巡幸南下」に接合する聖戦と理解され、百済と倭への戦いは当にその「南」方戦の要であった。

また、大王は王都の墓、即ち王家の墓を「略来の韓穢」に守墓洒掃させようと遺訓し、長寿王はそれをほぼ実行している。「略来の韓穢」とは、まさに、獲得した百済の64城の城民を中心として王都の守墓人を編成したのであり、王都に移されて王墓を守るこれらの烟戸を介しても高句麗が「南」に君臨す

ることが表現されるのである。

こうした「南」への志向とその服属を強調する碑文の基本的性格は石碑の第１面と第２面の接線が真南に面して碑が建立されたこと（付図参照）、即ち、始祖の「巡幸南下」と百済征討と新羅救援と倭寇掃討という南方戦の経過と成果を刻記した第１，２面とが 45 度ずつ南面して建立された碑石の勇姿とも相俟って大王と長寿王代の南方志向が反映しているものと推量される。

さて、大王が親征し、また教遣した対外戦争の戦果は詳細に記録されるが、「官軍」の凱旋記事にも注目される。派遣軍と大王軍の行動の終結が「旋駕・・過・・還」（永楽５年）や「旋師還都」(6 年)、「還破」(17 年)、「旋還」(20 年)と刻記された戦争はいずれも高句麗の「土境」外での戦いであった。「平穰」への「巡下」(9 年)と「帯方界」への親征(14 年)はともに大王の「土境」内でのことであって、ここでは「凱旋」とは勿論刻記されない。

さらに、凱旋のことを刻記しない８年条と、文字の不明な部分があるとは言え凱旋のことは刻記されていないと判断される永楽10 年条はともに「教遣」の外征であるが、「凱旋」のことは刻記せず、その最大の成果は前者では外征の対象である粛慎の朝貢を、後者では新羅の朝貢を開始させたことを刻記している。即ち、「朝貢」を受けるからには、当然のことであるが、この二つの勢力は高句麗の「土境」外なのである。

こうした、「凱旋」記事を考えると、9 年条の「平穰」へ「巡下」した後の「遣使還告」とは既に解釈されるように、「新羅使をして（新羅王城）に還らせ告げしむ」ことである。また、17 年条の「教遣」は高句麗王都の北西にある燕に向けた派兵ではなく、やはり百済に向けた派兵であると理解すべきである。と言うのも、「軍器」を獲得した後に「還」ったのはその戦地が高句麗の土境外であることを言い、その過程で「破」ったのは六「城」であったことから判断すると、そこは土境外の地であり、かつ「城」を単位とした社会の形態からそこは百済の地であって、永楽６年の親征で獲得した百済の地の南に接する地であろう。永楽９年に百済と「和通」した倭は、また永楽 14 年に「不軌」にも「帯方界」にまでも北上していたが、百済は「和通」の関係からこの「倭寇」と行動を共にしたであろうから、この永楽 17 年の戦いは後述するように百済の地への「教遣」であったと判断される。戦況を伝える部分の文字数は多くはないことからも、大戦には至っていないのは、14 年に「倭寇」は「潰敗」しており、百済も大きな破壊を受けていたからであろう。しかし、大王は百済の北部の地を獲得し、一時は百済王を奴客とすることはあったが、ついには百済王を朝貢させたり、属民とすることはできなかったのである。

第３節　「臣民」と「奴客」

碑文には高句麗王権に隷属する人格を「属民」「奴客」「旧民」「新民」などと刻記する。また、それらは生活形態から「城民」や「谷民」「賈」とも刻記される。ただ、後述するように、碑文に刻記された「臣民」はここでは高句麗王への隷属の関係ではない。倭との関係において、百済（或いは新羅も）が倭の「臣民」となったと、高句麗が認識したのである。

ここで、先に碑文の勲績記事の文脈を掲げたが、そこには大王軍や派遣軍は外征の成果が上がるや凱旋しており、征服地を新領域として「土境」に取り込んでその民を「新民」として把握している。或いは、「土境」に取り込まずにその地の王や首長に大王の恩徳を示しつつ屈服させ、その「朝貢」を得ている。即ち、高句麗の「属民」とする関係の設定である。「旧民」に「新民」が参入し、その外に首長やその使者の朝貢によって結ばれる「属民」が連なるのである。

『碑文』からは、高句麗の大王軍が広開土王の時代では戦勝した「土境」外の地に占領軍として駐屯したことは読みとれない。「朝貢」を義務づけるのである。子の長寿王の時代の５世紀半ばに建立された『中原高句麗碑』に「新羅土内幢主」という高句麗の兵官が新羅国内に駐在していたことが読みとれるが、広開土王の時代では、高句麗の保護地となった新羅に将軍以下の一軍を駐屯させたとは直ぐには推量されない。新羅が「朝貢」する関係は間接的な統治であり、「属民」の関係である。

そうであるならば、「辛卯年」条に刻記された倭が百済（或いは新羅も）を「臣民」としたとは、高句麗のいかなる認識なのであろうか。それは、高句麗の「旧民」、「新民」、「属民」の概念に対照すると以下のように考えられる。

即ち、百済と「和通」した倭が新羅の王城を襲うに至ると言う行動は、倭が朝鮮半島に「渡海」して残留する行動であり、それは上記した高句麗が「土境」内外の人民を統治する実態とその概念から考えると、倭の行動は高句麗の異民族支配の範疇に収まらない特異な、許し難き実態であり、まさに倭が「百済と新羅」を「臣民」としている、と高句麗が認識したものと理解される。

さて、次に、永楽９年条には平壌に「巡下」して来た大王に新羅王の派遣した使者が「以奴客為民」と述べている。従来、この一節は、新羅王が大王に対して自己を奴客であると卑下して、倭が奴客である新羅王をその民として支配している、との主旨であり、新羅の使者が新羅の困難を具に大王に訴えたものと理解されてきた。この新羅王を倭が民としているとのことであれば、これは先立つ辛卯年の条において、倭が「新羅を破り、臣民としている」との表現と重複する理解である。或いは、朴時亨氏は“奴客たる新羅王は高句麗の民となっていますから”大王の救援を請うとの文意を解釈していた(1985)。

これに対して、武田幸男氏(1989)は、〔倭〕が〔高句麗王の〕奴客である百済王を「民」としている、との理解を提示している。永楽６年条に大王軍の攻撃を受けて降伏した百済王が、大王の前に「永く奴客とならん」と誓いながらも、その後に誓いに違って倭と和通していた。新羅の使者は平壌に「巡下」して来た大王に、倭が新羅の王城を攻めていること、そして倭が高句麗王の奴客となった百済王を民としている、と報告したものと理解したのである。即ち、永楽６年に大王軍に敗北した百済王は大王の奴客にならんと誓っていたから、奴客とはこの百済王にほかならないとする理解が前提にある。

しかし、新羅の使者が自国の王城が倭に包囲された苦境を報告したことは文脈上にも無理なく理解できるが、新羅の使者が倭と百済王との関係をも報告したと理解することには文脈の上では違和感が残る。即ち、一時は大王の奴客となった百済王が倭と和通したことは新羅の使者の言をここに挙げるまでもなく、『碑文』ではこれより先にこの永楽９年条の冒頭に提示されている。換言すれば、その事態は新羅使者の言を待つまでもなく、高句麗の既に認知するところであった。従来説にせよ、武田説にせよ、その新羅使者の言は碑文ではこれより先に明示されている百済王の状態と重複するのである。

ここは、倭が新羅の王城に満ちて、城池を破壊しており、その為、新羅王は（高句麗の）「奴客」とは身分の実態は「民」であるから、（その民の身分を甘んじて受け）、大王に帰依しましょう、との新羅王が大王に帰服する忠信を伝えたものと、理解される。即ち、高句麗が既に倭に破れてその「臣民」となったと認識した新羅王が広開土王の奴客となることを言い、大王の「命」を「請」うて来たから、大王はこれを容れて、奴客となると言う新羅王の「忠誠」を「恩慈」をもって「称（たた）」えたのである。

この経緯は永楽６年に大王軍に降伏した百済王が大王の前に跪き、大王の「奴客」となることを誓ったこと、それを容れた大王が「恩」をもってこれに応えたことに通底する大王とこれに隷属する者との関係である。ただ、百済王と新羅王の二人の奴客が誕生する経緯において異なるのは、百済は大王の討

伐を受けた果に奴客となったが、新羅は倭に攻められた困窮の果てに大王の奴客となることを申し出たことであるが、ともに自ら求めた大王との従属関係の表明である。

碑文に強調された二つの「奴客」の隷属は、ともに高句麗の認識では「本来からの“属民”」であった百済と新羅が倭の渡海による敗北の前にその「臣民」となっていたが、大王の親征によって倭の「臣民」から離れて、大王の「奴客」となって大王の「恩」に浴したとのことである。その経緯からみれば、「奴客」は「属民」より人格的な隷属度は進んだものと考えられる。永楽 20 年の大王の親征の前に破れた東夫餘のなかで、大王の「恩」に浴して「官」軍に付き従って高句麗に来た５人の「鴨盧」もその身分は大王の「奴客」であったであろう。

こうした高句麗の「民」の身分としての「奴客」の例では、武田氏(1989)が論じたように、長寿王代に「北扶餘」に出自して高句麗の「土境」内に移り住んだ牟頭婁一族が高句麗王との「恩」を介して代々に続いた「奴客」の主従関係が墓誌のなかで強調された事例が想起される。

おわりに

高句麗は313年に楽浪郡を、翌 314 年に帯方郡を攻撃し、この２郡を遼東に撤退させると、２郡の故地になお勢力を維持する残余の中国系の住民を懐柔しつつ高句麗の領域として統治を進行させて行く。

一方、付論第４・５節で言及するように、２郡の南部では、韓の諸勢力が２郡に通交することで、その政治、経済、文化の影響を強く受けて社会変動を進めたが、そのなかでは漢江を夾んで帯方郡と隣接し、水利と海上交通の利を得て、鉄山を持つ伯済国が百済国として 4 世紀前半に第一期の王権を誕生させ、やや遅れて新羅が、さらには倭の成長を生んだ。こうした南部の変動は4 世紀後半には北の高句麗と南の百済の接触と対立を生むことになったのである。

この高句麗と百済の対立関係は新羅と倭を呼び込むことになる。372 年に東晋に通交した百済が東晋との冊封関係を背景として倭王に百兵を辟ける呪刀の七支刀を贈って倭との連携を強めた国際関係は、倭がそれまでにかの２郡への通交を介して築かれた朝鮮半島の南部の諸勢力との関係を大きく進展させる契機のひとつとなっている。

この高句麗と百済の対立軸のなかで、海峡の東に位置する倭は楽浪・帯方郡への通交においてははやくに弁韓の狗邪国や瀆盧国そして馬韓の海浜の諸国と交流があり、百済から七支刀を受けるや百済との連携は次第に進行する。百済が受ける高句麗から押し寄せる軍事的危機感は波紋として倭へも感得されよう。七支刀を媒介とした百済と倭の関係を考察するならば、碑文に刻記された倭と百済の関係は倭が「渡海破」して百済を「臣民」としたと言う支配の関係では決してなかろう。むしろ、高句麗と戦火を交える百済が主導して、倭と「任那」諸国との協調よる倭の「渡海」を招き、そのことによって強化された３者の連携であろう。一旦は大王の「奴客」になりながらも、直ぐさまこれを翻して倭と「和通」した百済王の行動は、372 年の七支刀によって明確に打ち出されていた倭と連携する百済の基本的な対倭姿勢から生まれたものである。

一方、新羅は倭の侵入の前に高句麗の「奴客」となり、その救援を得るやさらに進んで、高句麗王への「朝貢」関係に入り、高句麗勢力圏に収まって行くのである。

【主要参考文献】(「広開土王碑研究文献目録」を参照)

①濱田耕策 「高句麗広開土王陵碑文の虚像と実像」(『日本歴史』第304号, 1973年9月)

②濱田耕策 「高句麗広開土王陵碑文の研究ー碑文の構造と史臣の筆法を中心としてー」(『朝鮮史研究会論文集』No.11, 1974年3月)

③佐伯有清『研究史　広開土王碑』(1974年8月, 吉川弘文館)

③李進熙　『広開土王陵碑の研究(増訂版)』(1974年11月, 吉川弘文館)

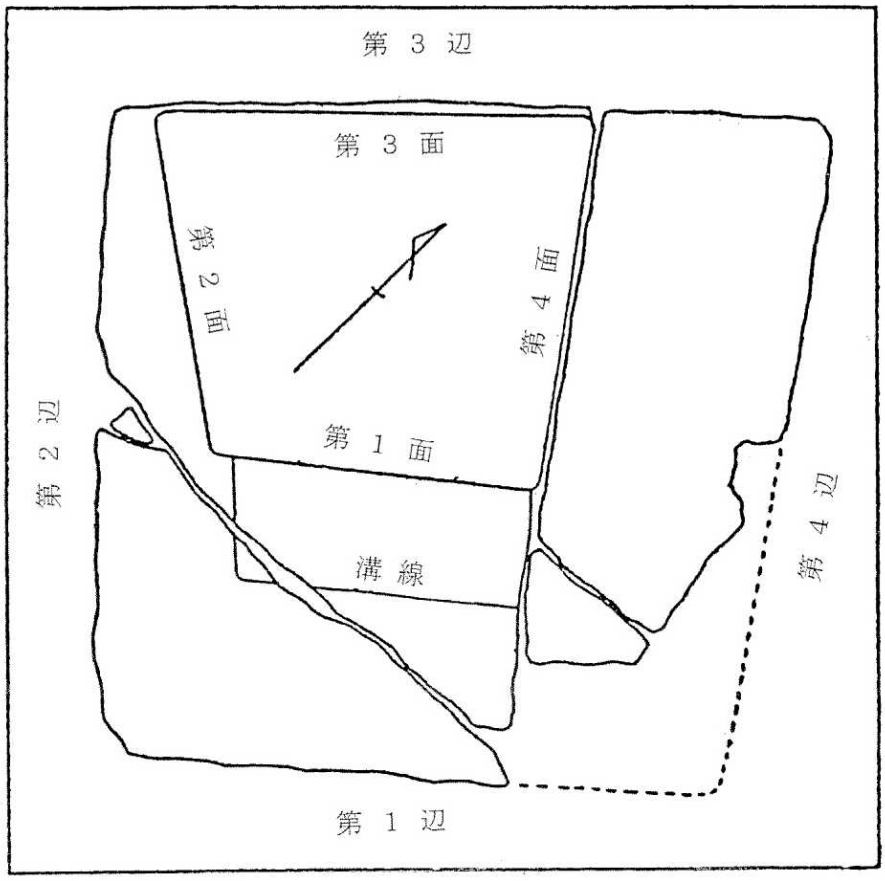
④武田幸男 「広開土王碑の百済と倭」(『百済研究』第17輯, 1986年12月)

⑤武田幸男『高句麗史と東アジア』(1989年6月, 岩波書店)

⑥門田誠一『海からみた日本の古代』(1992年3月, 新人物往来社)

⑦李成市　「表象としての広開土王碑文」(『思想』842号, 1994年8月)

２００４年５月３日（月）午前の広開土王碑



広開土王碑趺石平面図（『通溝』巻上、1938 年 10 月）

第Ⅳ面

9	8	7	6	5	4	3	2	1	
又	不	其	若	家	城	城	殘		1
制	安	不	吾	爲	一	國	南		2
守	石	知	萬	看	家	烟	居		3
墓	碑	法	年	烟	爲	二	韓	□	4
人	致	則	之	國	國	看	國	七	5
自	使	復	後	罡	烟	烟	烟	也	6
今	守	取	安	上	那	八	一	利	7
以	墓	舊	守	廣	旦	瑑	看	城	8
後	人	民	墓	開	城	城	烟	三	9
不	烟	一	者	土	一	國	五	家	10
得	戶	百	但	境	家	烟	太	爲	11
更	差	十	取	好	爲	一	山	看	12
相	錯	家	吾	太	看	看	韓	烟	13
轉	唯	合	躬	王	烟	烟	城	豆	14
賣	國	新	巡	存	句	八	六	奴	15
雖	罡	舊	所	時	牟	味	家	城	16
有	上	守	略	教	城	城	爲	國	17
富	廣	墓	来	言	一	六	看	烟	18
足	開	戶	韓	祖	家	家	烟	一	19
之	土	國	穢	王	爲	爲	農	看	20
者	境	烟	令	先	看	看	賣	烟	21
亦	好	卅	備	王	烟	烟	城	二	22
不	太	看	洒	但	於	就	國	奥	23
得	王	烟	掃	教	利	咨	烟	利	24
擅*	盡	三	言	取	城	城	一	城	25
買	爲	百	教	遠	八	五	看	國	26
其	祖	都	如	近	家	家	烟	烟	27
有	先	合	此	舊	爲	爲	七	二	28
違	王	三	是	民	看	看	閏	看	29
令	墓	百	以	守	烟	烟	奴	烟	30
賣	上	卅	如	墓	比	彡	城	八	31
者	立	家	教	洒	利	穰	國	須	32
刑	碑	自	令	掃	城	城	烟	鄒	33
之	銘	上	取	吾	三	廿	二	城	34
買	其	祖	韓	慮	家	四	看	國	35
人	烟	先	穢	舊	爲	家	烟	烟	36
制	戶	王	二	民	看	爲	廿*	二	37
令	不	以	百	轉	烟	看	二	看	38
守	令	来	廿	當	細	烟	古	烟	39
墓	差	墓	家	羸*	城	散	牟	五	40
之	錯	上	慮	劣	三	那	婁	百	41

第Ⅲ面

14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
城	炅*	看	家	人	民	鴨*	□	□	□	□	□	□	□	1
四	古	烟	爲	國	四	盧	□	城	□	□	□	□	□	2
家	城	句	看	烟	家	凡	王	廿	合	□	□	□	□	3
爲	國	牟	烟	一	盡	所	恩	年	戰	鋒*	□	□	□	4
看	烟	客	南	看	爲	攻	普	庚	斬	相	朝	安*	倭*	5
烟	一	頭	蘇	烟	看	破	覆	戌	殺	遇	貢	羅	□	6
各	看	二	城	卌	烟	城	於	東	蕩	王	十	人	□	7
模	烟	家	一	三	丐	六	是	夫	盡	幢	四	戍	□	8
盧	三	爲	家	奚	城	十	旋	餘	所	要	年	兵	□	9
城	客	看	爲	谷	一	四	還	舊	穫	截	甲	昔	□	10
二	賢	烟	國	二	家	村	又	是	鎧	盪	辰	新	□	11
家	韓	求	烟	家	爲	一	其	鄒	鉀	刻	而	羅	□	12
爲	一	底*	新	爲	看	千	慕	牟	一	倭	倭	寐	□	13
看	家	韓	来	看	烟	四	化	王	萬	寇	不	錦	□	14
烟	爲	一	韓	烟	碑	百	隨	屬	餘	潰	軌	未	□	15
牟	看	家	穢	奚*	利	守	官	民	領	敗	侵	有	興*	16
水	烟	爲	沙	城	城	墓	来	中	軍	斬	入	身	□	17
城	阿	看	水	二	二	人	者	叛	資	殺	帶	來	□	18
三	旦	烟	城	家	家	烟	味	不	器	無	方	論*	□	19
家	城	舍	國	爲	爲	戶	仇	貢	械	數	界	事	□	20
爲	雜	蔦	烟	看	國	賣	婁	王	不	十	□	□	□	21
看	珍	城	一	烟	烟	句	鴨	躬	可	七	□	國	□	22
烟	城	韓	看	安	平	余	盧	率	稱	年	□	罡	□	23
幹	合	穢	烟	夫	穰	民	卑	往	數	丁	□	上	□	24
氐	十	國	一	連	城	國	斯	討	還	未	□	廣	□	25
利	家	烟	牟	廿	民	烟	麻	軍	破	教	石	開	□	26
城	爲	三	婁	二	國	二	鴨	到	沙	遣	城	土	辞	27
國	看	看	城	家	烟	看	盧	餘	溝	步	□	境	□	28
烟	烟	烟	二	爲	一	烟	橋	城	城	騎	連	好	□	29
一	巴	廿	家	看	看	三	社	而	婁	五	船	太	□	30
看	奴	一	爲	烟	烟	東	婁	餘	城	萬	□	王	□	31
烟	城	古	看	□	十	海	鴨	城*	□	□	□	□	□	32
三	韓	須	烟	谷	訾	賈	盧	國	住	□	□	□	□	33
弥	九	耶	豆	三	連	國	粛	駭	城	□	王	□	□	34
鄒	家	羅	比	家	二	烟	斯	□	□	□	躬	□	□	35
城	爲	城	鴨	爲	家	三	舎	□	□	□	率	□	□	36
國*	看	一	岑	看	爲	看	鴨	□	□	□	□	□	□	37
烟*	烟	家	韓	烟	看	烟	盧	□	□	□	□	□	□	38
一	臼	爲	五	新	烟	五	□	□	□	□	従*	□	□	39
看	模	看	家	城	俳	敦	□	□	□	□	平	僕	□	40
烟	盧	烟	爲	三	婁	城	□	□	那*	師	穰	勾	潰	41

広開土王碑文釈文

（濱田試釈・原石拓本に依る）

□は釈文不可能な碑字
＊は字画の一部、或いは全体の輪郭が合致する碑字
字は推定可能な碑字

第Ⅰ面

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1	惟	巡	連	龍	二	弔	永	羊	由	南＊	利＊
2	昔	幸	葭	首	九	卅	樂	不	來	攻	城
3	始	南	浮	昇	登	有	五	可	朝	取	雜
4	祖	下	龜	天	祚	九	年	稱	貢	壹	珍
5	鄒	路	然	顧	号	宴	歲	數	而	八	城
6	牟	由	後	命	爲	駕	在	於	倭	城	奥
7	王	夫	造	世	永	棄	乙	是	以	臼	利
8	之	餘	渡	子	樂	國	末	旋	辛	模	城
9	創	奄	於	儒	太	以	王	駕	卯	盧	句
10	基	利	沸	留	王	甲	以	因	年	城	牟
11	也	大	流	王	恩	寅	人	過	来	各	城
12	出	水	谷	以	澤	年	麗	裏＊	渡	模	古
13	自	王	忽	道	□	九	不	平	海＊	盧	須
14	北	臨	本	興	于	月	□	道	破	城	耶
15	夫	津	西	治	皇	廿	□	東	百	幹	羅
16	餘	言	城	大	天	九	人	殘	來	氏	城
17	天	曰	山	朱	威	日	躬	侯	□	利	莫
18	帝	我	上	留	武	乙	率	城	□	城	□
19	之	是	而	王	振	西	往	力	新＊	□	□
20	子	皇	建	紹	被	遷	討	城	羅	□	□
21	母	天	都	承	四	就	過	北	以	城	□
22	河	之	焉	基	海	山	富	豊	爲	關	城
23	伯	子	不	業	掃	陵	山	五＊	臣	弥	□
24	女	母	樂＊	遷	除	於	資	備	民	城	而
25	郎	河	世	至	□	□	山＊	海＊	以	牟	耶
26	剖	伯	位	十	□	立	至＊	遊＊	六	盧	羅
27	卵	女	天	七	庶	碑	鹽	觀	年＊	城＊	城
28	降	郎	遣	世	寧	銘	水	土	丙	弥＊	瑑
29	世	鄒	黄	孫	其	記	上	境	申	沙	城
30	生	牟	龍	國	業	勳	破	田	王	城＊	於
31	而＊	王	來	罡	國	績	其	猟	躬	□	利
32	有	爲	下	上	富	以＊	三＊	而	率	舎	城
33	聖	我	迎	廣	民	示	部	還	□	蔦＊	農＊
34	□	連	王	開	殷	後	洛	百	軍	城	賣
35	□	葭	王	土	五	世	六	殘	討	阿	城
36	□	浮	於	境	穀	焉	七	新＊	伐＊	旦	豆
37	□	龜	忽	平	豊	其	百	羅	殘	城	奴
38	□	應	本	安	熟	辞＊	營	舊	國	古	城
39	□	聲	東	好	昊	曰	牛	是	軍	利	沸
40	命	卽	罡	太	天		馬	屬	□	城	□
41	駕	爲	履	王	不		羣	民	□	□	□

第Ⅱ面

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1	利＊	城	城	侵＊	迷	鳥	通	□		
2	城＊	燕＊	□	□	穴	之	慎	王	遣	
3	弥	婁	□	□	便	愆	土	巡	使	
4	鄒	城＊	城＊	城	錄	谷	下	還		
5	城	析＊	儒＊	囲＊	其	因	平	告		□
6	也	支	□	城	後	便	穰	以		□
7	利	利	盧＊	而＊	順	抄	而	□		□
8	城	城	城	殘	之	得	新＊	計＊		□
9	太	巖	仇	主	誠	莫	羅	十		侵＊
10	山	門	天	困	於	□	遣	年＊		背＊
11	韓	□	城	逼	是	羅	使	庚＊		急＊
12	城	城	□	獻	□	城	白	子		追
13	掃	□	□	□	五	加	王	教		至
14	加	城	□	男	十	太	云	遣		任
15	城	□	城	女	八	羅	倭	步	那	□
16	敦	□	□	生	城	谷	人	騎	加	□
17	拔	□	其	口	村	男	滿	五	羅	□
18	□	□	國	一	七	女	其	萬	従	□
19	□	□	城	千	百	三	國	往	拔＊	盡＊
20	□	□	□	人	將	百	境	救	城	□
21	□	城＊	不	細	殘	餘	潰	新	城	□
22	城＊	利＊	服＊	布	主	人	破	羅	即	□
23	婁	城	義	千	弟	自	城	従	歸	安
24	賣	就	敢	匹	并	此	池	男	服	羅
25	城	鄒	出＊	跪＊	大	以	以	居	安	人
26	散＊	城	百＊	王	臣	来	奴	城	羅	戍
27	□	□	戰＊	自	十	朝	客	至	人	兵
28	城	拔	王	誓	人	貢	爲	新	戍	滿＊
29	那	城	威	従	旋	論	民	羅	兵	□
30	旦	古	赫	今	師	事	歸	城	□	□
31	城	牟	怒	以	還	九	王	倭	□	□
32	細	婁	渡	後	都	年＊	請	滿	□	□
33	城	城	阿	永	八	己	命	其	□	□
34	牟	閏	利	爲	年	亥	太	中	□	□
35	婁	奴	水	奴	戍	百	王	官	城＊	□
36	城	城	□	客	戍	殘	恩＊	軍＊	倭	□
37	丐	貫	□	太	教	違＊	慈＊	方	□	□
38	婁	奴	迫	王	遣	誓＊	稱＊	至＊	倭＊	□
39	城	城	城	恩	偏	与	倭	其	潰	□
40	蘇	彡	□	赦	師	倭	忠	賊	城	□
41	灰＊	穰＊	□	□	觀	和＊	誠＊	退	大	□

第３章　「碑文」と『三国史記』と『日本書紀』の日韓関係史像

はじめに

広開土王碑は391年の大王の即位から412年の大王の薨去に至る22年間の戦果を高句麗中心史観に立って、換言すれば、大王の親征と派兵による勝利の後に形成された「朝貢」と「属民」、「奴客」の関係で結ばれた国際関係を大王の恩徳の拡延として銘記する。

この章ではこの高句麗の大王中心史観から描かれた高句麗の国際関係を『三国史記』を主して他の史料によっても検証するものである。

第１節　「碑文」と『三国史記』

高句麗と百済の関係では、大王の祖である故国原王は371年10月、平壌まで攻め登ってきた百済の近肖古王が率いた３万の軍を迎え撃ったが流矢に当たり、同月 23 日に薨去していた。その後の両国の交戦は次に掲げるように、『三国史記』高句麗本紀と百済本紀とによれば、一進一退であった。372年6月に近肖古王が東晋から「鎮東将軍領楽浪太守」の冊封を受け、また倭に遣使して七支刀等を贈って百済が東晋との冊封関係に入ったことを通知しこの関係への連携を倭王に奨め、384 年7月にも近仇首王が晋に通交し、386 年には百済の世子・餘暉が「使持節都督鎮東将軍百済王」に冊封されるなど東晋との関係が進行した。

一方、高句麗は百済の東に位置する新羅を取り込んで、377 年春に新羅とともに前秦に通交し、また382 年には新羅が前秦に通交するなど高句麗と新羅は華北の王朝に通交した。しかし、故国壌王は 385 年に前秦に変わって勢力を築いた後燕の遼東に攻め入ったが、敗退している（『梁書』巻54・高句驪伝）。

高句麗が南の百済と、また西には後燕の二方の関係に苦慮していた対外情勢のなかで、広開土王は東南方の新羅との関係は優勢に進めた。『三国史記』高句麗本紀によれば、故国壌王は同王９年(392)春に新羅に遣使して威圧すると、新羅王の姪の実聖を質として得た。高句麗は新羅との優位な関係を確固とするや、392年5月に薨去した故国壌王の王位を継いだ広開土王はすぐさまに同年７月から南方の百済に攻勢を仕掛けている。

広開土王が百済に仕掛けた攻撃の展開は「高句麗本紀」に次のように記録される。

○「高句麗本紀」

・故国壌王９年(392)春。遣使新羅修好、**新羅王遣姪実聖為質**。

・広開土王即位年(392)七月。**南抜百済**、抜十城。九月。北伐契丹。虜男女五百口。又招諭本国陥没民口一萬而歸。冬十月。**攻陥百済関彌城**。其城四面峭絶。海水環繞。王分軍七道。攻撃二十日乃抜。

・同２年(393)　八月。**百済侵南辺**。命将拒之。

・同３年(394)　七月。**百済来侵**。**王率精騎五千逆撃敗之**。餘寇夜走。八月。**築国南七城**。**以備百済之寇**。

・同４年(395)　八月。**王與百済戦於浿水之上**。大敗之。虜獲八千餘級。

・同18年(409)　七月。築国東禿山等六城。移平壌民戸。八月。王南巡。

・同22年(413)　十月。王薨。号為廣開土王。

こうした高句麗の優勢な百済との交戦は「百済本紀」では主客を交替してより詳しく記録されるが、倭兵の動向については「高句麗本紀」にも見えなかったが、ここにも見えない。

○「百済本紀」

・辰斯王８年(392) 七月。**高句麗王談徳帥兵四萬。来攻北鄙。陷石峴等十余城。**王聞談徳能用兵。不得出拒。漢水北諸部落多没焉。冬十月。**高句麗攻拔関彌城。**王田於狗原。経旬不返。

・阿華王２年(393) 八月。王謂武曰。関彌城者我北鄙之襟容也。今為高句麗所有。此寡人之所痛惜。而卿之所宜用心而雪恥也。**遂謀将兵一萬伐高句麗南鄙。**武身先士卒以冒矢石。意復石峴等五城。先囲関彌城。麗人嬰城固守。武以糧道不継。引而歸。

・同３年(394) 七月。**與高句麗戦於水谷城下敗績。**

・同４年(395) 八月。**王命左将真武等伐高句麗。麗王談徳親帥兵七千。陣於浿水之上拒戦。我軍大敗。死者八千人。十一月。王欲報浿水之役。親帥兵七千人過漢水。次於青木嶺下。会大雪。**士卒多凍死。廻軍至漢山城。労軍士。

・同６年(397) 五月。**王與倭国結好。以太子腆支為質。**七月。大閲於漢水之南。

・同７年(398) 八月。**王将伐高句麗。出帥至漢山北柵。**其夜大星落営中有声。王深悪之。乃止。九月。集都人習射於西台。

・同８年(399) 八月。**王欲侵高句麗。大徴兵馬。**民苦於役。多奔新羅。戸口衰滅。

・同 11 年(402) 五月。遣使倭国求大珠。

・同 12 年(403) 二月。倭国使者至。王迎労之特厚。七月。**遣兵侵新羅辺境。**

・腆支王即位年(405) 在倭聞訃。哭泣請歸。**倭王以兵士百人衛送。**既至国界。漢城人階忠来告曰。大王棄世。王弟碟禮殺兄自立。願太子無軽入。**腆支留倭人自衛。依海島以待之。**国人殺碟禮。迎腆支即位。

・同２年(406) 二月。遣使晋朝貢。

・同５年(409) 倭国遣使送夜明珠。王優禮待之。

・同 13 年(417) 七月。徴東北二部人年十五已上、築沙口城。使兵官佐平解丘監役。

・同 14 年(418) 夏。遣使倭国、送白綿十匹。

『三国史記』の両本紀から読みとれる広開土王代の高句麗と百済の交戦は武田氏(1989)も指摘したように、広開土王碑文に見た両国の戦況と十分に対応する。即ち、大王が即位した 392 年の７月から 395 年８月の大王の親征による浿水における百済軍の大敗北と同 11 月の百済阿華王による報復の親征と 397 年５月に、倭国に太子の腆支を質として送り、両国のここまでの関係を確固とし、その後、398 年と 399 年には高句麗へ報復戦を図った経過は、碑文では永楽６年(396)に百済は大王の一大親征を被って「五十八城」と「村七百」を失ったばかりでなく、阿華王が大王の前に跪拝の礼をとって大王の「奴客」となることを誓いながらも、その後直ぐにもこの「誓」を「違」えて「倭」に「和通」した経過と十分に対応するのである。

碑文では永楽９年(399)条に、倭が百済の「和通」を受け、これを契機としてであろうが、新羅が平壌の大王のもとに送った使者の言として倭が新羅の「国境」（新羅の王城）に「満」ちて「城池」を「潰破」していると言う倭兵の具体的な行動を記録している。この経過は後掲する「新羅本紀」では奈勿麻立干

38 年(393)に倭人が新羅の金城を包囲したが、新羅の騎兵 200 と歩卒 1 千に挟撃されて敗走したこと、402 年には王子を倭に入質させたが、405 年と 407 年に倭は新羅の王都や東辺を攻めたことが記録されている。この倭が新羅の王城を襲う記事は碑文に見た永楽 9 年(399)に新羅の使者が大王に報告した新羅の王城の窮状に十分に対応するのである。

また、「百済本紀」には阿華王が 397 年 5 月に倭と結好するや高句麗に報復戦を試みたが、402 年 5 月と 403 年 2 月に倭と使者を相互に交わすや、403 年 7 月には百済が新羅の辺境を襲ったことが記録されている。こうした新羅を襲う百済の行動は碑文には記録されていないが、倭兵と互いに連携した行動であったと見なければならない。その際には、倭兵に対応した新羅兵は騎兵が 200、歩卒が 1000 であり、405 年に倭が百済の質であった王子の腆支を百済に護送した際の倭兵が 100 人であった兵数が注目される。碑文には大王が「歩騎五萬」の兵を派遣して新羅を救援したとあったが、これは必ずしも兵数の実数ではなかろうし、それは新羅王城を襲う倭兵の数が「歩騎五萬」に対応するほどの大軍であったと見るよりも、「歩騎五萬」の大王派遣軍は百済兵と「任那加羅」「任那安羅」と「倭賊」の連合兵に対応する陣容であったと考えるべきである。

○**「新羅本紀」**①

・奈勿麻立干 37 年(392) 正月。高句麗遣使。**王以高句麗強盛。送伊飡大西知子実聖為質**。

・同 38 年(393) 五月。**倭人来囲金城。五日不解**。将士皆請出戦。王曰。今賊棄舟深入。在於死地。鋒不可当。乃閉城門。賊無功而退。**王先遣勇騎二百**。遮其帰路。又**遣歩卒一千**。追於獨山。夾撃大敗之。殺獲甚衆。

・同 46 年(401) 七月。高句麗質子実聖還。

・実聖麻立干元年(402) 三月。**與倭国通好。以奈勿王子未斯欣為質**。

・同 4 年(405) 四月。**倭兵来攻明活城**。不克而歸。王率騎兵。要之獨山之南。再戦破之。殺獲三百餘級。

・同 6 年(407) 三月。倭人侵東辺。夏六月。又侵南辺。奪掠一百人。

・同 7 年(408) 二月。王聞倭人於対馬島置営。貯以兵革資粮。以謀襲我。我欲先其未発。揀精兵撃破兵儲。

・同 11 年(412) **以奈勿王子卜好。質於高句麗**。

・同 14 年(415) 八月。與倭人戦於風島克之。

・訥祇麻立干 2 年(418) 正月。王弟卜好自高句麗、與堤上奈麻還来。秋。王弟未斯欣自倭国逃還。

・同 8 年(424) 二月。遣使高句麗修聘。

・同 15 年(431) 四月。**倭兵来侵東辺。囲明活城**。無功而退。

・同 17 年(433) 七月。百済遣使請和。従之。

碑文は続いて、大王が倭兵の侵入から新羅を救うべく永楽 10 年(400)に「歩騎五萬」を派遣したが、派遣軍が「新羅城」(新羅の王城)に「至」るや「倭賊」は新羅の王城から「退」いたから、高句麗軍はこれを「急追」して「任那加羅」(金海)の「從拔城」に至って、城を「帰服」させたこと、この高句麗派遣軍の新羅救援戦はここに至るまで新羅の「寐錦」(国王)が自ら高句麗に来て新羅の「事」を「論」ずる礼をとったことはなかったが、新羅を救援した大王の恩に感じて新羅王は王子の「僕勾」を使者と

して「朝貢」させて来たという両国関係の新展開を記録している。

この高句麗と新羅の関係も前掲の「新羅本紀」では継続する倭兵の襲来に備えて412年には新羅が王子の卜好を高句麗に入質させて高句麗との従属関係を進めたことに対応する。

永楽10年の新羅救援はひとまず功を奏したのであるが、倭を完敗させることはできなかったらしく、永楽14年(404)になると倭は「帯方界」にまで「侵入」し、「船」を「連」ねたから、大王は「平穰」から親征し、これを迎撃して「倭寇」を「潰敗」させ、「斬殺」すること「無数」の戦果を挙げたと記録して、碑文は対倭関係を締めくくっている。この「倭寇」の北上も「百済本紀」に腆支王が405年に即位した事情として、倭兵 100 人に護送されて入質先の倭国から漢城に戻る直前に海嶋で待機したと言う。この倭兵の朝鮮半島西海岸を漢城付近まで北上した海上交通があればこそ可能な倭の「帯方界」への「侵入」である。

ついで、碑文は永楽17 年(407)に大王は「歩騎五萬」を派遣して敵を「斬殺」、「蕩盡」し、その武器を獲得すること数え切れぬばかりでなく、六城を「破」ぶった戦果を記録している。この派遣軍は潰滅させた「倭寇」と「和通」している百済に向けてなされた遠征と考えられるから、碑文は大王時代の対百済戦をこのように高句麗優勢の戦況で結んだのであるが、百済との関係では「奴客」関係の復活或いは「朝貢」関係を構築することはできなかったのである。

ところで、この永楽17 年(407)の大王の百済派兵のことは『三国史記』の本紀には対応する記事がないこともあってか、後燕に向けて派兵されたものとする理解がある（千、1973）。しかし、広開土王代の後燕との関係は『梁書』巻54・諸夷・高句驪には、395年に即位した後燕王の寶から広開土王は「平州牧遼東帯方二国王」と冊封され、「遼東郡」をほぼ領有したことが記録されている。また、『晋書』巻124・載記・慕容盛には399 年頃に広開土王が後燕に遣使し方物を貢いだが、『資治通鑑』巻 111・晋紀には 400 年には広開土王が後燕に対して礼が「慢（おろそか）」であったために後燕王の慕容盛の率いた３万の兵の攻撃を受けたから、高句麗は402 年、404 年に後燕に反撃し、405 年、406 年には後燕の攻撃を受ける攻防であった。こうした攻防戦の後の 408年に、大王は後燕に遣使したところ、後燕では慕容熙の位を継いだ慕容雲はその祖父を高句麗の支庶とする血筋から、大王を後燕王室の宗族に叙したのである。また、『太平御覧』巻359・兵部・障泥によれば、この頃、大王は南燕にも遣使して千里馬や皮障泥等を献じている。

こうした、大王時代の後燕との関係は一戦において高句麗が勝利することがあっても(402)、大王の恩徳によって結ばれた高句麗中心の国際秩序のなかに、後燕との関係は組み込まれないのである。碑文がこの関係を曲げて高句麗優位の戦果として銘記することは出来ないのであって、「宗族」に叙せられたのであれば尚のこと後燕との一時の戦果は碑文には銘記できず、銘記すればそれは後燕の知るところとなって外交摩擦を生む危険がある。

碑文に記録された大王の対外戦争によって築かれた高句麗中心の国際関係のなかで新羅救援戦を中心とした倭と百済に向けた交戦も『三国史記』の３本紀の記録とも充分に対応している。

『三国史記』の本紀は年月に従った編年法であるが、碑文は大王の戦争による高句麗中心の国際関係を限定された碑石の枠内で編年するから、ここには編年の妙技が大いに加わっている。前置き文を設定して対外戦争を高句麗中心の発生原因を提示し、親征の経過と戦果、その後の高句麗中心の国際関係の設定の順に、これらを恐らく親征のあった永楽の年に編年した法がその最たる例である。碑文と『三国史記』の本紀が同一の歴史を対象としながらも、その事柄の編年が完全には一致しないのはこの編年法

の違いに根本原因があると考えられる。

第２節　「辛卯年」条の理解

そこで、想起される問題は、所謂「辛卯年」条の検討である。「百済新羅は舊（もと）是属民にして由来朝貢す」と高句麗が認識する３国の関係を他の文献史料からは見いだせない。「新羅本紀」には 392 年春に新羅の奈勿王は姪の実聖を高句麗に入質させ、また実聖が 401 年に帰国した後の 412 年には王子の卜好を高句麗に入質させたことが記録される。倭兵と百済の侵入に苦慮して高句麗の「強盛」に頼った新羅の外交や、或いは前述したように 377 年、382 年と高句麗の協調を得て前秦に通交した関係は碑文の史観からは「新羅」は高句麗の「旧（もと）是属民なり」と評価されたのであろうか。あまりにも高句麗中心史観である。

一方、「百済」も高句麗の「属民」であって、「朝貢」してきていたとの高句麗の認識の根拠はここまでの文献では明瞭ではない。百済王室の始祖が高句麗の始祖と同祖であるとする神話が高句麗側にも既知のものであったかは不明である。初期の王城であった漢城地域の墳墓等に高句麗文化の要素が見られるとは言え、「百済が属民として高句麗に朝貢していた」とは前述したように４世紀半ば以降の２国間関係からは証明できない。むしろ、対朝鮮半島南部勢力に向けた高句麗中心の“回復すべき関係史”として大王時代の対百済・新羅関係を刻記する冒頭部分に掲げられ架空の関係史像であろう。

ところで、碑文に記録された高句麗と百済、また高句麗と新羅の関係は『三国史記』の各本紀の記録とも充分に対応することは前述したが、ここで、碑文から読みとられる倭と百済の関係、また倭と新羅との関係も『三国史記』の新羅本紀と百済本紀にも対応する。

即ち、百済王が 396 年に大王軍に敗北するやその「奴客」となりながらも、間をおかずに倭と「和通」したことは、「百済本紀」に見られる 397 年に太子の腆支を倭に入質させたことに対応する。一方、「新羅本紀」によれば新羅は 402 年に王子の未斯欣を倭に入質させている。この件は僧の一然が 13 世紀に撰述した『三国遺事』（巻１、奈勿王・金堤上）や『日本書紀』（巻 9, 気長足姫尊〈神功皇后〉・仲哀天皇）９年 10 月）にも対応する記録がある。新羅は倭に質を入れながらも「新羅本紀」によれば倭の侵攻を塞ぐことは出来てはいない。403 年には百済からの侵攻をも受けている。『三国史記』は倭が新羅の始祖たる赫居世の８年(BC50)に新羅への侵入を試みて以来、後掲の史料に見られるように、３・４世紀には屡々侵入したことを記録している。これらの記事には史料批判が必要であるが、「百済本紀」では倭の侵入のことは見えない。４世紀の倭の新羅侵入は百済から見れば対高句麗戦略に専念できるのであり、百済が高句麗の「奴客」となりながらも直ぐにも倭に和通したことはこのことからも必然のことと判断される。

○「新羅本紀」②

・奈解尼師今 13 年(208) 夏四月。倭人犯境、遣伊伐飡利音、将兵拒之。
・助賁尼師今３年(232) 夏四月。倭人猝至囲金城。王親出戦。賊潰走。遣軽騎追撃之。殺獲一千餘級。
・同４年５月　「倭兵倭東辺」秋七月。伊飡于老與倭人戦沙道、乗風縱火焚舟、賊赴水死盡。
・沾解尼師今３年(249) 夏四月。倭人殺舒弗邯于老。
・儒禮尼師今４年(287) 夏四月。倭人襲一禮部、縱火焼之、虜人一千而去。
・同６年(289)　夏五月。聞倭兵至、理舟楫繕甲兵。

・同９年(292)　夏六月。倭兵攻陥沙道城、命一吉飡大谷領兵救、完之。
・同 11 年(294)　夏。倭兵来攻長峯城、不克。
・同 12 年(295)　春。王謂臣下曰、倭人屢犯我城邑、百姓不得安居、吾欲與百済謀、一時浮海、入撃其国、如何。舒弗邯弘権對曰、吾人不習水戦、冒険遠征、恐有不測之危、況百済多詐、常有呑噬我国之心、亦恐難與同謀、王曰、善。
・基臨尼師今３年(300)　春正月。與倭国交聘。
・訖解尼師今３年(312)　春三月。倭国王遣使為子求婚、以阿飡急利女送之。
・同 35 年(344)　春二月。倭国遣使請婚、辞以女既出嫁。
・同 36 年(345)　春二月。倭王移書絶交。
・同 37 年(346)　倭兵猝至風島、抄掠邊戸、又進囲金城急攻、王欲出兵相戦、伊伐飡康世曰、賊遠至、其鋒不可當、不若緩之、待其師老、王然之、閉門不出、賊食盡将退、命康世率勁騎追撃、走之。
・奈勿尼師今９年(364)　夏四月。倭兵大至、王聞之、恐不可敵、造草偶人数千、衣衣持兵、列立吐含山下、伏勇士一千於斧峴東原、倭人恃衆直進、伏発撃其不意、倭人大敗走、追撃殺之幾盡。

かくて、碑文からは百済と倭が連携して高句麗と新羅に対応した戦略が読みとれるが、これはかの 372 年の七支刀の贈与を契機とした百済と倭の連携以来の戦略である。碑文から読みとれる高句麗、百済と倭、新羅の相互の関係は『三国史記』に記録された４世紀末から５世紀初の４国の相互の関係とは基本的な関係において矛盾はないのである。

そこで、再考したい問題は「辛卯年」条の後半において「倭が百済と新羅を破ってその臣民とした」という記事である。ここまでの史料の検討からは倭が百済を「破った」ことも百済を「臣民」としたとの史実は確定することができない。ただ、付論第４・節５に叙述するように、倭は楽浪・帯方郡への通交が弁韓と馬韓の諸国という朝鮮半島西南部との通交の上に可能であって、この永い歴史を踏まえて、372 年の七支刀を紐帯として強化された百済との連携の外交体制のもとでともに高句麗の膨張に備えていた。百済王は 396 年の広開土王の親征の前に敗れるや、その「奴客」となることを誓いながらも 397 年に直ぐにも倭に太子の腆支を入質させ、高句麗の統制下に再びは入らなかった。高句麗中心の国際関係を銘記する碑文の史観からはこの倭を後ろに置いた百済の動向は「百済は舊（もと）より是属民にして、由来、朝貢す」と言う「本来の関係」としての懐古的な仮想に反するのである。その非現実の根源を大王の即位前の辛卯年(391)に「倭が渡海して来たり、百済を破って臣民とした」ことにあると掲げている。倭が 372 年の七支刀を契機として百済に協調し、朝鮮半島に駐留しては新羅の辺境に侵攻する動向は高句麗から見れば、百済との「本来の関係」を破壊する倭の行為として碑文の対百済関係記事の冒頭に掲げられたのである。そこには、372 年以来の高句麗と百済との一進一退の戦況のなかで、高句麗は倭兵が百済軍とともに抵抗する姿を見ていたのかも知れない。

また、「辛卯年」条の記録法を以上のように理解すると、同条での新羅の位置も百済と基本的には通じている。ただ、新羅は高句麗中心史観から「舊（もとより）是属民にして、由来、朝貢す」と評価される関係史は前述したように前秦への通交において高句麗へ依存していた例や、391 年と 401 年に王族と王子を高句麗に入質させたことがあったのであり、また、「新羅本紀」にみられたように、３世紀にも「倭

兵」の侵入を屡々受けていた。こうした新羅の位置は高句麗中心史観からは、広開土王が再構築すべき「新羅は舊（もと）是属民にして、由来、朝貢す」という懐古的な関係のそうではない現実の根源が「倭が渡海して来たり、破って臣民としている」ことにあると掲げたのである。高句麗中心の国際関係の破壊者としての倭が対新羅関係記事の冒頭にも提示されているのである。

ここで、注意したいことは、「倭が渡海して百済と新羅を破り、臣民とした」という辛卯年条記事をそのままに倭と２国との関係史としては理解出来ないことである。百済と倭との関係には前述したように372 年の七支刀の贈与を一大契機として両者の絆は従前にもまして固くなり、百済の対高句麗戦に共同したとも推量され、倭の新羅辺境への襲来はその一貫としても考えられるが、倭が「百済を破った」と言う歴史はここまでの史料の検討からは確認できない。

また、一方、倭と新羅の関係では「新羅本紀」には４世紀にも倭兵が新羅の辺境へ侵攻したことが屡々記録されている。倭の勢力が４世紀後半には百済との共同関係から朝鮮半島南部地域に存在し新羅を襲っていたことは十分に考えられる。「辛卯年」条は高句麗中心史観に立って、高句麗と百済、新羅との関係を「属民としての朝貢」関係であったと懐古的に設定し、これを破壊した外敵として倭が百済と協調しつつ新羅の辺境を侵す動向を「渡海」してこの２国を「破」り、「臣民」としているとの飛躍した仮想の事態を大王の親征による百済戦と新羅救援戦の冒頭に設定したものと考察される。

碑文は大王が朝鮮半島中南部に展開した百済と倭との戦い、それに新羅の救援戦等によって形成された高句麗の国際関係を記録し、その戦果によって拡大された新領域からも王都に招集された守墓人烟戸が守墓の奉仕をする行動によってもこの国際関係は表現される。こうした碑文の意義に照らすと、「百済新羅舊是属民由来朝貢」の表現は高句麗のここまでの２国との関係を自己中心的に飛躍した解釈の上で回復すべき本来の関係としてこの記念すべき国家の巨碑に銘記したのであろう。この「朝貢」の根源を説く史観は後述するように720 年に編纂が完成した『日本書紀』が神功皇后の戦果として高句麗、新羅、百済が並な朝貢することとなったとする歴史観にも共通して関心を呼び起こす。

さて、加耶諸国の動向は碑文に詳細ではない。大王は新羅からの救援要請をうけると、永楽 10 年(400)に歩騎５万の兵を派遣して新羅の王城を倭賊の侵攻から救援するなかで、派遣軍は敗走する倭賊を追撃し「任那加羅」の拠点と思われる「従拔城」に進軍した。すると、従拔城は直ぐにも高句麗軍に帰服したが、「安羅人戍兵」が抵抗戦を展開している。その抵抗戦のなかに「倭」字も少なくとも３回刻されており、「倭」兵の動向も推測される。しかし、高句麗軍はこれらを潰敗させたらしい。“らしい”と言うのは碑文には「安羅人戍兵」が３度確認されるが、２度は文脈では主語の位置にあるから、この場合の「安羅人戍兵」の行動は高句麗軍からみれば抵抗の動きである。また、３度目の「安羅人戍兵」は文脈の結びにあって、その５字前には「潰」の字が読まれるから、この「安羅人戍兵」は高句麗軍が打撃しかつ潰敗させたのであろう。

ここで、「任那加羅」と「安羅人戍兵」とは倭とも相互に対立していない行動が読みとれる。「安羅」もその実「任那加羅」と同じく「任那安羅」と高句麗では認識されていたであろう。『三国志』韓伝に記録された３世紀後半の「弁韓十二国」の中には「倭と界を接」する瀆盧国があり、「狗邪国」は碑文では「任那加羅」に比定され、今日の慶尚南道金海である。また、「安邪国」も碑文では“任那「安羅」”であり、今日の慶南の咸安に比定される。

高句麗軍が 400 年に洛東江下流右岸の金海とその西隣の咸安まで倭を追走し、この任那の二つの勢力の抵抗戦を受けているところから判断すると、倭軍の新羅王城包囲作戦は任那の２勢力の共同歩調がな

ければ成し得ない進軍行動である。

前掲の「新羅本紀」①②からは、３世紀から５世紀半ばまで倭兵が新羅の辺境や王城を襲った記事が屡々見られたが、倭兵が高句麗や百済を襲う記事を見ない。また、「新羅本紀」には倭人の新羅襲撃に先立つように、１世紀後半から２世紀前半まで加耶が新羅を襲う記事が屡々みられるが、212 年には加耶が新羅に王子を入質することで両者の関係は安定している。

この加耶の新羅襲撃とその収束の後を継ぐように現れた３世紀以降の倭による新羅襲撃は、史料の「新羅本紀」にどれほどの信憑性があるのか検討を要するが、４世紀後半の倭と新羅との関係の記録は碑文とも大きく矛盾するところはない。倭が慶尚道南部の勢力と大きく対立することなく新羅を襲う関係は、１世紀以来継続する倭人の楽浪郡への通交と、また帯方郡が３世紀前半に開設されたことによってさらに推進されたこの２郡とここを介しての洛陽への通交と中国諸王朝への朝貢の歴史から蓄積された倭と朝鮮半島の南部と西部の海浜を中心とした地域との交流がある。両者ともに２郡と洛陽から威信財を得て、自己の政治的基盤を固め、文物の優位性を発揮することによって首長間の地域統合が有利に進み、王権化に上昇することが可能であった。

この通交には倭の使者が加耶地域や馬韓、その発展である百済の沿海を経由することが不可欠であって、この地域の「臣智」（首長）、或いはその後の小国王は辺境或いは遠方の首長、ここでは倭王やその使者を２郡や洛陽に嚮導し、或いは共助することによって、自己の位置が中国王朝にも、倭国に対しても優位に取り得たのである。東アジア地域の冊封体制では、王朝より遠方に位置する勢力は中国に近く接する隣国に勝る位置に置かれている。中国に地理的に近い内側の被冊封国は近隣の勢力を中国に嚮導した。「重訳」の提供がその好例であるが、また、中国の文物を遠国に伝える義務があったことを思えば、倭は１世紀以来、弁韓の海浜の諸国（狗邪国、安邪国）や馬韓そして百済から中国通交の便宜を供与されていた。そのことが 372 年の七支刀の贈与を一大契機として倭が百済との関係から高句麗の脅威を意識し、百済に応じて新羅を侵し、また朝鮮半島南部から西部の通交確保の立場からこの方面への軍事的な関心が高まり、行動へと進行したものと考察される。

さて、ここまで碑文から倭と朝鮮古代の高句麗と百済、新羅それに加耶の５者の関係を検討し、それらが『三国史記』の記録とも充分に対応することを検討してきた。そこで、次には、この４世紀から５世紀わたるこの５者の関係は『日本書紀』の記録といかに対応するか、否かについて検討しよう。

おわりに代えてー『日本書紀』朝鮮関係記事の基本性格ー

後掲の『日本書紀』は４世紀半ばから５世紀初までの日韓関係史記事であるが、これを七支刀と広開土王碑や中国史料と『三国史記』によって構成されたここまでの日韓関係史像と対照すれば以下のような問題と価値が指摘できる。

まず、『日本書紀』では百済との関係史が主体となっているが、これを『三国史記』「百済本紀」の記録と対象すると、『日本書紀』では圧倒的に記録は豊かであって、それらは人物中心の「物語」的な叙述である。そのことは、『日本書紀』の編纂時点となる「今」に生きる氏族の「祖」が国家の過去に務めた業績を明示しているように、氏族の始祖の活躍を物語とする伝承記録が編纂に活用されたことを暗示する。

また、「百済記」を参考しているように、百済関係記事はこの「百済記」を注記しない記事にあってもこれを編纂の参考としたことは十分に考えられる。例えば、397 年の「王子直支」の日本への入質と 405

年の直支の帰国記事は「百済本紀」に見た腆支の入質と帰国とその後の即位記事と矛盾しない。矛盾しない点は405年の阿華王の薨去記事もそうであるが、このほかにも、392年の辰斯王の薨去と阿華王の即位、また375年の肖古王の薨去と翌376年の貴須王の即位は「百済本紀」では375年11月に近肖古王が薨去し、近仇首王が即位したとの記録と称元法の差異による一年の差はあるが、対応するのである。

「百済本紀」によれば、近肖古王30年(375)条に「古記云、百済開国已来、未有以文字記事、至是博士高興、始有書記、然高興未嘗顕於他書、不知其何許人也」とあるが、372年の七支刀を仿製してその由来の文を象嵌していたが、この頃より百済は確かに記録書を持つようになったと考えられる。その高興とは出自不明というが、この頃、百済は高句麗の故国原王の軍と一進一退の戦況であったが、こうした中で高興は「高」というその姓氏から高句麗の王族に近い知識人であったかと推測される。

ただ、前掲の『日本書紀』の記録は「百済記」を参考史料としたことで、「百済本紀」の百済王系譜に対応するとは云え、『日本書紀』に豊富に記録された人物の行状を中心とした百済と倭国との関係史がそのままに史実であると認めるには慎重でなければならない。『日本書紀』の記録が氏族の始祖の行状を「物語」化し、また後世の百済関係も『日本書紀』編纂時の「今」、即ち8世紀初に至るまでの律令国家成立過程において、氏族が国家への寄与を顕示しつつ「物語」化が進んだものと考えられるからである。しかし、「物語」化が全くの架空の物語ではなく、「歴史の記憶」を「物語」化したのである。「物語」化のなかに歴史を読みとる作業は批判的に継承されなければならない。その「物語」化のなかでは「好ましくない歴史」は氏族の歴史としては忘却されがちである。広開土王との戦いが『日本書紀』に全くその影すら読みとれないのはそのためであろうが、4世紀末から5世紀初の高句麗との戦いの記憶は『宋書』巻97・倭国伝に記録された478年の倭の五王の中の武王の上表文のなかで「句驪無道、圖欲見呑」と述べて宋の順帝に高句麗を非難したことに見られるように、国家の次元では忘却されていないのである。

○『日本書紀』

☆『日本書紀』巻9・気長足姫尊（神功皇后）紀

・同46年(366)「春三月乙亥朔、遣斯摩宿禰于卓淳国。〔斯摩宿禰者、不知何姓人也〕於是、卓淳王末錦旱岐、告斯摩宿禰曰、**甲子年(364)**七月中、百済人久氐、彌州流、莫古三人、到於我土曰、百済王、聞東方有日本貴国、而遣臣等、令朝其貴国。故求道路、以至于斯土。若能教臣等、令通道路、則我王必深徳君王。時謂久氐等曰、本聞有貴国。然未曾有通、不知其道。唯海遠浪嶮。則乗大船、僅可得通。若雖有路津、何以得達耶。於是、久氐等曰、然即當今不得通也。不若、更還之備船舶、而後通矣。仍曰、若有貴国使人来、必應告吾国。如此乃還。爰斯摩宿禰即以傍人爾波移與卓淳人過古二人、遣于百済国、慰労其王。**時百済肖古王**、深之歓喜、而厚遇焉。仍以五色綵絹各一匹、及角弓箭、并**鐵鋌四十枚**、幣爾波移。便復開寶蔵、以示諸珍異曰、吾国多有是珍寶。欲貢貴国、不知道路。有志無従。然猶今付使者、尋貢獻耳。於是、爾波移奉事而還、告志摩宿禰。便自卓淳還之也。」

・同47年(367)「夏四月、百済王使久氐、彌州流、莫古、令朝貢。時新羅国調使、與久氐共詣、於是、皇太后、太子誉田別尊、大歓喜之曰、先王所望国人、今来朝之。痛哉、不逮于天皇矣。群臣皆莫不流涕。仍檢校二国之貢物。於是、新羅貢物者、珍異甚多。百済貢物者、少賤不良。便問久氐等曰、百済貢物、不及新羅、奈之何。對曰、臣等失道、至沙比新羅。則新羅人捕臣等禁囹圄。經三月而欲殺。時久氐等、向天而呪詛之。新羅人怖其呪詛而不殺。

則奪我貢物、因以、為己国之貢物。以新羅賤物、相易為臣国之貢物。謂臣等曰、若誤此辭者、及于還日、當殺汝等。故久氐等恐怖而従耳。是以、僅得達于天朝。時皇太后、誉田別尊、責新羅使者、因以、祈祈天神曰、當遣誰人於百済、将檢事之虚實。當遣誰人於新羅、将推問其罪。便天神誨之曰、令武内宿禰行議。因以千熊長彦為使者、當如所願。〔千熊長彦者、分明不知其姓人。一云、武蔵国人。**今是額田部槻本首等之始祖也。百済記**云職麻那々加比跪者、蓋是歟也〕於是、遣千熊長彦于新羅、責以濫百済之獻物」

・同 49 年(369)「春三月、以荒田別、鹿我別為将軍。則與久氐等、共勒兵而度之、至卓淳国、将襲新羅。時或曰、兵衆少之、不可破新羅。更復、奉上沙白、蓋盧、請増軍士。即命木羅斤資、沙々奴跪〔是二人、不知其姓人也。但木羅斤資者、百済将也。〕領精兵、與沙白、蓋盧共遣之。俱集于卓淳、撃新羅而破之。因以、平定比自㶱、南加羅、喙、安羅。多羅、卓淳、加羅七国。仍移兵、西廻至古爰津、屠南蠻忱彌多禮、以賜百済。於是、其**王肖及王子貴須**、亦領軍来會。時比利、辟中、布彌支、半古、四邑、自然降服。是以、百済王父子及荒田別、木羅斤資等、共會意流村〔今云州流須祇〕。相見欣感。厚禮送遣之。唯千熊長彦與百済王、至于百済国、登辟支山盟之。復登古沙山、共居磐石上。時百済王盟之曰、若敷草為坐、恐見火焼。且取木為坐、恐為水流。故居磐石而盟者、示長遠之不朽者也。**是以、自今以後、千秋萬歳、無絶無窮。常稱西蕃、春秋朝貢**。則将千熊長彦、至都下厚加禮遇。亦副久氐等而送之」

・同 50 年(370)「春二月、荒田別等還之。夏五月、千熊長彦、久氐等、至自百済。於是、皇太后歡之問久氐曰、海西諸韓、既賜汝国。今何事以頻復来也。久氐等奏曰、天朝鴻澤、遠及弊邑。吾王歡喜踊躍、不任于心。故因還使、以致至誠。雖逮萬世、何年非朝。皇太后勅云、善哉汝言。是朕懐也。増賜多沙城、為往還路驛」

・同 51 年(371)「春三月、百済王亦遣久氐朝貢。於是、皇太后語太子及武内宿禰曰、朕所交親百済国者、是天所致。非由人故。玩好珍物、先所未有。不闕歳時、常来貢献。朕省此款、毎用喜焉。如朕存時、敦加恩恵。即年、以千熊長彦、副久氐等遣百済国。因以、垂大恩曰、朕従神所験、始開道路。平定海西、以賜百済。今復厚結好、永寵賞之。是時、百済王父子、並顙致地、啓曰、貴国鴻恩、重於天地。何日何時、敢有忘哉。聖王在上、明如日月。今臣在下、固如山岳。永為西蕃、終無貳心」

・同 52 年(372)「秋九月丁卯朔丙子、久氐等従千熊長彦詣之。則献**七枝刀**一口、七子鏡一面、及種々重宝。仍啓曰、**臣国以西有水。源出自谷那鉄山**。其邈七日行之不及。當飲是水、便取是山鉄、以永奉聖朝。乃謂孫枕流王曰、今我所通、海東貴国、是天所啓。是以、垂恩、割海西而賜我。由是、国基永固。汝當善脩和好、聚斂土物、奉貢不絶、雖死何恨。自是後、毎年相續朝貢焉」

・同 55 年(375)「百済**肖古王**薨」

・同 56 年(376)「百済**王子貴須立**為王」

・同 62 年(382)「新羅不朝。即年、遣襲津彦撃新羅〔**百済記**云、**壬午年(382)**、新羅不奉貴国、々々遣沙至令討之。新羅人荘飾美女二人、迎誘於津。沙至比跪、受其美女、反伐加羅国。々々々王己本旱岐、及兒百久至、阿首至、国沙利、伊羅麻酒、爾汶江至等、将其人民、来奔百済。百済厚遇之。加羅国王妹既殿至、向大倭敬云、天皇遣沙至比跪、以討新羅。而納新

羅美女、捨而不討。反滅我国。兄弟人民、皆為流沈。不任憂思。故、以来啓。天皇大怒、即遣木羅斤資、領兵衆来集加羅、復其社稷。一云、沙至比跪、知天皇怒、不敢公還。乃自竄伏。其妹有幸於皇宮者。比跪密遣使人、問天皇怒解不。妹乃託夢言、今夜夢見沙至比跪。天皇大怒云、比跪何敢来。妹以皇言報之。比跪知不免、入石穴而死也〕」

・同 64 年(384) 「百済国**貴須王**薨。王子**枕流王**立為王」

・同 65 年(385) 「百済**枕流王**薨。王子**阿華**年少。叔父**辰斯**奪立為王」

☆『日本書紀』巻 10・誉田天皇（応神天皇）紀

・同 3 年(392) 「是歳、**百済辰斯王**立之失禮於貴国天皇。故遣紀角宿禰、羽田矢代宿禰、石川宿禰、木菟宿禰、嘖譲其无禮状。由是、百済国殺**辰斯王**以謝之。紀角宿禰等、便立**阿華**為王而歸」

・同 7 年(396) 「秋九月、高麗人、百済人、任那人、新羅人、並来朝。時命武内宿禰、領諸韓人等作池。因以、名池號韓人池」

・同 8 年(397) 「百済人来朝〔**百済記**云、**阿華王**立无禮於貴国。故奪我枕彌多禮、及峴南、支侵、谷那、東韓之地。是以、遣**王子直支**于天朝、以脩先王之好也〕」

・同 14 年(403) 「春二月、百済王貢縫衣工女。曰眞毛津。是**今来目衣縫之始祖也**。是歳、弓月君自百済来歸、因以奏之曰、臣領己国之人夫百廿縣而歸化。然因新羅人之拒、皆留加羅国。爰遣葛城襲津彦、而召弓月之人夫於加羅。然經三年、而襲津彦不来焉。」

・同 15 年(404) 「秋八月壬戌朔丁卯、百済王遣阿直伎、貢良馬二匹。即養於軽坂上厩。因以阿直岐令掌飼。故號其養馬之處、曰厩坂也。阿直岐亦能讀經典。即太子菟道稚郎子師焉。於是、天皇問阿直岐曰、如勝汝博士亦有耶。對曰、有王仁者。是秀也。時遣上毛野君祖、荒田別、巫別於百済、仍徵王仁也。其阿直岐者、**阿直岐史之始祖也**」

・同 16 年(405) 「春二月、王仁来之。則太子菟道稚郎子師之。習諸典籍於王仁。莫不通達。所謂王仁者、是**書首等之始祖也**。是歳、百済**阿華王**薨。天皇召**直支王**謂之曰、汝返於国以嗣位。仍且賜東韓之地而遣之。〔東韓者、甘羅城、高難城、爾林城是也。〕八月、遣平群木菟宿禰、的戸田宿禰於加羅。仍授精兵詔之曰、襲津彦久之不還。必由新羅之拒而滞之。汝等急往之撃新羅、披其道路。於是、木菟宿禰等進精兵、莅于新羅之境。新羅王愕之服其罪。乃率弓月之人夫、與襲津彦共来焉。」

・同 20 年(409) 「**倭漢直祖阿知使主、其子都加使主、並率己之黨類十七縣、而来歸焉**」

・同 25 年(414) 「**百済直支王薨。即子久爾辛立為王**。王年幼。木満致執国政。與王母相淫、多行無禮。天皇聞而召之。〔**百済記**云、木満致者、是木羅斤資、討新羅時、娶其国婦、而所生也。以其父功、専於任那。来入我国、往還貴国。承制天朝、執我国政。権重當世。然天朝聞其暴召之〕」

・同 28 年(417) 「秋九月、高麗王遣使朝貢。因以上表。其表曰、高麗王教日本国也。時太子菟道稚郎子讀其表、怒之責高麗之使、以表状無禮、則破其表」

・同 31 年(420) 「秋八月･･･中略･･･於是、得五百籠鹽。則施之周賜諸国。因令造船。是以、諸国一時貢上五百船。悉集於武庫水門。當是時、新羅調使、共宿武庫。爰於新羅停忽失火。即引之及于聚船。而多船見焚。由是、責新羅人。新羅王聞之、讐然大驚、乃貢能匠者。**是猪名部等之始祖也**。・・・後略・・・」

・同 37 年(426) 「春二月戊午朔、遣阿知使主・都加使主於呉、令求縫工女。爰阿知使主等、渡高麗国、欲達于呉。則至高麗、更不知道路。乞知道者於高麗。高麗王乃副久禮波、久禮志、二人、為導者。由是、得通呉。呉王、於是、與工女兄媛、弟媛、呉織、穴織、四婦女」

・同 39 年(428) 「春二月、百済**直支王**、遣其妹新齊都媛以令仕。爰新齊都媛、率七婦女、而来帰焉」

〔主要参考文献〕

・『日本書紀』上（日本古典文学大系 67, 1967 年 3 月, 岩波書店）

・『日本書紀』①②（新編日本古典文学全集 1, 2, 1994 年 4 月, 小学館）

・津田左右吉『古事記及び日本書紀の新研究』(『津田左右吉全集』別巻第一, 岩波書店, 1966 年 2 月）

・池内 宏　『日本上代史の一研究』(1947 年 8 月)

・前田直典　「応神天皇朝といふ時代」(『オリエンタリカ』第 1 号, 1948 年。のちに上田正昭編『論集日本文化の起源』第 2 巻・日本史〔平凡社, 1971 年 5 月〕に所収)

・末松保和　『任那興亡史』(初版, 1949 年 2 月, 吉川弘文館)

・佐伯有清　「古代の日本と朝鮮の政治関係」(『歴史公論』第 4 巻第 9 号, 1978 年 9 月）

・田中俊明　「『三国史記』にみえる「倭」関係記事について」(『歴史公論』第 8 巻第 4 号, 1982 年 4 月）

・平野邦雄　『大化前代政治過程の研究』(「第一編　四、五世紀のヤマト王権」吉川弘文館, 1985 年 6 月）

・三品彰英　『日本書紀朝鮮関係記事考證』上・下巻（2002 年 12 月, 天山舎。〔「上巻」のみは 1972 年 11 月に吉川弘文館より刊行〕）

・木下礼仁　『日本書紀と古代朝鮮』(1993 年 10 月, 塙書房）

・笠井倭人　『古代の日朝関係と日本書紀』(2000 年 1 月, 吉川弘文館）

付　論

第１章　古代日韓関係史の誕生－朝鮮半島の民族社会と中国の郡県設置－

はじめに

高句麗広開土王碑は414年に大王の在位中の勲績が銘記され建立されたが、そこに記録された百済の大敗北（永楽６年・396年）とこの百済が倭と「和通」した後の倭による新羅王城の包囲戦（永楽９年・399年）と大王軍の掃討戦（永楽年 10・400）、さらに高句麗軍に対抗した百済と倭の共同戦線（永楽17年・407年）は４世紀末から５世紀初めに至る朝鮮半島中南部全域にわたる一大戦争であるが、この歴史的背景を考察するには、ただ、碑文のみによって検討することでは不十分である。碑文はこの極東アジアの一大争乱の時代を高句麗中心に記録するが、この碑文から古代の日韓関係史を考察するには、高句麗の国家的成長とその南への膨張と新羅の動揺、さらには百済の国家的成長と高句麗への抵抗、そして倭と加耶の参戦に至る東アジア諸民族の国家形成と、この過程における社会変容の歴史を把握しておくことが前提としてなければならないと考える。

勿論、この時代に先行する旧石器・新石器時代以来の朝鮮半島と日本列島との間には、人々の相互の往来があり、石器や土器の製作技法の伝播、また弥生時代では稲作法や青銅器・鉄器の原料と製作技法とその作品の伝播等の交流があった。ただ、本論では古代日韓関係史の誕生を文献を通して幅広く、かつ深く理解することに努め、日韓の古代国家形成過程以来の相互関係の歴史像が今日に生きる我々の歴史認識の形成に正当な位置を得るよう多角的な理解に努めるものである。

〔主要参考文献〕

・佐原 真　「農業の開始と階級社会の形成」（岩波講座『日本歴史』1, 1975年5月）
・後藤 直　「考古学からみた弥生時代日本列島と朝鮮半島の交流」（『歴史と地理』第575号〈「日本史の研究」205, 山川出版, 2004年6月〉

第１節　古朝鮮（衛氏朝鮮）の社会－漢の郡県統治の前提－

BC108年と翌BC107年に朝鮮半島の北部を中心とする地域に設置された前漢の郡県、いわゆる漢の４郡は盛衰を経て、楽浪郡は313年に高句麗の攻撃を受けて、また３世紀初に公孫氏によってこの郡の南部に設置された帯方郡が314年に中国東北部へ撤退するに至るが、この400余年の郡県の歴史は、まさに古代日韓関係が歴史として進行する過程である。

そこで、留意すべきことは、朝鮮半島がただ半島の語によって説明されるが如くに、政治的にも、社会的にも一元的なかつ単層の社会ではなかった点である。少なくとも、司馬遷の『史記』巻 115・朝鮮伝に見られるが、古朝鮮の社会には中国東北部の燕をはじめとする勢力に押された人々が流入しており、そこに二元的な社会と文化が生じていたことである。即ち、『史記』朝鮮列伝からは、古朝鮮の地では土着民に加えて、中国東北部からの移住者がひとつの社会を築き、また、その周辺に「真番」「朝鮮」の政治社会が存在したことが確認されるのである。

この朝鮮半島の西北部に多様な政治社会が存在したことは、『史記』以後の歴史書にも見られる。例え

ば、『魏略』（魏・魚豢撰、３世紀末の成立）の逸文を編修した張鵬一の『魏略輯本』(1924 年)巻 21・朝鮮にも「中国亡命」集団が「朝鮮」のなかに一定の勢力を占めていたことが読みとれる。

また、3 世末の陳寿が撰した『三国志』巻 30・魏書・東夷伝・東沃沮にも「漢初、燕亡人衛満王朝鮮、時沃沮皆屬焉」とあり、同じく、「箕子朝鮮」と「衛満朝鮮」には「燕齊趙の民」が流入した社会があり、この朝鮮を沃沮、濊、高句麗、辰韓が取り巻いた多様な政治世界が存したことが理解されるのである。

【史料Ⅰ】『史記』巻 115・朝鮮列伝

朝鮮王満者、故燕人也、自始全燕時、嘗略属眞番、朝鮮、為置吏、築鄣塞。秦滅燕、属遼東外徼。漢興、為其遠難守、復修遼東故塞、至浿水為界、属燕。燕王盧綰反入匈奴、満亡命、聚党千餘人、魋結蛮夷服而東走出塞、度浿水、居秦故空地上下鄣、稍役属真番朝鮮蛮夷及故燕斉亡命者、王之。都王険。

【史料Ⅱ】『魏略輯本』(1924 年)巻 21・朝鮮

燕人衛満亡命、為胡服東渡浿水、詣準降、説準求居西界。故中国亡命、為朝鮮藩屏。準信寵之拝以博士賜以圭。封之百里、令守西辺。満誘亡党、衆稍多。乃詐遣人告準言漢兵十道至、求入宿衛。遂還攻準、準與戦不敵也。

【史料Ⅲ】『三国志』巻 30・魏書・東夷伝・濊「濊南與辰韓、北與高句麗、沃沮接、東窮大海。今朝鮮之東皆其地也、戸二萬。昔箕子既適朝鮮、作八條之教以教之。無門戸之閉而民不為盗。其後四十餘世、朝鮮侯準僭稱王。陳勝等起、天下叛秦。燕齊趙民避地朝鮮數萬口。燕人衛満、魋結夷服、復来王之。漢武帝伐滅朝鮮、分其地為四郡。自是之後、胡漢稍別」

〔主要参考文献〕

・三上次男「古代の西北朝鮮と衛氏朝鮮国の政治・社会的性格」」（同『古代東北アジア史研究』吉川弘文館, 1966 年 8 月）
・李丙燾　「衛氏朝鮮興亡考」（『韓国古代史研究』博英社, 1976 年 3 月, 〔邦訳は『韓国古代史研究－古代史上の諸問題－』学生社, 1980 年 12 月〕

第２節　楽浪郡と玄菟郡－半島の多様性と列島社会－

前漢の武帝は朝鮮（衛氏朝鮮）の衛右渠が外臣の責務に反して朝鮮の南にある真蕃が漢王朝へ朝貢する道を塞いだことを怒り、元封 3 年(BC108 年)に陸海の軍を派遣して朝鮮を滅ぼし、その故都（王倹城）の地、即ち、今日の平壌市楽浪区域に朝鮮県を設置し、計 15 県を統括する楽浪郡の治所をここに置いたのである。同様に朝鮮に属していた地方にも真蕃郡、臨屯郡、玄菟郡の 3 郡を設置したから、朝鮮半島の北部全体と南部に及ぶ朝鮮の地は漢の郡県統治に新しく編成されたのである。

４郡のなかの臨屯郡と真蕃郡の郡治の所在は『資治通鑑』巻 21・漢紀 13・世宗下之上に引かれた『茂陵書』では、「臨屯郡、治東暆縣、去長安六千一百三十八里、領十五縣。玄菟郡、本高句驪也、既平朝鮮、併開為郡、治沃沮城、後為夷貊所侵、徙郡句驪西北。真番郡、治霅縣、去長安七千六百四十里、領十五縣。余據後廢臨屯真蕃二郡」とあるように、この 2 郡の治所は長安から 6 ～ 7 千余里、およそ 3 千㎞内外の地にあったが、正確な所在地は不明である。

ところで、真蕃の名は『史記』巻69・貨殖列伝には「夫燕･･･中略･･･北、隣烏桓夫余。東、綰（すべる）穢貉朝鮮真番之利」とあり、また同巻 115・朝鮮列伝にも「朝鮮王満」の武威の前に、真蕃と臨屯が服属したと云う（「以故満得兵威財物、侵降其旁小邑、真番臨屯皆来服屬」）記録からも、真番臨屯の２郡は地をともに楽浪郡に接する位置にある。

だが、真蕃郡の治所の霅縣については、今日、その候補地が考古学上の知見からは確認されてはないことからも、治所を全羅道を含む半島南部に推定する南在説のほかに、京畿道にこれを推定する北在説がある。

４郡のなかでは長安から最遠の地に郡治を置く真番郡は『漢書』巻 7・昭帝紀に「始元五年(BC82)夏、罷儋耳真番郡」とあり、『後漢書』巻 85・東夷伝・濊にも「至昭帝始元五年、罷臨屯真番、以并楽浪玄菟」ともあって、BC82 年には臨屯、真番の２郡は廃止され、その属県は隣接の楽浪、玄菟の２郡に編入されたのである。

かくて、朝鮮半島中・北部は真番臨屯２郡の県を編入した所謂「大楽浪郡」と玄菟郡の治下のなかで僅かに朝鮮の地に及ぶ県、そして南部には郡県支配に属さぬ地域が存することとなったが、後述するように、廃止された２郡の全県が楽浪郡に編入されたわけではない。

さて、玄菟郡は『漢書』巻 7・昭帝に「元鳳六年(BC75)春正月、募郡国徒、築遼東玄菟城」とあり、前述した２郡の改廃という漢の東方政策に連動して、その郡治が遼東に移動した。この所謂「第２玄菟郡」は漢の東方政策の後退であり、『三国志』巻 30・魏書・東夷伝・東沃沮に「（前略）以沃沮城為玄菟郡。後為夷貊所侵、徙郡句麗西北、今所謂玄菟故府是也」とあるように、「夷貊」即ち、高句麗族の抵抗を受けたのであり、旧玄菟郡の東辺の属県は楽浪郡に編入されたものと推量される。

この朝鮮半島東北部に及ぶ第２玄菟郡の規模については『漢書』巻28・地理志第８下に「玄菟郡。武帝元封四年(BC107)開。高句驪、莽曰下句驪、属幽州〔応劭曰、故真番朝鮮胡国〕。戸四万五千六、口二十二万一千八百四十五。県三。高句驪〔前略･･･応劭曰、故句驪胡〕、上殷台、西蓋馬」と属県は少ない。また、大楽浪郡についても「楽浪郡。〔武帝元封三年開。莽曰楽鮮、属幽州。応劭曰、故朝鮮国也･･･後略〕」戸六万二千八百一十二、口四十万六千七百四十八。県二十五、朝鮮〔応劭曰、武王封箕子於朝鮮〕、[illegible]邯、[illegible]水、含資、黏蟬、遂成、増地、帯方、駟望、海冥、列口、長岑、屯有、昭明〔南部都尉治〕、鏤方、提奚、渾彌、呑列、東[illegible]〔応劭曰、移〕、不而〔東部都尉治〕、蠶台、華麗、邪頭昧、前莫、夫租」とあって、属県と戸口数とを記録する。また、『三国志』巻 30・魏書・東夷伝・東沃沮には「沃沮還属楽浪。漢以土地広遠、在単単大嶺之東、分治東部都尉。治不耐城。別主嶺東七県。時沃沮亦皆為県」とあり、二つの都尉に統括される計12県が楽浪郡に編入されたと考えられるから、楽浪郡の属県は13県から 25 県に拡大したことしたことになる。南部都尉を置いた昭明県が旧真蕃郡の地を、また、東部都尉を置いた不而県とが旧臨屯郡の地を統制したのである。

東部都尉が主管した７県とは東[illegible]県から夫租までの県である。廃止された臨屯郡治であった東[illegible]県に都尉を派遣せず、臨屯郡下の不而県を大楽浪郡の東部支配の拠点として重視したのは、やはり、これに接続する東北からの高句麗族の圧迫に備えてのことであろう。

大楽浪郡には廃止された臨屯、真番の２郡下の県が編入されていたが、楽浪郡に編入された旧真番郡の地は少なく見ても南部都尉が派遣された前記の昭明県から呑列までの５県であろうが、旧郡治の置かれた霅縣の名が見えないのは改名されたのか、この県が楽浪郡から遠地にあったから編入されなかったのかも知れない。

そこで、郡県の社会規模を見れば、大楽浪郡では1戸当たり6.5口であり、1県当たりの戸数は2,512戸と16,270口となる。これに対して、第2玄菟郡は県は僅かに3県であり、1戸当たりは4.9口であり、1県当たりの戸数は15,002戸と73,948口となる。統計数字に誤りがなければ、この2郡の社会構成の差は甚だしい。殊に県の人戸の規模に大きな差がある。楽浪郡は25県を統轄していることに現れているが、人戸の把握が玄菟郡のそれよりも遙かに浸透していると言える。この人戸の把握に差異はその社会構成の差異を反映していよう。

ところで、この大楽浪郡と第2玄菟郡は後漢代には明確な変化を現している。『後漢書』巻23・郡国志5・第23・幽州には所謂、第3玄菟郡について、「玄菟郡〔武帝置、雒陽東北四千里〕。六城。戸一千五百九十四、口四万三千一百六十三。高句驪、遼山遼水出〔山海経、遼水出白平東。郭璞曰、出塞外御白平山。遼山小遼水所出〕。西蓋馬。上殷台。高顕、故属遼東。候城、故属遼東。遼陽、故属遼東〔東観書。安帝即位之年(106年)、分三縣来属〕」とある。また、大楽浪郡については「楽浪郡〔武帝置、雒陽東北五千里〕十八城。戸六万一千四百九十二。口二十五万七千五十。朝鮮、䜌邯、浿水、含資、占蟬、遂成、増地、帯方、駟望、海冥、列口、長岑、屯有、昭明、鏤方、提奚、渾彌、楽都」とある。

これによれば、第2玄菟郡はAD106年に遼東郡の北「二百里」の地に西遷したが、この所謂第3玄菟郡には遼東郡の3県が編入されている。この中で『漢書』巻28・地理志第8下によれば候城には遼東郡の中部都尉が派遣された要衝の県であった。また、大楽浪郡はかの25県から東暆、不而、蠶台、華麗、邪頭昧、前莫、夫租の7県が離脱して18県に減少している。この7県ははじめ臨屯郡に編入されていたと推定された。

かくて、玄菟郡の再度の西遷と大楽浪郡のなかの東北部の7県が郡から離脱した背景にある政治動向は，やはり朝鮮半島の東北部に成長する高句麗族の膨張を看取すべきであろう。

2世紀初の大楽浪郡では1戸当たり約4.2口、1県当たりの戸数は3,416戸、口数は14,280口である。また、第3玄菟郡のそれは1戸当たり27口、1県当たりは約266戸と7,194口である。大楽浪郡と第3玄菟郡との社会構造の数値には後者の戸数に脱字等の誤りを考えたくなるほどその数は少ない。第2玄菟郡より3県を増したにも拘わらず人戸の把握数が少ない。この数値に誤りがなければ、第3玄菟郡は高句驪縣を通して高句驪族を十分には把握できていなかったこと、或いは高句麗県が名目的な存在の性格であったことを暗示させる。

〔主要参考文献〕

・池内 宏 「前漢昭帝の四郡廃合と後漢書の記事」「楽浪郡考」「遼東の玄菟郡と其の属県」「真番郡の位置について」「漢魏晋の玄菟郡と高句麗」「公孫氏の帯方郡設置と曹魏の楽浪・帯方二郡」「曹魏の東方経略」「晋代の遼東」（同『満鮮史研究』上世・第1冊，吉川弘文館，1951年9月，初版。1979年5月，第2版）

・栗原朋信 「漢帝国と周辺諸民族」（岩波講座 世界歴史4『東アジア世界の形成』Ⅰ，1970年5月）

・大阪府立弥生文化博物館『－平成五年秋季特別展－弥生人の見た楽浪文化』（1993年10月）

・田中俊明「高句麗の興起と玄菟郡」（『朝鮮文化研究』第1号，東京大学文学部朝鮮文化研究室，1994年3月）

・李成市 『古代東アジアの民族と国家』（「第一章 東アジアの諸国と人口移動」，1998年3月，岩波書店）

第３節　郡県の社会動向

楽浪郡治址（平壌市楽浪区域土城里）から発掘された封泥には「楽浪大守章」「楽浪大尹章」や「楽浪守丞」「楽浪長史」の長官と次官職の印のほかに、「朝鮮令印」「朝鮮右尉」「駟望丞印」」「屯有令印」「東暆長印」「不而長印」「海冥丞印」「昭明丞印」など各県の長官、次官の職名の押印が多数読みとれる。こうした官吏が郡県を運営したが、郡県社会の安定は山東半島から楽浪郡へ移住する者を呼び込み、一定の勢力を育む者が生まれていた。『後漢書』巻76・循吏・王景伝には「王景。字仲通、楽浪䚟邯人也。八世祖仲、本琅邪不其人・・・中略･･･乃浮海、東奔楽浪山中、因而家焉。父閎、為郡三老。更始敗、土人王調殺郡守劉憲、自称大将軍、楽浪太守。建武六年(AD30)、光武遣太守王遵将兵撃之、至遼東。閎與郡決曹吏楊邑等共殺調迎遵、皆封為列侯、閎獨讓爵。帝奇而徵之、道病卒」とある記事に見られるように、楽浪郡には「土人の王調」が太守を殺害して「大将軍楽浪太守」を自称したように、郡県統治に抵抗する勢力も発生していた。その一方では、この王調を殺害した王閎は８代祖が山東半島からの移住者であった。この王調や王閎の外にも「王光」や「王旴」等のように楽浪郡治に土着化した中規模勢力の一族もいた。

楽浪郡の政治社会はいつまでもその名のようには中国本土から渡海する先のユートピアではなかった。郡県内の有力者の誕生は『三国志』巻 30・魏書・東夷伝・東沃沮に「光武六年(AD30)省辺郡、都尉由此罷。其後皆以其縣中渠帥為県侯。不耐、華麗、沃沮諸縣皆為侯国。夷狄更相攻伐、唯不耐濊侯至今猶置功曹、主簿諸曹、皆濊民作之。沃沮諸邑落渠帥、皆自稱三老、則故縣國之制也」とあって、大楽浪郡下の不耐・華麗・沃沮の「渠帥」を県侯に封じるほどに旧臨屯郡治下の沃沮族はその政治社会の民族性を維持成長させていたことが推量される。

こうした郡県内の有力勢力の成長は郡県統治と軋轢を生むに至る。『三国志』巻 30・魏書・東夷伝・韓には「桓、霊之末、韓濊彊盛、郡県不能制、民多流入韓国。建安中(196～220 年)、公孫康分屯有縣以南荒地為帯方郡、遣公孫模、張敞等収集遺民、興兵伐韓濊、舊民稍出、是後倭韓遂属帯方」とあって、「桓霊之末」即ち、後漢の桓帝(147～168 年)と霊帝(168～189 年)の代には、韓族や濊族が政治社会的に成長し、黄巾の乱に代表される後漢王朝の混乱にも起因して、楽浪郡とその属県の統制から離脱し、韓族の「国」、即ち３世紀にその詳細が魏王朝に知られる楽浪郡の南に接する三韓の地に流出する者が多く現れたのである。

そこで、後漢末の混乱から遼東を拠点として自立した公孫氏は建安中(196～220 年)に楽浪郡治下の屯有県以南の地に新たに帯方郡を設置し、朝鮮半島中・南部に向けた郡県支配を再編しその強化を図ったのである。公孫康は公孫模と張敞等を派遣して旧郡県の遺民を収集し、かつ、兵を興して韓と濊を討ったから、公孫氏の武威を畏れた韓族と倭族は帯方郡に「属」することとなった。帯方郡の治所は今日の黄海北道鳳山郡の智塔里土城に比定されるが、この郡に「属」するとは、政治的関係の従属姿勢を柱とした通好とこれに付随した経済・文化の交流が進行したことを意味しよう。

公孫氏の楽浪・帯方２郡の支配は長くは続かなかった。魏の明帝は公孫氏が３代に亘って遼東に基盤を置いた為に東夷諸族の通好が途絶した情況を好まず、東夷に及ぶ魏の国際関係秩序を確立せんとして、景初中(237～239 年)に、帯方郡太守劉昕と楽浪郡太守鮮于嗣に軍を率いて公孫淵を討たしめ、楽浪・帯方の２郡を魏の東方政策の拠点として公孫氏から奪回したのである（『三国志』巻 30・東夷伝序及び韓伝）。

その効果は直ちに現れ、韓の諸国の首長である「臣智」層は２郡に通じて魏王朝から「邑君」の称号

とその「印綬」を、また、次位の首長は「邑長」とその印綬を賜った。こうして「印綬」を身に付ける者は韓族社会には「千有余人」にも登ったと言う。魏の楽浪郡と帯方郡を基点とした東方政策は一段と韓族社会、さらには倭の社会に浸透してその政治社会に反応を起こすのである。

〔主要参考文献〕

・藤田亮策「楽浪封泥攷」「楽浪封泥續攷」（同『朝鮮考古學研究』高桐書院, 1948 年 8 月）

・窪添慶文「楽浪郡と帯方郡の推移」(『東アジア世界における日本古代史講座』第 3 巻, 1981 年 3 月, 学生社）

・全浩天　『楽浪文化と古代日本』（雄山閣出版, 1998 年 12 月）

・高久健二「楽浪郡と三韓」（西谷　正編『韓半島考古学論叢』すずさわ書店, 2002 年 5 月）

・田村晃一『楽浪と高句麗の考古学』（2001 年 4 月, 同成社）

第 4 節　郡県への対応－馬韓と倭 vs. 高句麗と新羅の対立軸の発生－

BC108 年に始まる朝鮮半島の中･北部と中国東北部にわたる中国王朝による所謂 4 郡の統治は一様に成功したわけではなく、また 4 郡の社会も均一であったわけではない。人戸の把握を通して人身支配の組織をそれぞれの社会に浸透させるにはそれを受容する社会基盤の在り様によって、順応と抵抗の姿勢が表出する。4 郡のなかの楽浪郡は 313 年に朝鮮半島から遼東へ撤収されるが、そこに至るまでに 4 郡を改廃させた政治社会の動向の根底には高句麗族や濊族、そして韓族の政治社会の構造の差異がある。

即ち､氏族の紐帯が持つ規制から人戸がどれほど自立して政治社会を形成しているのか､換言すれば､郡県制支配は人戸の個別支配を基本単位とするから､氏族の結合を維持する部制の強弱の差異によって､朝鮮半島中・北部に置かれた 4 郡の統治には成否が生ずることになろう。

その成否とは前述したように高句麗族や沃沮族、濊族の社会の上に統治網を敷いた臨屯郡が設置後に間もなくその抵抗の故に廃止され、玄菟郡は 2 度の西遷を余儀なくされた一方では、所謂古朝鮮の社会を基盤とした楽浪郡が 400 余年に亘って存続し、さらにはその南部に増設された帯方郡は 100 年近く存続した。この 2 郡には韓族と倭族の諸小国が通交していたように、前者の 2 郡とは好対照の対応を見ることができる。この対照的な郡県への対応の差が東アジア諸民族の相互関係を生んだ一因であり、その後の東アジア世界の相互関係を規制していると考えられる。このような東アジア諸民族の対照的な郡県への対応と諸民族間の相互関係の動向は次の史料から読み取ることができる。(○＝倭、馬韓・百済、□＝高句麗・夫餘、◇＝濊、☆＝辰韓・新羅。白印は友好的関係、黒印は敵対的関係をおよそ示す)

【第 1 期・AD 1 世紀】

①○『後漢書』韓伝「建武二十年(AD44)、韓人廉斯人蘇馬諟等、詣楽浪貢献。光武、封蘇馬諟為漢廉斯邑君、使属楽浪郡、四時朝謁」

②○同 巻 1・光武帝紀「建武二十年秋、東夷韓国人、率衆詣楽浪内附」

③○◇同 巻 85・東夷伝序「建武之初、（貊人）復来朝貢、時遼東太守祭彤、威讋北方、聲行海表、於是濊貊倭韓萬里朝貢」

④□同 巻 1・光武帝紀「建武二十三年(47)冬十月、高句驪率種人、詣楽浪内属」（同巻 85・東夷・高句驪「建武二十三年冬、句驪蠶支落大加戴升等萬餘口、詣楽浪内属」）

⑤○同 巻 85・東夷・倭伝「建武中元二年(57)、倭奴国奉貢朝賀、使人自称大夫、倭国之極南界也。光武賜以印綬」

⑥○同 巻 85・東夷・倭伝「安帝永初元年(107)、倭国王帥升等献生口百六十人、願請見」(『翰苑』所載の『後漢書』佚文では「倭面上国」、北宋版『通典』では「倭面土国」、『唐類函』所引の『通典』では「倭面土地」)

4郡設置後の1世紀の間、韓、倭、濊貊および高句麗は楽浪郡に通じて貢献し、邑君の称号や印綬を得て朝謁し、また内附していた。しかし、楽浪郡或いは郡を介した後漢王朝への通交関係も続く2世紀には他の面が現れる。即ち、郡県支配に対する抵抗である。高句麗と夫餘は玄菟郡と遼東郡に通交と攻撃と言う両様の対応を取っていた。高句麗は遼東郡を攻め、また、濊貊とともに玄菟郡や楽浪郡下の華麗縣を攻撃したこともある(AD118)。

2世紀後半、後漢の中央政権の混乱は郡県に属した周辺諸民族への統制に動揺を引き起こしたが、それは諸民族内部の支配層自体の強化を進ませることになる。『三国史記』高句麗本紀に依れば、高句麗王家の長子の抜奇と小子の伊夷模が対立し、209年には伊夷模が新国を建設し、抜奇が遼東へ逃亡すると言う内紛に発展している。また、『三国志』巻30・魏書・韓伝には前述したように、「桓霊之末(146～189年)」に韓と濊が彊盛となって、郡県がこれを統制出来ない事態のなかで、郡県の民は「韓国」に流入したと言う。この郡県の民がその農工の知識と技術を持って「韓国」へ集団的に移住した事態は、「韓国」内の政治社会に小国家的集団の結合を促すような影響を及ぼしたと見なければならないであろう。

このような郡県支配に対応する韓族と高句麗族の動向は、王権の成長とそれへの各氏族の集中による国家形成の一段階であると見るべきであり、この動向は海を越えた倭国にも見ることができる。下記の史料⑫に見るように、倭国の内乱と女王卑弥呼の推戴に至る動向は、後漢末の王朝中央の混乱と朝鮮半島の南北における王権の成長過程と密接に関係する広範な連鎖と見なければならない。倭国の王権の成長が朝鮮半島の動向と決して隔絶しては成されないことは卑弥呼の時代にも明らかである。それはここまで連綿として継続されてきた朝鮮半島と日本列島の彼我を隔絶しない一体的な交流があったからである。

【第2期・AD2世紀】

①■『後漢書』巻85・東夷・高句驪「和帝元興元年(105)春、復入遼東、寇略六縣、太守耿夔、撃破之、斬其渠帥」

②□同 巻5・安帝紀「永初三年(109)春、高句驪遣使貢獻」

③■『後漢書』巻 85・東夷・夫餘「安帝永初五年(111)、夫餘王始将七八千人、寇鈔楽浪、殺傷吏民、後復歸附」

④□『後漢書』巻85・東夷・高句驪「永初五年(111)、宮（太祖王）遣使貢獻、求属玄菟」

⑤■◆『後漢書』巻85・東夷・高句驪「元初五年(118)、復與濊貊寇玄菟、攻華麗城」

⑥■◆●同 安帝紀「建光元年(121年)春正月、幽州刺史馮煥、率二郡太守討高句驪、穢貊、不克。○夏四月、穢貊復與鮮卑寇遼東、遼東太守蔡諷、追撃戦没。○冬十二月、高句驪・馬韓・穢貊、囲玄菟城。夫餘王遣子、與州郡并力討破之」

⑦■◆●同 安帝紀「延光元年(122)春二月、夫餘王遣子、将兵救玄菟、撃高句驪・馬韓・穢貊破之、遂

遣使貢献。秋七月、高句驪降」

⑧■『三国志』巻 30・魏書・高句麗「宮死、子伯固立。順桓之間(126～167)、復犯遼東、寇新安居郷、又攻西安平、於道上殺帯方令、略得楽浪太守妻子」(『後漢書』巻85・東夷・高句驪「遂成死、子伯固立。其後濊貊率服、東垂少事。順帝陽嘉元年(132)、置玄菟郡屯田六部。質桓之間(146～167)復犯遼東西安平、殺帯方令、掠得楽浪太守妻子」)

⑨■同 巻 30・魏書・高句麗「霊帝建寧二年(169)、玄菟太守耿臨討之、斬首虜數百級、伯固降、属遼東。熹平中(172～178)伯固乞属玄菟」

⑩●◆同 巻30・魏書・韓「桓霊之末(146～189年)韓濊彊盛、郡縣不能制、民多流入韓国、建安中(196～220年)公孫康分屯有縣以南荒地、為帯方郡、遣公孫模・張敞等、収集遺民、興兵伐韓濊、舊民稍出、是後倭韓遂属帯方」

⑪□同 巻 30・魏書・高句麗「公孫度之雄海東也、伯固遣大加優居、主簿然人等、助度撃富山賊、破之」

⑫同 巻30・魏書・倭人「其国本亦以男子為王、住七八十年、倭国乱、相攻伐歴年、乃共立一女子為王、名曰卑彌呼、事鬼道、能惑衆、年已長大、無夫壻、有男弟佐治国」(『後漢書』巻85・東夷・倭伝「桓霊間(146～189年)、倭国大乱、更相攻伐、歴年無主、有一女子、名曰卑彌呼」)

⑬○〔「中平□年(184～189)」銘環頭大刀・「中平□年五月丙午造作文刀百練清剛上應星宿□□□□」・奈良県天理市東大寺山古墳出土〕

ところが、３世紀には東アジアには新しい国際環境が生まれている。後漢中央の動揺から周縁の郡県にも変動が生まれるが、遼東方面では玄菟郡の小吏から立身した公孫度が遼東郡を拠点に置いて自立した政権を打ち立てたことである。

公孫度は遼東郡を遼西郡と中遼郡に二分し、山東半島をも確保し、自ら「遼東公平州牧」と称し、南に進んでは楽浪郡を収めて、「遼東」に「王」たる地方政権の様相を呈した。その子の公孫康は楽浪郡の南部に帯方郡を開設し、「政権」の威を示したから、韓と倭の諸小国は盛んに帯方郡に通交してきた。

この帯方郡の開設は公孫康によってなされたのであるが、やがて魏王朝が景初年間(237～239)に公孫氏政権を滅ぼしここを接収するに及んで、この中国中央政権の政治力と文化力の前に韓、高句麗、穢貊、倭が素早く対応している。魏は246年に幽州刺史の毌丘儉の軍を派遣して高句麗に大打撃を与え、高句麗の勢力を削ぎ、韓と倭の通交を盛んに受けている。このことは下記の史料から観察される。

【第３期・AD３世紀前半】

①『三国志』巻30・東夷伝序「公孫淵仍父祖三世、有遼東、天子為其絶域、委以海外之事、遂隔断東夷、不得通於諸夏、景初中(237～239)、大興師旅誅淵、又潜軍浮海収楽浪帯方之郡、而後海表謐然、東夷屈服」

②『三国志』巻 30・東夷・韓伝「景初中(237～239)、明帝密遣帯方太守劉昕、楽浪太守鮮于嗣越海定二郡、諸韓國臣智加賜邑君印綬、其次與邑長。其俗好衣幘、下戸詣郡朝謁、皆假衣幘、自服印綬衣幘千有余人。部従事呉林、以楽浪本統韓国、分割辰韓八国以與楽浪、吏譯轉有異同、臣智激韓忿、攻帯方郡崎離営。時太守弓遵、楽浪太守劉茂興兵伐之、遵戦死、二郡遂滅韓」

③○同 倭人伝「景初三年(239年)六月、倭女王遣大夫難升米等詣郡、求詣天使朝献、太守劉夏遣吏将送詣京都。其年十二月、詔書報倭女王曰･･･中略･･･今以汝為親魏倭王、假金印紫綬・・・後

略･･･」

④○同 倭人伝「正始元年(240 年)、太守弓遵遣建忠校尉梯儁等奉詔書印綬詣倭國、拝假倭王、并齎詔賜金、帛、錦罽、刀、鏡、采物、倭王因使上表答謝詔恩」

⑤○同 倭人伝「其四年(243 年)、倭王復遣使大夫伊聲耆、掖邪狗等八人、上献生口、倭錦、緯青縑、緜衣、帛布、丹木狛、短弓矢。掖邪狗等壹拝率善中郎将印綬」

⑥○同 倭人伝「其六年(245 年)、詔賜倭難升米黄幢、付郡假授」

⑦■◆同 濊伝「正始六年(245)楽浪太守劉茂、帯方太守弓遵以遼東濊属句麗、興師伐之、不耐侯等擧邑降」

⑧■◆○『三国志』巻 4・魏書・三少帝紀 4（齊王芳）「（正始）七年(246 年)春二月、幽州刺史毌丘儉討高句驪、夏五月、討濊貊、皆破之。韓那奚等数十国、各率種落降」

⑨◇同 濊伝「其（正始）八年(247 年)、詣闕朝貢、詔更拝不耐濊王。居処雑在民間、四時詣郡朝謁。二郡有軍征賦調、供給役使、遇之如民」

⑩○同 倭人伝「其（正始）八年、太守王頎到官。倭女王卑彌呼與狗奴國男王卑彌弓呼素不和、遣倭載斯、烏越等詣郡説相攻撃状。遣塞曹椽史張政等因齎詔書、黄幢、拝假難升米為檄告喩之。卑彌呼以死、大作冢、徑百餘歩、狗葬者奴婢百餘人。更立男王、国中不服、更相誅殺、當時殺千餘人。復立卑彌呼宗女壹與、年十三為王、國中遂定。政等以檄告喩壹與、壹與遣倭大夫率善中郎将掖邪狗等二十人送政等還、因詣臺、獻上男女生口三十人、貢白珠五千、孔青大句珠二枚、異文雑錦二十匹」

⑪○◇『三国志』巻 4・魏書・三少帝紀 4（陳留王奐）「（景元）二年(261 年)秋七月、楽浪外夷韓、貊各率其属来朝貢」

楽浪・帯方 2 郡が魏の支配に収まるや東夷の諸族は魏に「屈服」した姿勢を取った。246 年に魏が幽州刺史の毌丘儉を派遣して高句麗を攻撃したが、『三国史記』高句麗本紀によれば、この時、高句麗の都の丸都城は陥落し、王は南沃沮の地に逃避した。この高句麗の大敗北の一方では、韓と倭は盛んに楽浪・帯方郡へ通交し、さらには魏都の洛陽にも通交している。239 年には倭の大夫難升米らが帯方郡に至り、さらには洛陽にまで送られ、翌年には魏の使者を倭国は迎えて金印紫綬等を得ており、243 年には大夫伊聲耆、掖邪狗等八人が魏に使いして、247 年には倭国王卑弥呼は倭の狗奴国王と攻撃し合う様を帯方郡に訴えて、魏からは参謀にも当たる塞曹椽史の張政を迎えたほどである。

こうした僻遠の倭国王が魏の帯方郡へ通交し、かつ洛陽にも至って「金印紫綬」等を賜った背景には中国本土では魏が南の呉と対立しており、呉を牽制し得る地理に倭国があるとの認識から、倭国を高く評価したこともあろう。また、倭国が帯方郡へ盛んに通交できた背景には、楽浪・帯方の 2 郡が魏に接収されるや魏から「邑君」「邑長」の印綬を賜った韓族社会の氏族長たる「臣智」層が既に魏に臣従しており、その立場から倭国使を帯方郡や洛陽に嚮導する働きがあったものと考えられる。倭国使は晋王朝が魏に取って替わった翌年の 266 年に「重訳」して入貢できたことはその一例である。

この韓と倭が盛んに帯方郡や楽浪郡に通交する関係は 265 年には司馬炎が魏に替わって晋を開いた後にも継続する。

【第４期・AD３世紀後半】

①○『晋書』巻３・武帝「泰始二年(266)11月己卯、倭人来献方物」

〔『晋書』巻97・東夷・倭人伝「泰始初、遣使重譯入貢」〕

〔「晋起居注云、武帝泰初二年十月、倭女王遣重譯貢獻」(『日本書紀』巻9・神功皇后摂政66年)〕

②『晋書』巻3・武帝「咸寧二年(276)二月、東夷八国帰化。七月、東夷十七国内附」

・同　「咸寧三年(277)、是歳、西北雑虜及鮮卑、匈奴、五溪蛮、東夷三国、前後千余輩、各帥種人部落内附」

③○『晋書』巻97・東夷・馬韓伝「咸寧三年(277)、(馬韓)復来」

・『晋書』巻3・武帝「咸寧四年(278)三月、東夷六国来献。是歳、東夷九国内附」

④○『晋書』巻97・東夷・馬韓伝「咸寧四年(278)、(馬韓)請内附」

・『晋書』巻3・武帝「太康元年(280)六月甲申、東夷十国帰化。七月、東夷二十国朝献」

〔280年、晋が呉を滅ぼす〕

⑤○『晋書』巻97・東夷・馬韓伝「武帝大康元年(280)・二年(281)、其主頻遣使入貢方物。七年(286)、八年、十年(289)、又頻至」

⑥☆同 東夷・辰韓伝「武帝太康元年(280)、其王遣使献方物」

・『晋書』巻3・武帝「太康二年(281)三月東夷五国朝献。夏六月、東夷五国内附」

⑦○『晋書』巻97・東夷・馬韓伝「太康二年(281)、其主遣使入貢方物」

⑧☆同 東夷・辰韓伝「太康二年(281)、(辰韓)復来朝貢」

・『晋書』巻3・武帝「太康三年(282)九月東夷二十九国帰化、献其方物」

⑨○〔『晋書』巻36・張華伝「乃出張華為持節都督幽州諸軍事領護烏桓校尉安北将軍、撫納新旧、戎夏懐之。東夷馬韓新彌諸国、依山帯海、去州四千余里、歴世未附者二十余国、竝遣使朝献、於是遠夷賓服、四境無虞頻歳豊稔、士馬彊盛。朝議欲徴華入相、又欲進号儀同」〕

⑩○『晋書』巻3・武帝「太康七年(286)八月東夷十一国内附。是歳、馬韓等十一國遣使来献」

⑪○『晋書』巻97・東夷・馬韓伝「太康七年(286)、(馬韓)至」

⑫☆同 東夷・辰韓伝「太康七年(286)、(辰韓)又来」

・『晋書』巻3・武帝「太康八年(287)八月東夷二国内附」

⑬○『晋書』巻97・東夷・馬韓伝「太康八年(287)、(馬韓)至」

・『晋書』巻3・武帝「太康九年(288)九月東夷七国、詣校尉内附」

・同　「太康十年(289)五月鮮卑慕容廆来降、東夷十一国内附。是歳、東夷絶遠三十余国、西南夷二十余国来献」

⑭○『晋書』巻97・東夷・馬韓伝「太康十年(289)、(馬韓)至」

・『晋書』巻3・武帝「太熙元八年(290)二月辛丑、東夷七国朝貢」

⑮○『晋書』巻97・東夷・馬韓伝「太熙元年(290)、(馬韓)詣東夷校尉何龕上献」

・『晋書』巻4・恵帝「(元康元年)是歳(291)東夷十七国、南夷二十四部、竝詣校尉内附」

３世紀後半の韓と倭の２郡や洛陽に通交する動向を伝える『晋書』は、646年に房玄齢等が唐の太宗の勅を奉じて編纂した正史である。当該の時代から300年程後の編纂ではあるが、今は逸書の各種の『晋書』を素に編修されたから、その東夷伝は簡略に過ぎるとは言え、通交の傾向は伝えていよう。「東夷」

が西晋へ通交したことは「東夷六国来献」などと統計的に記録されている。そのなかには「東夷馬韓新彌諸国」のように『三国志』韓伝に名の見えない馬韓の「新彌国」が見える。馬韓と辰韓の中から小国が盛んに通交する背景には、幽州都督の張華が東夷に向けた慰撫策が奏功しているが、これに反応して韓族内部の小国では政治社会の変化が胎動していたことが窺える。

ここに倭国の通交記事は266年の「重譯」による貢献の例のほかには見えないが、倭国が西晋へ通交したことはこの1度だけとは断言できないであろう。馬韓諸国の嚮導によって入貢が可能であったことは「重譯」の語が暗示しており、「東夷」の十数国の通交のなかには倭国も含まれていたのではなかろうか。前代の倭が馬韓の「臣智」層の嚮導を得て帯方郡へ通交していたと考えられたから、その関係が途絶したことは考えられない。

【主要参考文献】

・西嶋定生 『中国古代国家と東アジア世界』(1983年8月, 東大出版会 / 第3章・親魏倭王冊封に至る東アジアの情勢ー公孫氏政権の興亡を中心としてー)

・西嶋定生『日本歴史の国際環境』(東大出版会, 1985年1月 / 序章・倭国の形成とその国際的契機 / 第一章・一～三世紀の東アジアと倭国 / 第二章・四～六世紀の東アジアと倭国)

・武田幸男 「魏志東夷伝における馬韓」(『馬韓・百済文化』第12号, 1990年12月, 韓国・円光大学校)

・李賢恵 「三韓의 對外交易體系」(李基白先生古稀紀念『韓国史學論叢』上, 一潮閣, 1994年10月。邦訳〔金井塚良一訳「三韓の対外交易体系」(『東洋研究』第119号)〕)

・武田幸男「三韓社会における辰王と臣智」(上・下) (『朝鮮文化研究』第2, 3号, 1995年3月, 1996年3月)

・李成市 『古代東アジアの民族と国家』(「第一編 楽浪郡設置と高句麗の国家形成」1998年3月, 岩波書店)

・木村 誠 「倭人の登場と東アジア」(平野邦雄編『古代を考える邪馬台国』(1998年7月, 吉川弘文館)

・金子修一 「二・三世紀の東アジア世界」(同上)

・西嶋定生『倭国の出現ー東アジア世界のなかの日本ー』(1999年5月, 東大出版会)

・大庭 脩 『親魏倭王』(学生社, 2001年9月, 増補初版)

第5節 郡県統治の消滅と百済・倭、高句麗・新羅の動向

3世紀末までの朝鮮半島の韓の諸国と倭国との関係では、中国王朝が朝鮮半島の中・西北部に置いた楽浪・帯方の2郡との交渉とここを介した洛陽への遣使が進行したことによって、2者の間には中原王朝との臣属の関係によって結ばれた遣使・通交サークルの如き様相が生まれており、そこには戦争や対立という厳しい事態は現れていない。郡県に敵対する高句麗との間には地理的に楽浪・帯方の2郡と沃沮や濊族が介在していたのである。

この遣使・通交サークルのなかでは倭国は外縁に位置する故に中国王朝からは優遇された一面が窺える。即ち、前漢から魏を経て西晋王朝まで、中国王朝が採用する遠交近攻策は東アジアにも及ぶが、この対外策のほかにも、また、中国皇帝の徳治主義が異民族に拡延することから、この二つが相俟って、中国王朝と倭国との場合ではその中間に位置して2郡を介して早くに皇帝の徳治に浴した韓の諸国は外縁にある倭国の中国王朝への通交を促進させることが求められ、かつそれを実行することが自己への徳

治を優位に進めることになるのである。

一方、倭国は卑弥呼が２郡と魏の都によく遣使して、優待されたのも韓の諸国のこうした位置から倭国の通交に「重譯」を始めとする便宜を与えられたからであり、また、魏が呉に対抗して倭を高く評価したことにもよる。

倭国が２郡とこれを介して中国の諸王朝に通交した背景には、倭国内部の要因がこれまで考察されてきているが、それを可能にし、かつ促進したものは中国王朝の対外関係の構造維持の原理と倭との中間にある韓の諸国の仲介姿勢を考えなければならない。なかでも通交の要衝たる弁韓の狗邪国や瀆盧国、そして楽浪、帯方２郡に接して朝鮮半島西部に位置する馬韓の諸国の協調の姿勢であり、そのなかで文化が価値をもって交流したのである。このことが倭国と加羅、そして百済との長くも堅い関係の根源のひとつと考えられる。

ところが、この中国王朝と韓の諸国と倭国を結ぶ原理を脅かす存在が東北部の高句麗であり、これに時には附属した濊と沃沮であったが、その高句麗の行動を容易にした国際環境は西北の匈奴や鮮卑族が中国王朝へ攻勢し続けたことである。

かくて、高句麗の美川王が派遣した軍は313年に２郡を攻め、郡治を中国内部に撤退させ、朝鮮半島中・西北部におよそ400年の間も続いた中国王朝の郡県支配を消滅させた。この年代は『梁書』や『資治通鑑』には「建興元年(313)」に乙弗利（美川王）が率いた軍が２郡を治める遼東の張統と慕容廆を攻撃したことを記録するが、これを承けた『三国史記』では313年に楽浪郡を攻撃し、翌314年には帯方郡を攻撃したと編年する。

２郡治が遼東に移転したこと、即ち、中国王朝の郡県支配の機構が朝鮮半島から撤収されたことは、半島の東北部に位置する高句麗と南部の韓の諸国がやがて接触する環境を生んだ。このことは倭国にも甚大な政治変化を生み出すことになる。百済そしてやや遅れて新羅、さらに加羅と倭国の王権集中の過程を進めることになる。

一方､高句麗は旧２郡県の土地と民をその支配構造のなかには直ぐさまには編入出来たわけではない。旧郡県には中国人コロニーの性格を濃く持った定着型氏族が根強く残っており、高句麗がこれを統合するには427年に長寿王が平壌に遷都するまでの１世紀近くの過程を必要とするのである。

かくて、朝鮮半島の中西・西北部の２郡の消滅は高句麗と韓の諸国との間に緩衝地帯が残ることになったが、３世紀に活発であった韓の諸国とこれに嚮導された倭の遣使サークルはサークルの要が消滅したことによって、韓の諸国と倭国の政治社会に変動を激しく生むことになる。

【史料Ｉ】

①『梁書』巻 54・列伝 48・高句驪「晋永嘉乱(307～312)、鮮卑慕容廆、拠昌黎大棘城、元帝授平州刺史、句驪王乙弗利、頻寇遼東、廆不能制」

②『資治通鑑』巻 88・晋紀10・孝愍帝上・建興元年(313)・夏４月条「遼東張統據楽浪帯方二郡、與高句麗王乙弗利（美川王）相攻、連年不解、楽浪王遵説統帥其民千餘家歸廆、廆為之置楽浪郡、以統為太守、遵參軍事」

『三国史記』巻17

③美川王３年(302) 秋九月、王率兵三万侵玄菟郡、虜獲八千人、移之平壌。

④ 同 12年(311)　秋八月、遣将襲取遼東西安平。
⑤ 同 14年(313)　冬十月、侵楽浪郡、虜獲男女二千余口。
⑥ 同 15年(314)　秋九月、南侵帯方郡。
⑦ 同 16年(315)　春二月、攻破玄菟城、殺獲甚衆。

さて、高句麗の軍事面での成長の要因がどこにあるのか、ただ戦闘記事の背後にある高句麗社会の変化に関心が寄せられる問題ではあるが、これに伴う朝鮮半島の動向は下記の史料群から読みとれる。

２郡の遼東への撤収後の東アジアの動勢は一層変動する。西晋が 316 年に滅亡し、318 年には建業（南京）に東晋が再興されたが、華北に五胡の王朝が興亡する中国の動勢に対応して、東北の高句麗は慕容氏政権との対立を軸として五胡十六国との間に対立と通交を交互に行う複雑な関係が継続するが、南の三韓と倭にも高句麗のこの動向に連なる新たな変動が生じてくる。

【史料Ⅱ】
①『晋書』巻6・元帝「太興二年(319)十二月。鮮卑慕容廆襲遼東。東夷校尉平州刺史崔瑟奔高句驪」
②『資治通鑑』巻91・晋紀 13・中宗「太興二年(319)十二月･･･中略･･･高句麗数寇遼東。廆遣慕容翰・慕容仁伐之。高句麗王乙弗利逆来求盟。翰・仁乃還」
③『晋書』巻百八・慕容廆載紀「明年(320)。高句麗寇遼東。廆遣衆撃敗之」
④『晋書』巻百五・石勒載紀「時(330)。高句麗・粛慎致其楛矢。宇文・屋孤、竝獻名馬于勒」
⑤『三国史記』巻18、故国原王４年(334)「秋八月、増築平壌城」
⑥ 同　　故国原王５年(335)「春正月、築国北新城」

高句麗は慕容氏政権に対して築城に代表される防衛体制を強化した。その一方では、慕容皝に破れた慕容仁の幕下の佟壽や後趙の宋晃等の亡命を容れて(336, 338年)、慕容氏との緊張関係と将来に備えた策を採っている。341 年には高句麗は南北から５萬５千の燕軍の進撃を迎えると、故国原王は作戦を誤り、丸都城を燕軍に落とされ、故国原王は都から遁走し、父の美川王の墓を燕軍に暴かれ、父の屍をも奪われる屈辱を受けたほかにも、王母や王妃のみならず宝物と５万余の男女を略奪される甚大な被害を被った。

故国原王は翌年に燕王皝のもとに遣使し方物を貢いでその臣となることで父の美川王の屍は取り戻したが、母はなお質として前燕に留められた。

高句麗は手酷く敗北したにも拘わらず、前燕に対する臣属の姿勢は固まっておらず、王は一旦は南に移り住み、343年には東晋に通貢する姿勢を取った。高句麗は 345年には前燕の攻撃を受け、翌年には前燕が１万７千の騎兵を送って夫餘を伐ち、その王を虜とした攻勢の前に、349 年には高句麗に亡命していた宋晃を前燕に送り返し恭順の姿勢を示した。さらに、故国原王は 355 年 12 月に前燕に質を入れて恭順の姿勢を固くするや、14 年ぶりに母を迎えることができたのである。

故国原王の内外の施策はやがて来たる広開土王代の対外策を生む陣痛でもある。王は高句麗の西に連なる五胡の興亡とその抗争に苦悩した経験に学び、この後、平壌を中心とした朝鮮半島の中南部への関心を強めている。この対外政策における比重の移動は高句麗王権の対外的な安定の保証の基盤を朝鮮半島の中南部に求めたことを意味しよう。それは、また、王国の経済基盤のなかに旧来の狩猟経済とは別

に、旧楽浪・帯方郡の治下の社会に向けた高句麗の支配が浸透して行く過程に並行して、農業経済が進行していたことに対応する策であったと考えられる。

即ち、高句麗はその西北方面においては鮮卑族に苦慮していたが、西南部では楽浪、帯方２郡の支配機構を崩壊させた313年からおよそ50年の間に、高句麗がその故地に居住する遺民社会を懐柔しつつ、ここを支配領域のなかにとり込みつつあったのである。

故国原王は334年に平壌城を増築したが、336年に東晋に通貢できたのもそれ故に可能であったのであり、また343年には旧帯方郡治下の黄城に故国原王が前燕の攻勢から避難できたことにも２郡の故地の勢力を懐柔する策とその建設の成果があったからである。

かくて、朝鮮半島では高句麗の故国原王の南方充実策が子の小獣林王と故国壌王にも継承された。高句麗は太白山脈に沿って膨張の拠点たる山城を構築して南下したが、朝鮮半島の東北部に位置して歴史的にも高句麗に属した濊を介して新羅がその策に組み込まれることになった。その一方では高句麗は百済との対立を激化させた。この中で百済は長い歴史のある遣使・通交サークルの展開のなかで連携の蓄積を持った倭国を組み込むことになるのである。

【史料Ⅲ】

①『晋書』巻7・成帝「咸康二年(336)二月庚申。高句驪遣使貢方物」

②『晋書』巻百九・慕容皝載紀「(咸康三年) 其年(339)。皝伐高句麗。王釗乞盟而還。○明年(340)。釗遣其世子朝於皝」

③『晋書』巻109・載記巻9・慕容皝「咸康七年(341)皝遷都龍城、率勁卒四萬入自南陜、以伐宇文、高句麗、又使翰及子垂為前鋒、遣長史王寓等、勒衆萬五千従北置而進。高句麗王釗（故國原王）謂皝軍之従北路也。乃遣其弟武、統精鋭五萬踞北置、躬率弱卒以防南陜、翰與釗戦于木底、大敗之。乗勝遂入丸都。釗單馬而遁、皝掘釗父利（美川王）墓、載其尸并其母妻珍寶、掠男女五萬餘口、焚其宮室、毀丸都而歸。明年（咸康８年(342)釗遣使稱臣於皝、貢其方物、乃歸其父尸」

④『三国史記』巻18、故国原王12年(342)「春二月、修葺丸都城、又築国内城。秋八月、移居丸都城」

⑤『三国史記』巻18、故国原王13年(343)「秋七月、移居平壌東黄城。城在今西京東木覓山中」

⑥『晋書』巻7・康帝「建元元年(343)十二月。高句驪遣使朝獻」

⑦『資治通鑑』巻98・晋紀20・孝宗「永和五年(349)十二月。高句麗王釗送前東夷護軍宋晃于燕。燕王儁赦之」

⑧『資治通鑑』巻一百・晋紀 22・孝宗「永和十一年(355)十二月。高句麗王釗遣使詣燕。納質修貢以請其母。燕主儁許之。遣殿中将軍刁龕。送釗母周氏歸其国。以釗為征東大将軍営州刺史封楽浪公。王如故」

⑨『三国史記』巻18、故国原王39年(369)「秋九月。王以兵二萬南伐百済。戦於雉壌。敗積」

⑩『晋書』巻113・載記・苻堅「太和五年(370)、又遣猛率楊安、張蚝、鄧羌十将率歩騎六萬伐（慕容）皝。堅親送猛於霸東･･･中略･･･皝遣其太傅慕容評率衆四十餘萬以救二城（晋陽、壺關）、評憚猛不敢進、屯於潞川。･･･中略･･･堅遂攻鄴、陥之。慕容皝出奔高陽、堅将郭慶執而送之。堅入鄴宮、閲其名籍、凡郡百五十七、縣一千五百七十九、戸二百四十五萬八千九百六十九、口九百九十八萬七千九百三十五。諸州郡牧守及六夷渠帥盡降於堅。郭慶窮追餘燼、慕容評

奔於高句麗、慶追至遼海、句麗縛評送之」

⑪『三国史記』巻18、故国原王 41 年(371)「冬十月。百済王率兵三萬来攻平壌城。王出師拒之。為流矢所中。是月二十三日薨。葬于故国之原」

⑫ 同　小獣林王 2 年(372)「夏六月。秦王苻堅遣使及浮屠順道。送佛像經文。王遣使廻謝。以貢方物。立太學。教育子弟」

⑬ 同 3 年(373)　「始頒律令」

⑭ 同 4 年(374)　「僧阿道来」

⑮ 同 5 年(375)　「春二月。始創肖門寺。以置順道。又創伊弗蘭寺。以置阿道。此海東佛法之始。秋七月。攻百済水谷城」

⑯ 同 6 年(376)　「冬十一月。侵百済北鄙」

⑰ 同 7 年(377)　「冬十月。無雪。雷。民疫。百済将兵三萬来侵平壌城。十一月。南伐百済」

⑱『資治通鑑』巻一百四・晋紀26・烈宗「太元二年(377)春。高句麗新羅西南夷皆遣使入貢于秦

⑲『三国史記』巻18、小獣林王8 年(378)「旱。民饑相食。秋九月。契丹犯北邊。陷八部落」

⑳ 同 14年(384)「冬十一月。王薨。葬於小獣林。號為小獣林王」

【主要参考文献】

・末松保和「新羅建国考」(同『新羅史の諸問題』〈昭和 29 年 11 月，東洋文庫〉。原載は「新羅の軍号〈幢〉について」〈『史学雑誌』第 43 編第 12 号昭和 7 年 12 月〉。後に、末松保和朝鮮史著作集 1『新羅の政治と社会』〈平成7 年 10 月，吉川弘文館〉)

おわりに

本章では前漢王朝が BC108 年と BC107 年に白頭山一帯の山地で中国大陸と朝鮮半島を分離する地域を中心に 4 郡を設定して以来、その改廃から 313 年に郡県統治が半島から完全に撤収されるまで、この間の半島と列島の諸族が相互にも通交しつつ郡へ通交する様を文献を通して通覧してきた。

その狙いは古代の日韓関係が地域間交流の背景とこれを促進する要因であった国家間交流が突如として 4 世紀末の所謂「倭国の軍事的な朝鮮半島への進出」や「出兵」と言われるような対立的な関係として出現したわけではなく、4 世紀末の日韓関係を考えるにはここに至る関係の歴史を理解しておくことが欠かせないからである。

そこで本章において通覧した日韓関係を進展させた基本要因を指摘すれば以下である。

①BC108 年以来、およそ 400 年にわたって朝鮮半島の西北部に前漢と後漢、さらには公孫氏政権と魏、晋の郡として存在した楽浪郡と 3 世紀初めよりおよそ 100 年間存在した帯方郡は郡下の県を通じて王朝中央の統治がこの地域に及んだばかりでなく、特に南方の韓の諸国と倭国がこれに連鎖として通交してきた。そこに王朝の徳治主義の異民族対策と遠交近攻の対策が相俟ってより遠方の倭国の通交が促進された。楽浪・帯方の 2 郡が半島の西北部に位置したことは日韓関係が半島の南部の諸族を介して進行し、やがて百済との友好的な関係を進展させた一方では、新羅とは対立的な方向に進んだ決定的な地理的要因である。

この 2 郡とは反対に、半島の東北部に置かれた臨屯郡が早くに廃止され、玄菟郡が半島の東北部から遼東に撤退したことの背景には高句麗族の国家形成への成長があったが、この地域から郡県が消滅した

ことによって半島の東北部地域には高句麗の勢力が及ぶ地域となった。やがて半島の東南部にある新羅が高句麗の勢力圏に収められる地理的な条件であった。

②楽浪・帯方の２郡への半島と列島の諸国が通交するには相互の協調が見られる。３世紀にあって盛んに晋に通交した馬韓を始めとする東夷諸国の間には通交をめぐる紛争のことは記録に見ない。馬韓の小国の首長が魏王朝から「臣智」や「邑君」の爵位を受けた政治関係から郡への通交を進め、かつ通行者を嚮導する義務を負ったから、遠地の倭国はその嚮導を得ることになったのである。「臣智」や「邑君」が通交者の嚮導を忌避すれば郡の圧力を受けることになるからである。後に、新羅が高句麗とともに前秦に通交したのも同様である。２郡と馬韓さらには弁韓の通行を基礎として、倭国は郡を介して中央の王朝の優遇を得たのである。倭国ではこの優位な地理関係と通交のシステム原理から郡を介した王朝の下賜品が蓄積されて行く。中国文化の時系列的な貯蔵地としての様相を持った遺跡が西日本に現れる由縁である。

【付録】

日本における「七支刀」研究文献目録

菅政友　「石上神宮ノ宝庫所蔵六叉刀銘」(『菅政友全集』雑稿三所収)明治40年(1907)、国書刊行会(成稿は明治18年ごろ)

同　「大和国石上神宮宝庫所蔵七支刀」(『同上書』雑稿一所収)

星野恒　「七枝刀考」(『史学雑誌』第37号、明治25年〈1892〉12月。のち『史学叢説』第一集〈明治42年、冨山房〉に収録)

菅政友　「任那考」(『菅政友全集』所収、明治26年稿)

黒川真頼　「本邦金属器志、第五回・紙幣横刀」(『国華』109、明治31年10月。のち『黒川真頼全集』第3巻「金属器財志」〈明治43年5月、国書刊行会〉に収録)

黒川真道　「日本古代象嵌考」(『考古界』2-2、明治35年7月)

古谷清　「江田村の古墳」(『考古学雑誌』第2巻5号、明治45年1月)

高橋健自　「京畿旅行談」(『考古学雑誌』第5巻3号、大正3年11月)

喜田貞吉　「石上神宮の神宝七枝刀」(『民族と歴史』第1巻1号、大正8年1月)

木崎愛吉　「大和石上神宮七支刀記」(『大日本金石史』1、大正10年10月)

高橋健自　「日本上代の象嵌」(『工芸』1-1、大正13年6月)

大場磐雄　「石上神宮宝物誌」(昭和4年12月、石上神宮。昭和55年6月、吉川弘文館より復刻)

末永雅雄　「象嵌銘文を有する鉾－七枝刀」(『日本上代の武器』、昭和16年2月、弘文堂書房。昭和56年12月、吉川弘文館。及び昭和63年木耳社より再刊)

榧本杜人　「七支刀」(『アジア歴史事典』4、1960年、平凡社)

同　「石上神宮七支刀の銘文」(『日本考古学協会第六回総会研究発表要旨』、昭和25年10月)

福山敏男　「石上神宮の七支刀」(『美術研究』第158号、昭和26年1月)

同　「『石上神宮の七支刀』補考」(『美術研究』第162号、昭和26年9月)

同　「『石上神宮の七支刀』再補」(『美術研究』第165号、昭和27年4月)

(以上の3編は、一部修訂されて「石上神宮の七支刀銘文」と題して『日本建築史研究』〈(昭和43年6月、墨水書房〉、また上田正昭編『論集・日本文化の起源』第2巻「日本史」〈昭和46年5月、平凡社〉に収録)

榧本杜人　「石上神宮の七支刀とその銘文」(『朝鮮学報』第3輯、昭和27年5月)

同　「七支刀の年代について」(『日本考古学協会第11回総会研究発表要旨』、昭和28年4月)

西田長男　「上代史の基準－石上神宮の七支刀の銘文」(『大倉山論集』2、昭和28年。のち同『日本古典の史的研究』〈昭和31年、理想社〉に収録)

榧本杜人　「石上神宮の七支刀」(『ミュージアム』35、昭和29年2月)

榧本杜人　「古代における金石文、七支刀」(『日本考古学講座』5、昭和30年5月、河出書房)

藪田嘉一郎　「七支刀銘考釈・釈文篇」「七支刀銘考釈・考証篇」(『日本上古史研究』5巻6・7号、昭和36年6月、7月)

三品彰英　「石上神宮の七支刀銘文」(『日本書紀朝鮮関係記事考證』上巻、昭和37年11月、吉川弘文

館。後に平成14年12月に天山舎より復刻)
保坂三朗・西村強三「七支刀 解説」(『国宝』1、昭和38年、毎日新聞社)
金錫亨　「三韓三国の日本列島内の分国について」(原載は『歴史科学』1〈1963年1月〉。訳は、鄭晋和訳が『歴史評論』165・168・169〈1964年5月・8月・9月〉と村山正雄・都竜雨訳〈昭和39年11月、朝鮮史研究会〉。及び井上秀雄・旗田巍編『古代日本と朝鮮の基本問題』〈1974年11月、学生社〉がある)
栗原朋信　「七支刀の銘文についての一解釈」(『日本歴史』第216号、昭和41年5月。のち上田正昭編『論集・日本文化の起源』第2巻「日本史」〈昭和46年5月、平凡社〉、又、同『上代日本対外関係の研究』〈昭和53年9月、吉川弘文館〉に収録)
坂元義種　「古代東アジアの日本と朝鮮ー「大王」の成立をめぐって」(『史林』51-4、昭和43年4月。のち上田正昭・井上秀雄編『古代の日本と朝鮮』〈昭和49年4月、学生社〉及び、同『古代東アジアの日本と朝鮮』〈昭和53年12月、吉川弘文館〉に収録)
同　「古代東アジアの<大王>についてー百済大王考補論」(『京都府立大学学術報告、人文』20、昭和43年。のち同『古代東アジアの日本と朝鮮』に収録)
藤間生大　『倭の五王』(昭和43年7月、岩波書店)
榧本杜人　「七支刀銘文再考ー青丘考古記3ー」(『朝鮮学報』第49輯、昭和43年10月。のち上田正昭編『論集・日本文化の起源』第2巻「日本史」〈昭和46年5月、平凡社〉に収録)
金錫亨　『古代朝日関係史ー大和政権と任那』(朝鮮史研究会訳、昭和44年10月、勁草書房)
栗原朋信　「「七支刀」の銘文からみた日本と百済・東晋の関係」(『歴史教育』第18巻4号、昭和45年4月。のち『上代日本対外関係の研究』〈昭和53年9月、吉川弘文館〉収録)
藤間生大　「現在における思想状況の課題としてー金錫亨『古代朝日関係史』について」(『歴史学研究』361、昭和45年6月)
西嶋定生　「ナゾの古代刀」(『読売新聞』、昭和46年2月11日付)
上田正昭　「石上神宮と七支刀」(『日本のなかの朝鮮文化』第9号)昭和46年3月。のち原島礼二編『論集日本歴史1 大和政権』〈昭和48年1月、有精堂〉に収録)
同　「解説 七支刀銘文の解読」(『論集・日本文化の起源』第2巻「日本史」、昭和46年5月、平凡社)
岡崎敬　「日本の古代金石文・13 泰和四年(369)百済七枝刀銘」(『古代の日本9 研究資料』、昭和46年10月、角川書店)
上田正昭　「古代史学と朝鮮 1.日朝関係史のゆがみ」(『世界』第330号、昭和48年5月。のち上田正昭・井上秀雄編『古代の日本と朝鮮』〈昭和49年4月、学生社〉に収録)
神保公子　「七支刀研究の歩み」(『日本歴史』第301号、昭和48年6月)
李進熙　「古代朝・日関係史研究の歪み」(江上波夫・上田正昭編『日本古代文化の成立』<昭和48年8月>及び李進熙『好太王碑の謎』<昭和48年11月、講談社>所収)
同　「七支刀研究の歪み」(同『好太王碑の謎』)
古田武彦　『失われた九州王朝』(昭和48年8月、角川書店)
横山貞裕　「七支刀銘文を再読して」(『読売新聞』昭和48年10月18日付夕刊)
菟田俊彦　「倭王旨の擬定と天孫本紀ー七支刀新見ー」(『國學院雑誌』第75巻12号)

李進熙　「七支刀銘文の総合調査を－横山貞裕氏の批判に答える－」（『読売新聞』夕刊、昭和 48 年 11 月 6 日付。後に同『広開土王碑と七支刀』〈昭和55 年 11 月、学生社〉に収録）
上田正昭　『日本の歴史2　大王の世紀』（昭和48 年12 月、小学館）
同　「倭国から日本へ」（『日本古代文化の成立』、昭和 48 年、毎日新聞社）
たなかしげひさ「石上神宮の七支刀と四天王寺の丙子椒林剣」（『神道史研究』22-3、昭和 49 年 5 月
李進熙　「七支刀銘文の調査を－確認100 年記念の公開に寄せて」（『毎日新聞』夕刊、昭和49 年10 月 21 日付。後に同『広開土王碑と七支刀』〈昭和55 年11 月、学生社〉に収録）
佐藤興治　「七支刀研究の略史」（『日本美術工芸』第434 号、昭和49 年 11 月）
李進熙　「七支刀研究の百年」（『歴史読本』12 月号、昭和49年。後に同『広開土王碑と七支刀』〈昭和 55 年 11 月、学生社〉に収録）
田口賢三　『邪馬台国の発見－卑弥呼と七支刀』（昭和50 年6 月、新人物往来社）
李進熙　「再び七支刀の調査を訴える－鈴木治氏の論評によせて」（『読売新聞』夕刊、昭和 50 年 8 月 6 日付。後に同『広開土王碑と七支刀』〈昭和 55 年 11 月、学生社〉に収録）
川口勝康　「七支刀銘」（『書の日本史』1、昭和50年、平凡社）
泊勝美　「七支刀は証拠物件か？」（『任那日本府はなかった』昭和50 年10 月、二見書房）
神保公子　「七支刀の解釈をめぐって」（『史学雑誌』第 84 編第 11 号、昭和50 年 11 月）
佐伯有清　「七支刀の銘文」（『北海道新聞』1975 年12 月 2 日付）
上田正昭　「倭国の世界」（『新書日本史』1、昭和 51 年 2 月、講談社）
佐伯有清　「七支刀の銘文を読む－「宣供供侯王」の新解釈－」（『別冊週刊読売』3-1、昭和51 年2 月）
同　「七支刀銘文の問題点」（『北海道新聞』昭和 51 年 1 月 13 日付。後に同『日本古代史の風貌』＜昭和52 年 9 月、吉川弘文館＞収録）
同　「“供供”の謎を解く－七支刀銘文の新解釈－」（『歴史書通信』12、昭和 51 年 3 月。後に同『日本古代史の風貌』収録）
同　「ひきがえると七支刀(1)」「ひきがえると七支刀(2)」（『歴史地理教育』248・249 号、昭和 51 年 3 月・4 月。後に同『日本古代史の風貌』収録）
同　「七支刀銘文その後」（『北海道新聞』昭和51 年 4 月 15 日付）
同　『古代史演習　七支刀と広開土王碑』（昭和52 年 4 月、吉川弘文館）
同　『三国史記倭人伝』（岩波文庫、1988 年 3 月）
坂元義種　「朝鮮（金石文）」（『考古学ゼミナール』山川出版社、1976 年3 月。後に同『百済史の研究』〈塙書房、1978 年 7 月〉に所収）
金延鶴　『任那と日本』「神功皇后の伝説－七支刀について－」（『日本の歴史』別巻1、昭和52 年10 月、小学館）
村上英之助「考古学から見た七支刀の製作年代」（『考古学研究』第25 巻第3 号、昭和53 年12 月）
李進熙　「好王太碑と七支刀」（『日本史の謎と発見』3、昭和 53 年、毎日新聞社。後に同『広開土王碑と七支刀』＜昭和 55 年 11 月、学生社＞に収録）
栗原朋信　「『書紀』神功・応神紀の「貴国」の解釈からみた日本と百済の関係」（「七支刀」の銘文をめぐる問題）「“泰和四年”時代の百済と東晋の関係」）（『古代東アジア史論集』下巻）昭和53 年 3 月、吉川弘文館。のち『上代日本対外関係の研究』、＜昭和53 年 9 月、吉川弘文館＞に

収録）
川口勝康　「五世紀史と金石文」（『シンポジウム鉄剣の謎と古代日本』新潮社、1979 年1 月）
村山正雄　「「七支刀」銘字一考－榧本論文批判を中心として－」（旗田巍先生古稀記念会編『朝鮮歴史論集』上巻、昭和 54 年 3 月、龍渓書舎。後に同『石上神宮七支刀銘文図録』＜平成 8 年 12 月、吉川弘文館＞に収録）
同　「『七支刀』銘字調査の一端」（『三上次男博士頒寿記念東洋史・考古学論集』、昭和 54 年 3 月、青山学院大学史学研究室。後に同朋社より再刊。また同『石上神宮七支刀銘文図録』＜平成 8 年12 月、吉川弘文館＞に収録）
李進熙　「好太王碑と七支刀」（『古代日本と朝鮮文化』1979 年 8 月, プレジデント社）
宋世丸　「百済七支刀銘文の新しい解釈」（『社会科学論文集』第 1 集、1980 年 5 月、在日朝鮮人科学者協会関東支部）
鈴木靖民　『増補古代国家史研究の歩み』「3. ヤマト政権の生成－七支刀の意味－」（昭和 55 年 8 月、新人物往来社）
坂元義種　「文字のある考古学史料の諸問題－七支刀とその銘文－」（『ゼミナール日本古代史』下、昭和 55 年 1 月、光文社）
李丙壽　『韓国古代史研究－古代史上の諸問題－』「百済七支刀考」（昭和 55 年 12 月、学生社。原載は『韓国古代史研究』＜1976 年 3 月、ソウル・博英社＞）
金延鶴　『百済と倭国』「漢城時代－七支刀と百済－」（昭和 56 年 5 月、六興出版）
宮崎市定　「七支刀」（『洛味』345 号）昭和 56 年 6 月。後に「七支刀の年代」として『独歩吟』＜昭和 61 年 4 月、岩波書店＞および『宮崎市定全集』21＜平成 5 年 2 月、岩波書店＞収録）
山尾幸久　「七支刀の銘について」（『村上四男博士和歌山大学退官記念 朝鮮史論文集』、昭和 56 年 9 月、開明書院）
佐々木稔　「銘文鉄剣の材質と製法」（『月刊百科』229）昭和56年、平凡社）
同　「七支刀と百練鉄」（『鉄と鋼』68-1、昭和57年）
鈴木靖民　「四世紀後半の百済と日本の関係－七支刀銘を中心として」（『歴史公論』第 8 巻第 4 号・通巻 77 号、昭和57 年4 月）
川口勝康　「七支刀について－冒頭の年号を中心にして」（同上）
宋世丸　「古代朝鮮の製鉄技術と百済七支刀」（同上）
宮崎市定　「七支刀銘文試釈」（『東方学』第 64 輯）昭和 57 年 7 月。後に同『古代大和朝廷』＜昭和 63 年 9 月、筑摩書房＞および『宮崎市定全集』21＜平成 5 年 2 月、岩波書店＞収録）
村山正雄　「七支刀銘文の＜侯王＞について」（『朝鮮学報』第 104 輯）昭和57 年 7 月。後に同『石上神宮七支刀銘文図録』＜平成 8 年12 月、吉川弘文館＞に収録）
山尾幸久　『日本古代王権形成史論』「Ⅲ編 東アジア史、5 章 倭王権と東アジア、2 節 石上神宮蔵七支刀の銘文」（昭和 58 年 4 月、岩波書店）
宮崎市定　『謎の七支刀－五世紀の東アジアと日本－』（中公新書、昭和 58 年 9 月、後に中公文庫＜平成 4 年 1 月＞に所収、また『宮崎市定全集』21＜平成 5 年2 月、岩波書店＞にも収録）
鈴木靖民　「石上神宮七支刀銘についての一試論」（坂本太郎博士頌寿記念『日本史学論集』上巻、昭和 58 年12 月、吉川弘文館）

稲田晃　「七支刀の製作年代」(『古代研究』27、昭和59年)
村尾次郎　「上古鉄製刀剣にまつはる諸問題－石上神宮の七支刀と川上部(裸伴)を中心に」(『大倉山論集』17、昭和59年8月)
福永光司　「石上神宮の七支刀」(『京都新聞』昭和60年2月7・8日付。後に同『道教と古代日本』＜昭和62年2月、人文書院＞収録)
平野邦雄　『大化前代政治過程の研究』「第3章 金石文の史実と倭五王の通交」「第1節 石上七支刀銘」(昭和60年6月、吉川弘文館)
村山正雄　「「七支刀」に関する宮崎市定論文について」(『三上次男博士喜寿記念論文集 歴史編』、昭和60年8月、平凡社。後に同『石上神宮七支刀銘文図録』＜平成8年12月、吉川弘文館＞に収録)
山尾幸久　『日本古代の国家形成』(昭和61年6月、大和書房)
李進熙　「日本にある百済の金石史料」(第9回馬韓百済文化国際学術会議『馬韓・百済文化研究の成果と課題』、1987年、圓光大学校馬韓・百済文化研究所)
山尾幸久　『古代の日朝関係』前篇3章1節「石上神宮七支刀銘の百済王と倭王」(平成元年4月、塙書房)
高寛敏　「百済近仇首王の対倭外交」(『朝鮮学報』第133輯、平成元年10月)
村山正雄　「石上神宮・七支刀銘文発見の経緯と若干の新知見」(『朝鮮学報』135、平成2年4月。後に同『石上神宮七支刀銘文図録』＜平成8年12月、吉川弘文館＞に収録)
上田正昭　「石上の神宝と祭祀」(『古代伝承史の研究』、平成3年5月、塙書房)
坂元義種　「七支刀銘文の釈文」(『京都府立大学女子短期大学部国語科研究報告』16、平成4年)
王仲殊　「石上神宮の七支刀」(同『中国から見た古代日本』平成4年11月、学生社)
延敏洙　「七支刀銘文の再検討－年号の問題と製作年代を中心に－」(『年報 朝鮮学』4、平成6年5月、九州大学朝鮮学研究会)
同　『日本古代国家形成期の対外関係研究』第1部「四・五世紀の倭国と東アジア」第1章「七支刀銘文にみえる対外関係」(九州大学大学院文学研究科博士学位論文、平成6年10月)
藤井稔　「影印『外来金器文字記』資料並びに解題」(『朝鮮学報』第155輯、平成7年4月)
同　「菅政友による七支刀銘文の釈読について－「大和国石上神宮宝庫所蔵六叉刀」と『外来金器文字記』の紹介を兼ねて－」(『古墳文化とその伝統』西谷真治先生古稀記念論文集、平成7年3月、勉誠社)
高口啓三　「石上神宮七支刀銘文の解釈」(『古代学研究』133、平成8年2月)
村山正雄　『石上神宮七支刀銘文図録』平成8年12月、吉川弘文館
◆図版編◆釈文編
・七支刀銘釈文比較表について
・七支刀銘釈文比較表
◆論文編
・七支刀銘字一考
・七支刀銘字調査の一端
・七支刀銘文の＜侯王＞について

・「七支刀」に関する宮崎市定論文について
・七支刀銘文発見の経緯と若干の新知見
・(補論１)「坂元義種論文」百済侯王制の存在についての再批判
・(補論２)「宮崎市定論文」とくに銘文裏面部の読み方について
・(補論３)「山尾幸久論文」その道教説の根拠について
[追録]「外来金器文字記」その他新資料の発見
[図版]「外来金器文字記」「石見見聞志」(抄)菅家所蔵

遠藤順昭　「石上神宮七支刀の銘字について」(『堅田直先生古稀記念論文集』、平成９年３月、真陽社)
鈴木靖民　「同時代史料で読む激動の東アジアー七支刀と広開土王碑ー」(『This is 読売』'99 年２月号、平成 11 年２月)
木村誠　「百済史料としての七支刀銘文」(『人文学報』第 306 号、平成 12 年 3 月、東京都立大人文学部)
吉田晶　『七支刀の謎を解くー四世紀後半の百済と倭』(平成13 年７月、新日本出版社)
倉西裕子　「“七支刀”銘文解釈をめぐる一試論」(『東アジアの古代文化』第 117 号、平成15 年11 月)
川口勝康　「刀剣の賜与とその銘文」(岩波講座『日本通史』第２巻、古代１、1993 年10 月)
奈良国立博物館『七支刀と石上神宮の神宝』(2004 年１月)
東野治之　「七支刀銘文の“聖音”と“聖晋”」(同『日本古代金石文の研究』、岩波書店、2004 年６月)
仁藤敦史　「ヤマト王権の成立」(日本史講座第１巻『東アジアにおける国家の形成』、東京大学出版会、2004 年５月)

日本における「広開土王碑」研究文献目録

［日本編］

青江秀	「東夫餘永楽太王碑名之解」		1887年7月
青江秀	「高句麗第十九世廣開土王墓碑之解」(写本)	早稲田大学図書館	1887年7月
横井忠直	「高勾麗古碑考（“明治写”本)」	宮内庁書陵部蔵	1884年(明治17年)
横井忠直	「高勾麗古碑考（“大正写”本)」	宮内庁書陵部蔵	1884年
横井忠直	「高勾麗古碑考（写本)」	九州大学図書館蔵	1884年7月
横井忠直	「高句麗古碑考」	東京都立中央図書館蔵	1884年12月
横井忠直	「高勾麗古碑考」	京都大学図書館蔵	1884年12月
横井忠直	「高勾麗古碑考」	京都大学図書館蔵	1888年10月
横井忠直	「高勾麗古碑考」	早稲田大学図書館蔵	1884年12月
谷森善臣	「高句麗広開土境好太王墓碑銘」２冊	宮内庁書陵部蔵	1886年3月写
横井忠直	「高勾麗古碑考」	大東急記念文庫蔵	不明
谷森善臣	「高句麗好太王墓碑銘」	宮内庁書陵部蔵	1886年
荻原巖雄	「東扶余永楽太王碑銘」	水谷悌二郎蔵	1886年3月
荻原巖雄(雕蟲居写本)	「東扶余永楽太王碑銘」	学習院大学図書館蔵	1885年1月
不明	「永楽王墓碑釋文」	水谷悌二郎蔵	
飯田武郷	「東扶余永楽太王碑銘附竹里山人考証」	宮内庁書陵部蔵	1886年
阿部弘蔵	「征韓考」(年代考一)	『文』1～11	1888年
邨岡良弼	「高句麗古碑」	『如蘭社話』巻８	1888年11月
横井忠直	「高勾麗古碑文」(青江本収録)	国会図書館蔵	1888年
中村忠誠	「高勾麗古碑徴」	東京都立中央図書館蔵	1889年6月
『会余録』第５集「高句麗碑出土記」「高句麗古碑考」「高句麗古碑釈文」			1889年6月(開明書院、1977年12月復刻)
横井忠直	「高勾麗碑出土記」	同上	
横井忠直	「高勾麗古碑考」	同上	
横井忠直	「高勾麗古碑釈文」	同上	
（参謀本部罫紙）「高勾麗古碑文」		京都大学図書館蔵	不明
不明	「高勾麗好太王碑文」	宮内庁書陵部蔵	不明
不明	「高麗古碑考」	無窮会図書館蔵	不明
菅政友	「高麗好太王碑銘考」	『史学雑誌』第22～25号	1891年9月～12月
菅政友	『任那考』		1893年5月
那珂通世	「高句麗古碑考」	『史学雑誌』第47～49号	1893年10月

			～12月
吉田東伍	『日韓古史断 全』	「第六章 高句麗及び鮮卑」(冨山房書店)	1893年12月
三宅米吉	「高麗古碑考」	『考古学会雑誌』第2編第1～3号	1898年1月～7月
三宅米吉	「高麗古碑考追加」	『考古学会雑誌』第2編第5号	1898年7月
	（後に、『文学博士三宅米吉著述集』＜目黒書店、1929年10月＞に所収）		
白鳥庫吉	「満州地名談ー附好太王の碑文に就て」	『白鳥庫吉全集』第5巻	1905年
白鳥庫吉	「満州地名談附好太王の碑文に就て」	『中央公論』第20巻第8号	1905年8月
浜田耕作	「高句麗好太王碑の話」	『早稲田興風学会雑誌』10-3	1906年
	後に『浜田耕作著作集』第七巻(同朋社出版、昭和62年10月)に収録		
菅政友	「任那考」	『菅政友全集』	1907年
大森松四郎	「高句麗永楽太王古碑」（再版）		1909年2月
鳥居龍蔵	『南満州調査報告』		1910年
津田左右吉	「好太王征服地域考」	『朝鮮歴史地理』第1巻	1913年
箭内互	「高句麗疆域沿革考」	『史学雑誌』1-1	1913年1月
関野貞	「満州輯安県及び平壌附近に於ける高句麗時代の遺跡」	『考古学雑誌』第5巻第3・4号	1914年11･12月
浅見倫太郎	「日韓交渉史蹟に関する二千年来の金石遺文」	『朝鮮及満州之研究』第1輯（朝鮮雑誌社『朝鮮及満州』臨時増刊）	1914年12月
種村宗人	「高句麗好太王碑説明」	『日本古代史』	1915年
今西龍	「好太王碑文」	『訂正増補大日本時代史』古代上	1915年
今西龍	「広開土境好太王陵碑に就て」	同上 下巻	
那珂通世	「高句麗古碑考」	『那珂通世遺書』	1915年
朝鮮総督府	「高句麗好太王碑縮本・同解説」	『朝鮮古蹟図譜』第1冊	1915年
黒板勝美	「高句麗好太王碑縮本・同解説」	『朝鮮彙報』	1918年
黒板勝美	「好太王碑に就て」	『歴史地理』第32巻第5号	1919年
前間恭作	「輯安高句麗広開土王陵碑」	『朝鮮金石総覧』上	1919年3月
	「朝鮮金石説明」	『朝鮮総督府月報』4-9	不明
権藤成卿	『南淵書』		1922年10月
葛城末治	「朝鮮金石文」	『朝鮮史講座』	1923年
葛城末治	「広開土王陵碑図版・釈文・解説」	『書道全集』第6巻	1923年
今西龍	「広開土境好太王陵碑に就て」	『朝鮮古史の研究』	1927年
			（1970年9月、国書刊行会複製）

青柳南冥	「好太王古碑の説明」	『朝鮮国宝遺物及古蹟大全』	1927年
太田亮	「高麗好太王碑」	『日韓古代史資料』	1928年
八木奘三郎	「鴨緑江畔の好太王碑と将軍塚」1～3	『亜東』第6巻第11号、第7巻2・3号	1929年11月 1930年2･3月
島田好	「高句麗好太王碑考」上、下、下の二	『満蒙』第11巻第11号、第12巻6・7号	1930年11月 1931年6･7月
朝鮮史編修会	「高句麗好太王碑」	『朝鮮史』第1編第1号	1932年3月
竹田栄喜	「好太王碑と南淵書」	『歴史公論』第2巻第4・5号	1933年
葛城末治	「三 輯安高句麗廣開土王陵碑」	『朝鮮金石攷』(大阪屋號書店)	1935年8月
末松保和	「好太王碑の辛卯について」	『史学雑誌』第46編第1号	1935年1月
三宅俊成	「安東省輯安縣県城附近高勾麗の遺蹟」	『満蒙』第16巻第9号	1935年9月
池内宏	「通溝二日半 満州国安東省輯安県に於ける高句麗の遺跡」	『東洋』第38巻第12号	1935年12月
満鉄総務部資料課	「輯安広開土境平安好太王陵碑」	『満州金石志稿』第1冊	1936年3月
藤田亮策	「満州国安東省輯安県に於ける高句麗遺跡の調査」	『青丘学叢』23	1936年2月
池内宏	「廣開土王碑發見の由来と碑石の現状」	『史学雑誌』第49編第1号	1938年1月
池内宏	「満州国安東省輯安県に於ける高句麗の遺蹟」	『考古学雑誌』第28巻第3号	1938年3月
藤田亮策	「満州に於ける高句麗遺跡」	『朝鮮』第272号	1938年
池内宏	「広開土王碑」	『通溝』巻上	1938年10月
池内宏・梅原末治	「満州国通化省輯安県に於ける高句麗の壁画墳」	『考古学雑誌』第30巻第9号	1940年9月
義山泰秀	「高句麗好太王碑に関する明治年間の二三の刊本について」	『書物同好会会報』第13号	1941年10月
末松保和	『任那興亡史』		1949年2月
酒井改蔵	「好太王碑面の地名について」	『朝鮮学報』第8輯	1955年10月
水谷悌二郎	「好太王碑考」	『書品』100号	1959年6月
松井如流	「好太王碑小引」	『書品』100号	1959年6月
末松保和	「高句麗好太王碑文」	『歴史教育』7-4	1959年4月
	(後に同『日本上代史管見』、〔自家版、1963年12月〕、又、『高句麗史と朝鮮古代史』末松保和著作集3〔吉川弘文館1996年4月〕に所収)		
青梧桐生	「高句麗好太王碑」	『書道』6-5	1960年
三品彰英	「高句麗広開土王陵碑」	『日本書紀朝鮮関係記事考証』(上巻)	1962年11月

末松保和	「上代史研究の外国史料の解説－附高句麗好太碑文」	『日本上代史管見』	1963年12月
金錫亨	「三韓三国の日本列島内分国について」	『朝鮮研究年報』6	1964年6月
末松保和	「高句麗広開土王碑文の調査研究」	『中央公論』200-8	1966年
梅原末治	「輯安好太王碑」	『朝鮮古文化綜鑑』第4巻	1966年
朴時亨	「広開土王の陵碑について」	『今日の朝鮮』127	1967年5月
朴時亨	「広開土王陵碑」	『朝鮮研究年報』9	1967年6月
朴慶植	朝鮮学会第18回大会研究発表要旨「広開土王碑文について」	『朝鮮学報』第46輯	1968年1月
井上秀雄	「任那日本府の再検討」	『大阪工業大学中央研究所所報』第2号	1969年
金錫亨	「『広開土王陵碑文』にあらわれた朝日関係」	『古代朝日関係史』勁草書房	1969年10月
梅原末治	「日韓併合の期間に行なわれた半島の古蹟調査と保存事業にたずさわつた一考古学徒の回想録」	『朝鮮学報』第51輯	1969年5月
旗田巍	「好太王碑文の読み方」	『歴史読本』9月号	1971年9月
中塚明	「近代日本史学史における朝鮮問題－とくに『広開土王陵碑』をめぐって－」	『思想』第561号	1971年3月
李進熙	「広開土王陵碑文の謎－初期朝日関係史上の問題点」	『思想』第575号	1972年5月
旗田巍	「偽作の思想的意味－好太王碑文と『南淵書』」	『読売新聞』6月3日付	1972年6月
佐伯有清	「高句麗広開土王碑をめぐるナゾ－解明された酒匂大尉の周辺－（上・下）」	『北海道新聞』11月10日・11日付	1972年11月
李進熙	考古学研究会第十八回総会研究報告要旨「広開土王陵碑研究上の諸問題」	『考古学研究』72	1972年3月
佐伯有清	「高句麗広開土王陵碑文再検討のための序章－参謀本部と朝鮮研究－」	『日本歴史』第287号	1972年4月
佐伯有清	「高句麗広開土王陵碑文の再検討－とくに「辛卯年」の倭関係記事をめぐって－」	『続日本古代史論集』上巻 吉川弘文館	1972年7月
前沢和之	「広開土王陵碑文をめぐる二・三の研究－辛卯年部分を中心として－」	『続日本紀研究』第159号	1972年6月
李進熙	「広開土王陵碑の謎　－初期朝日関係研究史上の問題点」	『思想』第575号	1972年
井上秀雄	『任那日本府と倭』	東出版	1972年12月
金達寿	「日本人学者に根づよい皇国史観」	『中国新聞』8月15日字	1972年8月
金貞培	「広開土王碑文」	『古代文化と帰化人』	1972年

李進熙	「広開土王陵碑研究史上の問題点－1910年代までの中国での研究をめぐって」	『考古学雑誌』第58巻1号	1972年7月
古田武彦	「高句麗好太王碑文の新事実－李進熙説への批判を中心として－」	『史学雑誌』81-12	1972年12月
井上秀雄	「高句麗の南下と広開土王陵碑」	『古代朝鮮』	1972年11月
李進熙	『広開土王陵碑の研究』	吉川弘文館	1972年10月
金貞培	「韓日古代関係史の一断面－広開土王陵碑文の問題点－」	『アジア公論』第1巻3号	1972年11月
李進熙	「なぜ『広開土王陵碑文』は改ざんされたか」	『流動』第5巻1号	1973年1月
李丙壽	「韓国古碑文の解釈－広開土王碑と北漢山碑を中心として」	『アジア公論』第2巻2号	1973年2月
李進熙	「広開土王陵碑の国際調査を」	『毎日新聞』2月20日付	1973年2月
上田正昭	「碑文の謎」	『大王の世紀』日本の歴史2	1973年
永井哲雄	「高句麗広開土王碑文の招来者をめぐる一・二の史料追加について」	『日本歴史』第296号	1973年1月
井上光貞	「朝鮮史家の日本古代史批判」	『古代史講座月報』13	1973年4月
井上秀雄	書評「李進熙著 広開土王碑の研究」	『史林』第56巻第3巻	1973年5月
佐伯有清	「高句麗広開土王の碑文と日本」（同『古代史の謎を探る』読売新聞社、後に上田正昭・井上秀雄編『古代の日本と朝鮮』〔1974年4月,学生社〕所収）		1973年5月
井上光貞	今週の読書「王碑のナゾ」	『毎日新聞』5月7日付	1973年5月
李進熙	「王碑のナゾをめぐって井上光貞氏の所論に答える」	『毎日新聞』夕刊5月15日付	1973年5月
旗田巍	「広開土王陵碑文の諸問題」	『アジアレビュー』通巻14号	1973年6月
梅原末治	「高句麗広開土王陵碑に関する既往の調査と李進熙氏の同碑の新説について」	『日本歴史』第302号	1973年7月
千寛宇	「広開土王碑文の新しい解釈」	『アジア公論』第2巻5号	1973年5月
金鐘武	「わたしが見た広開土王碑－碑文偽造の可能性は少ない－」	『アジア公論』第2巻5号	1973年5月
原島礼二	「大和王権」	『論集日本歴史』1	1973年
坂元義種	「論文評－佐伯有清‘高句麗広開土王碑文の再検討－とくに‘辛卯年’の倭関係記事をめぐって’」	『史学雑誌』82-6	1973年6月
古田武彦	「好太王碑文‘改削’説の批判－李進熙氏の『広開土王陵碑の研究』について」	『史学雑誌』82-6	1973年6月
李進熙	『好太王碑の謎』	講談社	1973年11月

古田武彦	「高句麗王碑と倭国の展開」	『失われた九州王朝』	1973年
千寛宇	「広開土王陵碑と任那問題」	『韓』第15号	1973年3月
旗田巍	「古代日朝関係史の研究－広開土王陵碑問題を中心にして」	『朝鮮史研究会会報』33	1973年7月
浜田耕策	「高句麗広開土王陵碑文の虚像と実像」	『日本歴史』第304号	1973年9月
佐伯有清	「高句麗広開土王碑をめぐる諸問題－李進熙氏の所論によせて－」	『歴史学研究』401	1973年10月
佐伯有清	「青江秀と広開土王碑文研究のナゾ－北海道に来ていた最初の碑文研究者（上・下）－」	『北海道新聞』11月9日・10日付	1973年11月
李進熙	「広開土王陵碑と酒匂景信」	『日本歴史』第307号	1973年12月
李進熙	「広開土王陵碑のこと」	『日本のなかの朝鮮文化』18	1973年6月
李進熙	「広開土王陵碑と歴史の虚構」	『倭から日本へ』二月社	1973年
李進熙	「謎に包まれた広開土王碑」	『古代の日本』日本の歴史1	1973年
李進熙	「古代朝・日関係史研究の歪み」	『日本古代文化の成立』毎日新聞社	1973年
金在鵬	「好太王碑文叙法考」	『朝鮮学報』第66輯	1973年1月
佐伯有清	「広開土王陵碑文研究の現状と課題	『史学雑誌』82-12	1973年12月
黛弘道	「好太王碑をめぐって」	『歴史と地理』219	1973年12月
金錫亨	「三韓三国の日本列島内分国について」	『古代日本と朝鮮の基本問題』	1974年11月
井上清	「『好太王碑の謎』李進熙著」	『現代の眼』15-3	1974年3月
直木孝次郎	「不動の定説に挑戦 日本古代史の根本的再検討が必要 李進熙『好太王碑の謎』」	『日本読書新聞』1月21日付	1974年1月
星野良作	「最近における広開土王碑文の研究－李進熙氏の提説をめぐって」	『史元』第18号 後に星野著書（1991）に所収	1974年7月
金在鵬	「好太王碑と日本国家の起源－江上波夫氏に」	『韓』３－３	1974年
浜田耕策	「高句麗広開土王陵碑文の研究－碑文の構造と史臣の筆法を中心として」	『朝鮮史研究会論文集』11	1974年3月
中塚明	「日本近代史の展開と‘朝鮮史像’－とくに参謀本部と歴史研究のかかわりについて」	同上	
佐伯有清	「高句麗広開土王陵文研究と紀年論争－参謀本部の古代日朝関係史観」	同上	
李進熙	「古代朝日関係史問題雑感」	同上	

李進熙	「皇国史観は克服されたかー広開土王陵碑の問題をめぐってー」	『歴史と文学』7号	1974年3月
井上清	（著者への手紙・読書室）「『好太王碑の謎』李進熙著」	『現代の眼』3月号	1974年3月
西嶋定生	「広開土王碑辛卯年条の読法について」	『図説日本の歴史』第3巻月報	1974年6月
中塚明	批評と紹介「古代朝・日関係史再検討への問題点　李進熙著『好太王碑の謎』」	『統一評論』113号	1974年7月
井上光貞	「日本古代史におけるひとつの問題点」	『教育手帳』491(日本書籍)	1974年7月
星野良作	「佐伯有清『碑文広開土王碑』」	『図書新聞』第1280号 9月21日	1974年9月
武田幸男等	「座談会 広開土王陵碑と古代東アジア」	『古代朝鮮と日本』龍渓書舎	1974年10月
浜田耕策	「高句麗広開土王陵碑文の研究ー碑文の構造と史官の筆法を中心として」	同上	
旗田巍	「広開土王陵碑文の諸問題」	同上	
佐伯有清	「高句麗広開土王碑文研究と紀年論争ー参謀本部の古代日朝関係史観」	同上	
鄭寅普	「広開土境平安好太王陵碑文釈略」	井上秀雄・旗田巍『古代日本と朝鮮の基本問題』学生社	1974年11月
李進熙	「広開土王陵碑をめぐる諸問題」	『史学雑誌』83-7	1974年7月
李進熙	「広開土王陵碑研究の現状と課題」	『歴史学研究』410	1974年7月
崔書勉	「太王陵古磚将来記」	『韓』3-8	1974年
佐伯有清	『研究史 広開土王碑』	吉川弘文館	1974年8月
星野良作	「広開土王碑をめぐる論争の進展ー激論のなかで明らかになった諸点」	『歴史と旅』第1号第2号 後に星野著作(1991)に所収	1974年2月
鈴木靖民	「古代朝日関係史研究の現況」	『史元』16号	1974年
中塚明	「参謀本部と歴史研究ー近代日本における‘朝鮮史像’と関連して」	『日本のなかの朝鮮文化』21	1974年3月
中塚明	「古代朝・日関係史再検討への問題点」	『統一評論』113	1974年7月
鬼頭清明	「近年の古代日朝関係史研究の諸問題ー論点整理のためのノートー」	『史学雑誌』84-4	1975年4月
村山光一	「古代日朝関係史研究の現状と課題」	『歴史評論』302	1975年6月
後藤孝典	「広開土王碑ー李進熙説に対するさまざまな反応について」	『東アジアの古代文化』創刊号	1975年4月
李進熙	『広開土王陵碑の研究』（増補版）	吉川弘文館	1974年11月
李進熙	「日本近代史学と『任那日本府』ーその歪められた研究史を中心としてー」	『東アジアの古代文化』第4号	1975年1月
金在鵬	「好太王碑文の叙法と解釈」	『日本古代国家と朝鮮』	1975年

林屋辰三郎	「古代の日本と朝鮮―開土王陵碑前後―」	『日本のなかの朝鮮文化』第26号	1975年6月
平野邦雄	「広開土王陵碑の問題点」	『ヤマト王権と朝鮮』	1975年
泊勝美	「高句麗好太王碑の謎」	『任那日本府はなかった』二見書房	1975年
金在鵬	「私の日本古代史研究 好太王碑文と私」	『朝日アジアレビュー』6	1975年
佐伯有清	「明治二十一年本、高句麗古碑考の成立」	『名古屋大学日本史論集』下	1975年7月
佐伯有清	「1．好太王碑文は何を語るか」	森克己・田中健夫編『海外交渉史の視点』日本書籍	1975年10月
佐藤治郎	「佐伯有清著『研究史 広開土王碑』」	『歴史評論』302	1975年6月
犬丸義一	「近代史家のみた古代史論争」	『季刊 三千里』第7号	1976年8月
李進熙	「好太王碑と近代史学」	『季刊 三千里』第7号	1976年8月
岡田英弘	「広開土王と仁徳天皇」	『倭国の時代－現代史としての日本古代史－』	1976年
植村清二	「古代史おぼえ書」	『諸君』1月号	1976年1月
高斗東	「広開土王碑文詳釈」	『親和』267号	1976年3月
佐伯有清	「横井忠直と『高麗古碑本の来由』の出現	『日本歴史』335	1976年4月
佐伯有清	『広開土王碑と参謀本部』	吉川弘文館	1976年5月
鬼頭清明	「近年の古代日朝関係史研究の諸問題」	『日本古代国家の形成と東アジア』校倉書房	1976年6月
高斗東	「広開土王陵碑文詳釈」	『月刊文化財』52	1976年
新蔵正道	「広開土王碑永楽六年条に関する考察」	『ヒストリア』第155号	1976年10月
水谷悌二郎	『好太王碑考』(解説・末松保和)	開明書院	1977年9月
李進熙	『好太王碑と任那日本府』	学生社	1977年10月
中塚明	「近代日本史学における朝鮮問題－とくに『広開土王陵碑』をめぐって」	李進熙編『好太王碑と任那日本府』学生社	1977年10月
旗田巍	「広開土王陵碑文の諸問題」	同上	
鬼頭清明	「近年の古代日朝関係史研究の諸問題」	同上	
犬丸義一	「近代史家のみた古代史論争」	同上	
佐伯有清	『七支刀と広開土王碑』	吉川弘文館	1977年4月
金鐘武	「好太王碑について－古典解釈の一管見－」	『韓』60	1977年1月
星野良作	「日本古代史の基本的問題－広開土王碑の謎」	『研究と評論』第18号 後に星野著作(1991)に所収	1977年3月
金廷鶴	「高句麗の広開土王碑」	『任那と日本』	1977年
佐伯有清	「広開土王碑文研究への警鐘」	『古代東アジアと日本』	1977年
金仁顥	「広開土王碑の改ざんについて－金鍾武博士の新しい見解は誤り－」	『アジア公論』第6巻5号	1977年5月

金仁顥	「好太王碑文の改ざんの直接証拠」	『東アジアの古代文化』15	1978年
末松保和	「好太王碑と私」	『古代東アジア史論集』(上) 吉川弘文館	1978年3月
	［後に『高句麗と朝鮮古代史』末松保和著作集3,〔1996年4月，吉川弘文館〕所収］		
笠井倭人	「広開土王碑に対する石灰塗付作戦説への疑問」	『古代東アジア史論集』(上)	1978年3月
武田幸男	「高句麗好太王碑文にみえる帰王について」	『古代東アジア史論集』上巻，吉川弘文館	1978年3月
武田幸男	「広開土王碑文辛卯年条の再吟味」	『古代史論叢』上巻 吉川弘文館	1978年9月
末松保和	「好太王碑文研究の落穂」	『日本歴史』368	1979年1月
武田幸男	「高句麗広開土王紀の対外関係記事」	『三上次男博士頌寿紀念論集』	1979年3月
武田幸男	「広開土王碑からみた高句麗の領域支配」	『東洋文化研究所紀要』78	1979年3月
友田吉之助	「好太王碑文と顓頊暦紀年法」	『島根医大紀要』1	1978年12月
田中俊明	「古代日本の‘南朝鮮経営’説の現段階－金錫亨論文の論点を中心として」	『統一評論』第12号	1979年
李進熙	「好太王碑と七支刀」	『古代日本と朝鮮文化』プレジデント社	1979年8月
李進熙	『広開土王碑と七支刀』	学生社	1980年11月
坂元義種	「文字のある考古学史料の諸問題」「好太王碑文－碑文第二段の記述法からみた辛卯年記事を中心に－」	『ゼミナール日本古代史』下 光文社	1980年1月
鈴木靖民	「ヤマト政権と朝鮮」	『古代国家史研究の歩み』新人物往来社	1980年8月
鄭杜熙	「広開土王陵碑辛卯年記事の再検討」	『アジア公論』第9巻8号	1980年8月
末松保和	「好太王碑文研究の流れ－水谷悌二郎氏の研究を中心として」	『東アジア世界における日本古代史講座』3 吉川弘文館	1981年3月
	（後に『高句麗と朝鮮古代史』末松保和著作集3〔1996年4月，吉川弘文館〕に収録）		
徳野ほか	「好太王碑にみる日朝関係」	『市民の古代』2	1980年
田中俊明	「高句麗の金石文」	『朝鮮史研究会論文集』18	1981年3月
中国鉄道	「好太王碑写真」	『中国鉄道の旅』	1981年
全浩天	「第五章 広開土王碑文をめぐる朝鮮観」	『古代史にみる朝鮮観』	1981年6月
白崎昭一朗	「広開土王碑論序説」	『五條古代文化』第21号	1981年11月
奥田尚	「高句麗好太王碑文解釈試案」	『追手門学院大学文学部紀要』15	1981年12月
李亨求	「偽作‘倭’字考」1 ～13	『統一日報』	1982年1月

		1月8日～1月27日	
金子鷗亭	『古碑帖臨書精選・第二期第二十四巻　好太王碑 爨宝子碑』	日貿出版社	1982年2月
浜田耕策	「好太王碑文の一、二の問題」	『歴史公論』第8巻第4号	1982年4月
李亨求・朴魯姫	「広開土大王陵碑文のいわゆる“辛卯年”記事」	『アジア公論』第11巻10・11月号	1982年10・11月
古田武彦	「画期に立つ好太王碑（講演録）」	『市民の古代』4	1982年
	（後に、同『古代の霧の中から』＜徳間書店、1985年11月＞に所収）		
藤田友治	「好太王碑の開放を求めて」	『市民の古代』4	1982年
長正統	「九州大学所蔵好太王碑拓本の外的研究」	『朝鮮学報』99・100輯合併号	1983年9月
星野良作	「広開土王碑文研究の新展開－李亨求氏の新説に接して－」	『日本古代政治史論考』（後に星野著作〈1991年1月〉に所収）	1983年9月
白崎昭一郎	「広開土王碑の問題点」	『藤沢一夫先生古稀紀念古文化論叢』	1983年7月
藤田友治	「好太王碑改削説への反証」	『市民の古代』5	1983年
李亨求	「広開土大王陵碑文再び偽作をただす－中国王健群所長論文に対して」	『統一日報』2月23・24日付	1984年2月
佐伯有清	広開土王碑研究の最近の動向	『東京新聞』3月14日	1984年3月
佐伯有清	王健群氏『好太王碑の発見と採拓』を読む	『東方』38	1984年5月
井上秀雄	「古代日朝関係史観の変遷」	『歴史と人物』168号	1984年12月
王健群	『好太王碑の研究』	雄渾社	1984年12月
佐伯有清	「好太王碑研究の百年」	『読売新聞』12月18日	1984年12月
鯨清	「入門・広開土王碑をめぐる論争」	『季刊 邪馬台国』第22号	1984年12月
高明士	「台湾所蔵の高句麗好太王碑拓本」	同上	
高明士	「労貞一院士を訪ね高句麗好太王碑を談ず」	同上	
王健群	「好太王碑の発見と採拓」	同上	
王健群	「好太王碑六年丙申〔三九六年〕・八年戊戌〔三九八年〕条の考釈」	同上	
井上秀雄	「広開土王碑の現地に立つ」	同上	
白崎昭一郎	「広開土王碑は何を語るか」	同上	
笠井倭人	「‘石灰塗付作戦’はあったのか」	同上	
久保田穣	「一弁護士の見た李進熙氏の『広開土王陵碑の研究』」	同上	
藤田友治	「好太王碑論争の決着」	『市民の古代』6	1984年
川崎晃	「高句麗好太王碑と中国古典」	『NHK学園紀要』第9号	1984年

佐伯有清	「王健群氏「好太王碑の発見と採拓」を読む」	『東方』38	1984年5月
玄雄	「広開土大王碑を尋ねてー中国現地踏査ー」	『アジア公論』第13巻9号	1984年9月
全浩天	「広開土王碑文「改ざん」説をめぐって」	『統一評論』234	1984年11月
井上秀雄	「古代日朝関係史観の変遷」	『歴史と人物』168号	1984年12月
李進熙	「広開土大王碑文の変造は間違いない」	『アジア公論』第13巻11号	1984年11月
	シンポジウム「四、五世紀の東アジアと日本ー好太王碑を中心に」	『東方』46	1985年1月
佐伯有清	「広開土王碑文にみえる“倭”	『北海道新聞』1月22日	1985年1月
井上秀雄	「広開土王碑の視察報告」	『歴史読本』第30巻第1号	1985年1月
千寛宇	「広開土王陵碑文再論」上・下	『アジア公論』第14巻2･3号	1985年2月・3月
古田武彦	「第三部 東アジアの動乱と九州王朝」「第二章 高句麗好太王碑」	『古代は輝いていたII 日本列島の大王たち』朝日新聞社	1985年2月
辛玲実	「高句麗の古都集安を訪ねてー広開土王碑見学を主たる目的に」	『統一評論』237	1985年2月
高句麗史研究会	「現代語訳　高句麗好太王碑文」	『季刊 耶馬台国』第23号	1985年3月
鈴木靖民	「四、五世紀の倭と好太王碑文ー好太王碑シンポジウムからー」	『歴史読本』第30巻第7号	1985年4月
江上波夫	「好太王碑文をみて」	『東アジアの古代文化』43	1985年4月
李進熙	「王健群氏の“好太王碑の研究”を読んで」	同上	
奥野正男	「好太王碑文の“倭”と渡来集団」	同上	
留目和美	「好太王碑文をめぐって―シンポジウム“四･五世紀の東アジアと日本”傍聴記―」	同上	
李進熙	「好太王碑を現地に訪ねて」	『季刊三千里』44	1985年11月
鈴木英夫	「広開土王碑文加羅関係記事の基礎的研究」	『千葉史学』8号	1985年5月
	（後に同『古代の倭国と朝鮮諸国』〈青木書店、1996年2月〉）		
上田正昭・李進熙	「〈対談〉好太王碑と近代史学」	『季刊三千里』42	1985年5月
多田治三朗	「広開土王碑が語る古代と近代」	『文化評論』291	1985年6月
鈴木靖民	「好太王碑文の倭記事」	『東アジアの古代文化』44	1985年7月
田村節子	「好太王碑文と倭」	『東アジアの古代文化』44	1985年7月
李進熙	「広開土王陵碑文の共同調査を」	『アジア公論』153号	1985年7月
辛澄恵	「広開土王碑と朝鮮族」	『季刊三千里』第43号	1985年8月

朴時亨	『広開土王碑』	そしえて	1985年8月
木屋隆安	「好太王碑の改ざんはなかった」	『時の課題』8月号	1985年8月
古畑 徹	批評・紹介「王健群著『好太王碑の研究』」	『東洋史研究』44-2	1985年9月
上田正昭・	「第一章 古代日朝関係史の視点」	『日本と朝鮮の二千年』	1985年9月
姜在彦編	「第四章 高句麗好太王の碑文」	大阪書籍	
古田武彦	「その六 疑考・好太王碑－王健群説をめぐって」	『古代史を疑う』	1985年10月
川崎晃	「高句麗好太王碑と中国古典（其の一）」	『NHK学園研究紀要』第9号	1985年3月
旗田巍	「広開土王陵碑文と古代日朝関係史」	『高句麗文化展』図録	1985年
李進熙	『好太王碑の謎』	講談社文庫	1985年7月
寺田隆信・	『好太王碑探訪記』	日本放送出版協会	1985年3月
井上秀雄編			
寺田隆信編著	『好太王碑－50 年ぶりに見た高句麗の遺跡－』	ぎょうせい	1985年9月
東方史学会	「東方史学会好太王碑訪中団の報告」	『市民の古代』7	1985年11月
事務局			
古田武彦	「中国の好太王碑研究の意義と問題点」	同上	
王健群ほか	「討論・好太王碑をめぐって」	同上	
古田武彦	「好太王碑と九州王朝」	同上	
耿鉄華	「高句麗好太王碑及び高句麗王朝と好太	同上	
（老田裕美訳）	王について」		
藤田友治	「好太王碑の新たな論争点」	同上	
李進熙	「好太王碑を現地に訪ねて」	『季刊 三千里』44	1985年11月
三上次男	「好太王碑研究シンポジウムへの期待」	三上次男ほか『シンポジウム好太王碑』東方書店	1985年12月
佐伯有清	「広開土王碑文研究の100年」	同上	
王健群	「好太王碑研究に関するいくつかの問題」	同上	
李進熙	「広開土王陵碑の科学的調査を」	同上	
西嶋定生	「好太王碑文辛卯年条の読み方について」	同上	
武田幸男	「四～五世紀の朝鮮諸国」	同上	
上田正昭	「四・五世紀の日朝関係－七支刀と好太王碑をめぐって－」	同上	
シンポジウム	「四、五世紀の東アジアと日本－好太王碑を中心に－」	同上	
王健群	「好太王碑についてのいくつかの情況」	同上	
王健群	「九州大学蔵好太王碑拓本の拓製年代について」	同上	

西嶋定生	「広開土大王碑文辛卯年条の読み方について」	『三上次男博士喜寿記念論文集』歴史編	1985年8月
李進熙	「最近の広開土王陵碑にかんする論争－王健群氏の新説と国際シンポジウム」	『玄岩申国柱博士華甲紀念韓国学論叢』	1985年10月
朴時亨（全浩天訳）	『広開土王陵碑』	そしえて	1985年8月
古田武彦	「第三章 画期に立つ好太王碑」	『古代の霧の中から－出雲王朝から九州王朝へ－』徳間書店	1985年11月
三宅俊成	「国岡上広開土境平安好太王碑は贋造物か」	『在満二十六年・遺跡探査と我が人生の回想』三宅中国古代文化調査室	1985年12月
高明士	「高句麗好太王碑研究の近況を展望する」	『季刊邪馬台国』26	1985年12月
劉永智	「好太王碑の発見およびその他」	『季刊邪馬台国』26	1985年12月
宮崎雅弘	「高句麗広開土王碑に見える“倭”について」	『季刊邪馬台国』26	1985年12月
川崎晃	「高句麗好太王碑と中国古典（其の二）」	『NHK学園研究紀要』第10号	1986年3月
藤田友治	『好太王碑論争の解明』	新泉社	1986年9月
浜田耕策	「高句麗広開土王陵墓比定論の再検討」	『朝鮮学報』119・120	1986年7月
市民の古代研究会	「高句麗文化と楽浪墓」	『市民の古代』8	1986年11月
高句麗文化展実行委員会	『高句麗と日本古代文化』		1986年
劉永智	「好太王碑辛卯年記事の探求」	『国学院雑誌』第87巻4号	1986年4月
鈴木英夫	「広開土王碑文加羅関係記事の基礎的研究」	『千葉史学』第8号	1986年5月
武田幸男	「好太王碑の周辺」	『歴史と地理』第369号	1986年5月
辻本雅英・阿波谷伸子他	「館蔵好太王碑拓本二種」	『ビブリア』87	1986年10月
福宿孝夫	「好太王碑の新判読文字＜辛卯年条ほか、定説翻す字体解明＞」	全国大学書道学会研究発表資料	1986年10月
武田幸男	「廣開土王碑の百済と倭」	『百済研究』第17輯	1986年12月
川崎晃	「高句麗好太王碑と中国古典（其の三）」	『NHK学園研究紀要』第11号	1987年3月
古畑徹	「広開土王碑の発見・採拓に関する若干の史料紹介」	『朝鮮学報』第123輯	1987年4月

佐伯有清	「高句麗広開土王時代の墨書銘」	『東アジアの古代文化』51	1987年4月
杉谷保憲	「広開土王碑取材苦行記」	『アジア公論』第16巻第5号	1987年5月
山田宗睦	『好太王碑論争の解明』書評	『市民の古代』9	1987年
星野良作	「酒匂景信将来の広開土王碑文について」	『東アジアの古代文化』50	1987年1月
星野良作	「酒匂景信将来の広開土王碑文の復元的研究－碑文研究初期における釈文の分析を通じて－」	『東アジアと日本』考古・美術篇　吉川弘文館	1987年12月
金子鴎亭	「好太王碑の書について」	『書道研究』創刊号	1987年6月
福宿南嶋	「好太王碑文を読む」	同上	
井上秀雄	「古代朝鮮金石文としての好太王碑」	同上	
比田井南谷	「わが好太王碑拓本考」	同上	
浜田耕作	「高句麗好太王碑の話」	『浜田耕作著作集』第7巻 同朋社出版	1987年10月
武田幸男	「広開土王碑の拓本を求めて」	『朝鮮学報』126	1988年1月
川崎晃	「高句麗好太王碑と中国古典」(其の四)	『NHK学園研究紀要』第12号	1988年3月
武田幸男	「廣開土王碑おぼえがき(上) 碑文解釈の鍵――「大前置文」説を提唱する」	『UP』184, 東京大学出版会	1988年2月
武田幸男	「廣開土王碑おぼえがき(下)伝承のなかの原石拓本－李雲従拓本の周辺を探る」	『UP』185, 東京大学出版会	1988年3月
池田温	（新刊閲覧室）「『廣開土王碑原石拓本集成』武田幸男編著」	『書道研究』 6	1988年6月
武田幸男	『広開土王碑原石拓本集成』	東京大学出版会	1988年3月
武田幸男	「『碑文之由来記』考略－広開土王碑発見の実相－」	『榎博士頌寿記念東洋史論叢』汲古書院	1988年11月
佐竹保子	「中国碑文字における三百年代後半の転換－広開土王碑の文字との関連」	『東北大学日本文化研究所研究報告』	1988年
読売テレビ放送編	『好太王碑と集安の壁画古墳』	木耳社	1988年9月
武田幸男	「好太王の時代－四・五世紀の高句麗と東アジア－」	『好太王碑と集安の壁画古墳』木耳社	1988年9月
鈴木靖民	「好太王碑の倭の記事と倭と実体」	同上	
浜田耕策	「好太王碑をめぐる争点」	同上	
杉谷保憲	「国際関係に揺れる好太王碑」	同上	
王健群等	『好太王碑と高句麗遺跡』	読売新聞社	1988年6月
耿鉄華	「好太王碑発見時期について新たな検討」	『市民の古代』10	1988年
耿鉄華	「好太王碑は火で焼かれる以前に完全な	『市民の古代』10	1988年

	拓本ではなかった」		
中小路駿逸	「好太王碑文私見」	『市民の古代』10	1988年
鈴木靖民	「好太王碑の倭をめぐる研究動向」	『唐代史研究会会報』2	1989年2月
佐伯有清	「武田幸男著『広開土王碑原石拓本集成』」	『日本歴史』490	1989年3月
武田幸男	『高句麗史と東アジアー「広開土王碑」研究序説ー』	岩波書店	1989年6月
星野良作	「酒匂景信将来の広開土王陵碑文の一考察ー碑文最末‘倭’字の由来をめぐってー」	『研究と評論』第50号 後に星野著作(1991)に所収	1989年11月
山尾幸久	（書評）「武田幸男著『廣開土王碑原石拓本集成』」	『朝鮮学報』130	1989年1月
武田幸男	「中野政一『鴨緑行』並びに解説ー或る軍人の見た大正二年の朝鮮西北境ー」	『朝鮮学報』131	1989年4月
笠井倭人	「好太王碑水谷拓本の一考察」	『日本歴史』第497号	1989年10月
高寛敏	「永楽一〇年、高句麗広開土王の新羅救援戦について」	『朝鮮史研究会論文集』27	1990年3月
白崎昭一朗	「広開土王碑拓本の編年」	『福井考古学会会誌』8	1990年5月
浜田耕策	「朝鮮に伝わった広開土王稜碑文」	『東アジア古文書の史的研究』刀水書房	1990年9月
鈴木靖民	「広開土王碑文の“倭”関係記事―最近の研究成果をめぐってー」	『東アジア古文書の史的研究』刀水書房	1990年9月
浜田耕策	「故足立幸一氏寄贈の京都府立福知山高校所蔵の広開土王碑拓本について」	『調査研究報告』24・学習院大学東洋文化研究所	1990年9月
佐伯有清	武田幸男著『高句麗史と東アジアー“広開土王碑”研究序説』	『日本歴史』508	1990年9月
武田幸男	「高句麗廣開土王碑と目黒区所蔵拓本」	『目黒区所蔵 高句麗広開土王碑拓本写真集』東京都目黒区守屋教育会館郷土資料室	1990年11月
横山昭一	「目黒区所蔵拓本の採拓年代と外的特徴」	同上	
星野良作	『広開土王碑研究の軌跡』	吉川弘文館	1991年1月
福宿孝夫	『日本古器銘と好太王碑』	中国書店	1991年
高寛敏	「広開土王陵碑文のいわゆる辛卯年条について」	『大阪経済法科大学アジア研究所年報』2	1991年3月
川崎晃	「高句麗好太王碑と中国古典」	黛弘道編『古代国家の歴史と伝承』吉川弘文館	1992年3月
李進熙	「広開土大王碑をめぐる論争」	『青丘学術論集』第2集 財団法人韓国文化研究振興	1992年3月
佐伯有清	「広開土王碑の謎はどこまでわかったかー最初の新聞報道をめぐってー」	歴史教育者協議会編『知っておきたい韓国・朝鮮』	1992年5月

杉山信三・小笠原好彦	『高句麗の都城遺跡と古墳』	同朋舎	1992年8月
金昌鎬(竹谷俊夫訳)	「広開土太王碑辛卯年条の再検討－日本学界の任那日本府説に対する反論(Ⅱ)－」	『天理参考館報』第5号	1992年10月
佐伯有清	広開土王碑はなぜ建てられたのか	歴史教育者協議会編『100問100答日本の歴史』2	1992年11月
武田幸男	「中国最初期の広開土王碑文研究－傳雲龍と王志修の場合－」	『西巖趙恒来教授華甲紀念韓国史学論叢』西巖趙恒来教授華甲紀念論叢刊行委員会	1992年12月
林紀昭	「広開土王碑－辛卯年条空闕二字雑感－」	杉山信三・小笠原好彦編『高句麗の都城遺跡と古墳』同朋舎	1992年8月
白崎昭一郎	『広開土王碑文の研究』	吉川弘文館	1993年6月
東京都目黒区教育委員会編	『広開土王碑と古代日本』	学生社	1993年9月
浜田耕策	「高句麗広開土王碑研究の歩み」	同上	
武田幸男	「碑文からみた四・五世紀の高句麗」	同上	
鈴木靖民	「四・五世紀の高句麗と倭」	同上	
横山昭一	「東京都目黒区所蔵拓本について」	同上	
松原孝俊	「神話学からみた『広開土王碑文』」	『朝鮮学報』145	1993年10月
武田幸男	「その後の広開土王碑研究」	『年報朝鮮学』3	1993年3月
白崎昭一郎	「広開土王碑の語りかけるもの」	『季刊 邪馬台国』50号	1994年
角林文雄	「高句麗広開土王碑文にみえる各国の戦略」	『日本書紀研究』19冊	1994年2月
李成市	「表象としての広開土王碑文」	『思想』842	1994年8月
李鐘學	「広開土王碑文の倭に関する一考察」	『東アジアの古代文化』81号	1994年10月
大橋恒平	「好太王碑の特性－王領の谷の守護碑－」	『古代文化を考える』第30号	1994年11月
徐建新	史料紹介「北京に現存する好太王碑原石拓本の調査と研究－王少箴旧蔵本と北京図書館蔵本を中心にして－」	『史学雑誌』第103編第12号	1994年12月
李鐘學	「廣開土王碑文の倭の実体」	『東アジアの古代文化』85号	1995年11月
東京国立博物館	『高句麗広開土王碑拓本』		1996年2月
弘中芳男	「倭の征服王朝と広開土王碑－北上した騎馬民族の謎－」	『古代文化を考える』第33号	1996年11月

鈴木靖民	「日本における廣開土王碑拓本と碑文の研究」	（社）高句麗研究会編『廣開土好太王碑研究 100 年』学術文化社，ソウル	1996 年 12 月
田中俊明	「高句麗の北方進出と『廣開土王碑文』」	同上	
濱田耕策	「廣開土好太王時代の‘聖王’秩序に対して」	同上	
李成市	「廣開土王碑の立碑目的と高句麗の守墓役割」	同上	
曺喜勝	「高句麗の南方進出と広開土王碑に反映された“倭”の正体」	『東アジアの古代文化』93	1997 年 11 月
鈴木靖民	「同時代史料で読む激動の東アジア―七支刀と広開土王碑―」	『This is 読売』1999 年 2 月号	1999 年 2 月
武田幸男	「天理図書館蔵「高句麗広開土王陵碑」拓本について」	『朝鮮学報』第 174 輯	2000 年 1 月
武田幸男	「『水谷旧蔵精拓本』の実像を求めてーその実態解明と類型論ー」	『朝鮮文化研究』7	2000 年 3 月
武田幸男	「広開土王碑「碑文抄本」の研究」	書学書道史学会編『国際書学研究/ 2000』萱原書房刊	2000 年 9 月
武田幸男	「「広開土王碑」の土難・水難・火難説」	『朝鮮学報』第 176・177 輯	2000 年 10 月
市川繁	「任昌淳氏所蔵広開土王碑拓本の跋文について」	『東アジアの古代文化』110 号	2002 年 2 月
李鐘學	「広開土王碑文十年庚子条の新考察ー蔚山地域積石塚の謎を探るー」	『東アジアの古代文化』110 号	2002 年 2 月
白承忠	「広開土王碑文からみた加耶と倭」	第 5 回歴博シンポジウム「古代東アジアにおける倭と加耶の交流」国立歴史民俗博物館	2002 年 3 月
	後に、国立歴史民俗博物館研究報告第 110 輯『古代東アジアにおける倭と加耶の交流』〈2004 年 2 月〉に所収）		
山崎雅稔	「広開土王時代の高句麗の南進と倭王権の展開」	『広開土太王과 高句麗南進政策』高句麗研究会	2002 年 12 月
武田幸男	「いままた“辛卯年”条を考える」	『歴史と地理』561	2003 年 2 月
李進熙	『好太王碑研究とその後』	青丘文化社	2003 年 6 月
古田武彦	「アイアン・ロード(鉄の道)ー韓王と好太王の軌跡ー」	『昭和薬科大学紀要』第 20 号	
古田武彦	「好太王碑の史料批判ー共和国(北朝鮮)と中国の学者に問うー」	『昭和薬科大学紀要』第 20 号	
武田幸男	「「広開土王碑」墨本の基礎的研究」	『東方学』第 107 輯	2004 年 1 月

小林敏男　「古代初期日朝関係史－とくに好太王碑文辛卯年条を中心として－（上）」　『大東文化大学紀要』42号　2004年3月